

無駄にしないように。

名古屋市立高針台中学校3年

加藤 茉奈

私の家には、ゴミ箱がたくさんある。可燃ゴミ、不燃ゴミ、資源ゴミ。カラフルなゴミ箱達に書かれている文字に、私ははじめ「げっ」と顔をしかめたのを覚えている。母は、いつからかゴミの分別をしっかりとるようになった。ゴミ箱が増え、ゴミ捨てる日が増え、どれがどのゴミか分からなくて、ゴミ箱達と睨めっこする日が増えた。私はうんざりしながら母に文句を言う。すると、母に思いもよらぬ言葉を言われた。

「ゴミ分別しないと、税金の無駄遣いだよ。」

税金という、ゴミとは全く関係なさそうな単語がでてきて、驚いた。なぜ、ゴミの分別をしないことが税金の無駄遣いに繋がるのだろうか。不思議に思って、詳しく調べてみると、興味深い記事を見つけた。

日本のゴミ処理は、税金によって行われている。市区町村が街を綺麗にするために、税金を使用しているのである。しかし、本来のゴミ処理にかかるお金よりも、実際に使われているお金は多額だ。なぜならば、ゴミの分別が正しく行われていないために、通常よりもゴミ処理に手間がかかってしまうからなのだ。

例えば、可燃ゴミの中にスプレー缶が入っていた場合、清掃車の中で爆発が起こり、一台千万円という清掃車が使用不可能になる。実際、年間六百件もの清掃車火災が起きている。更に、可燃ゴミの中に少しでも不燃ゴミが入っている場合、それらが積もって焼却炉の投入口が詰まってしまうことがある。その際、焼却炉の火を一度消してかき出さなくてはならないが、その後の再点火には三百万もの税金がかかる。

これらは、わたしたち一人ひとりが丁寧にゴミの分別を行い、少しでもゴミ処理への負担をなくせば減らせたはずの「無駄な税金」だ。

最近、税金の無駄遣い、という言葉聞いた。それは、ほとんどが政治家に対する言葉であったが、私は、それを唱えた人達に聞きたい。

「あなたは税金を無駄にしていますか」と。

日本人は、税金に対して厳しい、と感じることがある。でも、一度だけで良いから、違う視点で「税金」の在り方を見てみてほしい。

自分達が住む街が綺麗でいれること、無料で学校に行けること、安く病気の治療ができること、なにより、今私達が生きていること。

税金の支えによって、「今」がある。その恩恵を、私達は忘れてはならない。

自分が支払った税金を、「無駄」にしないように、私達にできることがあると知った。少し意識して、ゴミを分けて捨てるだけ。たったそれだけでも、たくさんの「豊かさ」が守られる。

だから私は今日も、ゴミを片手にカラフルなゴミ箱達と睨めっこを始めるのである。

宇都宮大学共同教育学部附属中学校 3年

岩佐 葵

駅から伸びるまっすぐな道路。その中央をすべるように進む黄色と黒の路面電車。私が住む宇都宮市に開業したLRT（次世代型路面電車システム）である。このLRTに対し、開業前の私には「税金の無駄遣いなのではないか。」との思いが少なからずあった。その理由は簡単だ。私は沿線に住んでいないため乗車する機会がなく、約六八四億円もの税金がLRTに投入されることに損をした気分になっていたのだ。どうせなら私に関係あるものに税金を使って欲しいとまで思っていた。

宇都宮市がLRT導入を決断した背景には「子どもから高齢者まで誰もが豊かで便利に安心して暮らすことができ、夢や希望がかなう」スーパースマートシティの実現を目標として掲げていることがある。誰もが自由に移動できるまちづくりの基軸にLRTを据え、脱炭素型ライフ・ワークスタイルへの転換や外出機会増加による健康増進および地域経済の活性化につなげていこうとしている。では、実際にLRT導入による効果は出ているのか。先日、開業から一年を迎え、累計乗客数は当初予測を二割ほど上回る約四七三万人を超えており、沿線の人口増加や地価上昇といった経済波及効果も生んでいると報道された。地域の足として受け入れられ定着しつつあることを知り、これは税金の使いみちとして適切であったと言えるのではないかとこの思いが芽生えた。そして、税金について正しく理解していなかった自分が間違っただけの判断をしてしまっていたことに気がついた。税金は医療や道路、教育や防衛などさまざまな形で使われている。税金はやみくもに配分したり、個人の利益のために使うものではない。また、納税している人だけがサービスを受けるものでもない。どこかで誰かの助けになっているということを再認識する機会となった。

今後少子高齢化がさらに進み、税を納める人は減少するのに福祉や医療に使う税金はますます増大していくことは想像に難くない。だからこそ、貴重な税金をどこに配分し何に使うのか、それらは適切に活用されているのか今一度考える必要があるのではないだろうか。そして、私たちは税金に対して学びを深め正しい知識を身に付けることで、納税の意義や役割、正しい税金の使いみちを判断できる視野の広い大人に成長していくことが可能であると考えます。社会基盤を支え、私たちの豊かな暮らしを未来へ繋げていく役割を担っている税金。これからは何気ない毎日の生活の中で誰かの尊い税による恩恵を受けていることに感謝し、教科書や施設を大事に使う自動車ではなくLRTを利用する、など自分にできることを積極的に行うことで貴重な税金を大切に使いたい。まだ子供だからと大人に丸投げするのではなく、関心を持ち続け行動に移すことが将来の納税者である私たちに求められていると思う。

草津市立草津中学校 3年

奥村 心媛

「税」についての作文を書くにあたって父と話していると、滋賀県で導入を検討されているといわれている「交通税」というものを知り、どのようなものなのか興味がわき、調べてみました。

交通税は、名前はまだ仮称です。現在でも税金を含む県の収入の中から各交通会社に補助していますが、バスや地域鉄道などの地域交通の維持費用を将来新たに「交通税」という税金を作ることによって地域交通に充てるという方式が考えられています。実現すれば「全国初」となるこの税の目的は、「地域公共交通を存続させるため」です。人口減少やコロナ禍を経た生活スタイルの変化などに伴って、鉄道やバスなどの利用者が大幅に減り、地域の足である公共交通の経営は厳しさを増しています。そういった背景があり、「公共交通を使う人も使わない人もみんな支えていこう」という考え方が、新たな課税には反映されているのです。

私はこのことを知り、交通税を滋賀県が導入することで、滋賀の公共交通を維持できるという大きなメリットがあるため、この税の導入に共感しました。

しかし、メリットばかりではありません。それは、県民の負担が増えることに加え、地域公共交通機関の非利用者に不公平感が出てしまうことです。例えば、自分の車を持っておらず、移動手段が電車やバスなどの公共交通機関しかないという人にはこの「交通税」というもののメリットは大きいでしょう。では、自分の車を持っている人の場合はどうでしょうか。この場合、公共交通機関を利用しなくても自分の車で移動することができてしまうため、この税はただの負担増でデメリットと感じられるのです。

私はこの反対意見を知って、前述した自分の意見に自信が持てなくなりました。やはりまだ社会経験の浅い中学生の私には「税」について信念を持って意見を述べるだけの知識が不足していると痛感しました。それでも、色々と調べていく中で税のことを考えていくということは社会全体のことを考えることに通じるという気づきも生まれました。まさに税というものを介して、社会がつながっているのだと思います。

また、そもそも県が独自に新たな税目を作ることができることも今回初めて知り、税を身近に感じるようになりましたが、逆にいくらでも新しい税目ができて、将来どんどん負担が増えるのではないかという不安も覚えました。

今の税金が適切に使われているか、新しい税目が本当に必要か、そういったことを自分でも判断できるよう、今後も社会の動きに関心を持ち、勉強していきたいと思えます。

そして、将来は納得して納税できる社会人になりたいと思えます。

大阪教育大学附属池田中学校3年
越智 晴己

みなさんはODAを知っているだろうか？ODAとは開発途上地域の開発を行う政府の国際援助の事だ。ちなみに、その財源は税金で賄われている。今まで僕が持っている税金の知識は、「国民から集めたお金を、みんなのために使うシステム」という程度だったのだが、この「みんなのために」の部分を考えさせられる出来事が今年の夏休みに起こった。

僕は、この夏、JICAの海外研修プログラムの一環でフィリピンを訪れた。その際、ODAの現場を見学する機会に恵まれた。僕が訪れたのは、EFCOS・パッシング・マリキナ川河川改修事業フェーズ4である。フィリピンのマニラは平野で大きな川が流れていて、多くの人口が集中して住んでいる。台風が多発するこの地域は常に治水上のリスクにさらされており、その課題を克服するために、日本から技術者が派遣され、フィリピンの技術者と協力して対策を進めている。フィリピン同様に水害の多い日本は、長年の経験と技術を活かして、フィリピンをサポートしている。そして、そのサポートは堤防づくりといったハード面にとどまらず、川にゴミを捨てないように地元住民に呼びかけたり、避難訓練をしたりといったソフト面にまで及んでいる。更に、日本とフィリピンの技術者の方たちは一緒にラジオ体操やバドミントンを楽しんだりと非常に仲が良いというお話も聞いた。彼らが築いているのは堤防だけではなく、フィリピンと日本の信頼関係と明るい未来なんだと僕は思った。

日本に帰国して、僕はODAについて気になり調べてみた。二〇二四年のデータによると、発展途上国への経済協力費は五千四十一億円で、全体の歳出の〇.四%を占めていた。「国内に解決すべき問題がたくさんあるのに、海外に税金を使うなんて間違っている」と言う人もいるかもしれない。しかし、ちょっと考えてみてほしい。日本は島国で資源が乏しい。しかも少子高齢化が進みこれからもどんどん働き手は減り続けるだろう。更に、戦争のない平和な日本が続くようにと願うならば、国際協力は必要不可欠ではないだろうか。発展途上国への援助を通して絆を深め、一緒に発展していった先に、日本の輝かしい未来があると僕は信じている。そして、僕たちは税金を通して、発展途上国を応援しているのだ。

僕はこの夏の体験を、できるだけ多くの人と共有したいと思っている。マニラでは、ストリートチルドレンを保護する施設も訪れ、そこでもやはり日本政府の援助、即ち税金が使われていた。「勉強できてうれしい」と語る子供たちを前に、勉強嫌いの僕は恥ずかしい気持ちになったし、「将来は国の役に立ちたい」と言う子供たちに対しては尊敬の念を抱いた。そして彼らは口々に「日本のみなさん本当にありがとう」と言っていた。僕は日本人として、とても誇らしい気持ちになった。

「みんなのために」税金は使われていた。

税を支払う、幸せをもらう。

長万部町立長万部中学校3年 篠田 涼帆

いつもと同じ時間に、いつもと同じ通学路を自転車で走っていた。いつもの曲がり角を曲がって、私は驚いた。

「見て！真っ白！きれい！」

薄くなっていた横断歩道の線が、濃く、はっきりと変わっていた。私は思わず一緒に通学していた姉に話しかけ、「本当だ！」と笑いあった。朝の小さな幸せだった。

私の町は、今いたところで道路の整備が行われている。今日はこの道路がツルツルになっている、今日はここが、と話しながら、真新しい道路の上に自転車を走らせるのが、最近の私の楽しみだ。

この作文を書くにあたって、私はそんなことを思い出した。今まではぼんやりとしか理解していなかった、「税金は国民の生活に役立っている」という言葉の意味を実感した。

この町の、あの横断歩道だけでなく、今も日本の至る所で道路の整備がされて、私のように嬉しくなっている人がいる。この国が、小さな幸せで溢れている。

そこで私は、この国の至る所で、毎日このような工事を行うのに、どれくらいの税金がかかるのだろうと気になったので、調べてみた。

すると、令和五年度の国の税金の総額である、約五十七兆円のうち、工事などの公共事業関係費は、五パーセントである、六兆円もが使われていた。やはり規模が大きい。また、所得税、法人税、消費税が、総額のうちの八十パーセントを占めていると書かれていた。

私はまだ子供なので、所得税も法人税も、ぼんやりとしか分からないし、消費税くらいしか支払ったことはない。それでも微力ながら、私の支払った税が、誰かの小さな幸せになっている。そして、私自身の幸せにもなっている。

アイスクリームを買って、税を支払って、幸せをもらう。可愛いTシャツを買って、税を支払って、幸せをもらう。微力ながら、幸せの循環に、貢献している。

そう考えて私は今とても嬉しい気持ちになったが、税を支払うことをあまりよく思わない人もいる。私の周りにもいる。日常の幸せには、税が関わっていることを、知ってほしい。そして、感謝を伝えたい。

一億二四八八万人の皆さん、私の朝の小さな幸せをありがとう。

ゴミのない、横断歩道も白線も見やすい、安全な通学路をありがとう。

見慣れない教室で、新しいピカピカの教科書に、名前ペンで書き慣れない学年を書く私のウキウキをありがとう。

友達と勉強ができる図書館、その後にはしゃいで笑い合える公園をありがとう。

税を支払う、安心をもらう。

税を支払う、幸せをもらう。

「税で守られている私たちの暮らし」

北見市立端野中学校 3年 山田 望愛

私は二十八週で生まれ超低体重出生児としてNICUに半年程入院していたと聞かされた。産まれたばかりの私は片手にのる程の大きさだったという。障害が残る可能性、医療費の事様々な事を同時に考えなくてはいけなくて母は不安で一杯だったという。その時の主治医がこんな事言ったという「医者は神様じゃないし医療には限界がある、授かりたくても授けられない人もいれば出産までたどり着かない命もある。医者が絶対と言ってはいけなのだけれど、それでも絶対に助けるからお泣かないでほしい。赤ちゃんはお母さんに泣いてほしくて産まれてくる子は一人もいないのだから」と。

その言葉を信じて母は手術室に向かったと聞いた。産まれたばかりの私は人工呼吸器がつけられて無数の点滴の管があり、本当にこの命は助かるのかと思うほどの姿だったという。母は障害が残る心配もあったが、かかる医療費の金額を聞いてとても払えないと思うほど高額だったと言う。日本では高額医療費制度のおかげで月に払う医療費の限度額以上は払わなくてもよい制度がある。

私は産まれたその瞬間から顔も見たことのない人が納めた税金のおかげで医療を受けることができたのだ。この話を聞くまで税金を意識したのは消費税くらいだった私には衝撃だった。世の中の人が緩くつながっている中心には税があると感じた。教科書、給食費、公共施設、医療費、様々な場面で私達は日々税で守られて暮らしているのだ。

少子高齢化や物価高騰が問題になっている今、私達にできる事は何だろうと考えた。「税」と聞くとあまりいいイメージが湧かない。それはなぜか。私達は税金の正しい使い道を知らないからではないかと私は思う。今こそ税について正しい知識を持ち、中学生の私達も納税者だという意識を持つ必要があるのではないだろうか。私の人生は産まれた瞬間から税で支えられてきたと言っても過言ではない。これからも社会保険制度の恩恵を受ける私達は感謝を忘れず、今自分にできる事を最大限取り組みたい。

そして成人を迎えた際には恩返しのできる気持ちで納税したいと思う。税金とは未来を変える事のできる切符だと私は考える。私達は知らず知らずのうちに税金で支え、支えられているのだ。この「支え、支えられている」循環に私も参加する時はすぐそこまで来ている。中学生の私にできる事はまだ少ないのかもしれないが、三年後成人を迎えた時には税についての正しい知識と使い道をしっかりと理解し、税によって世の中が「支え、支えられていて自分もその一員なんだ」という自覚をもった納税者になりたいと思う。

問題を解決する「税」

弘前市立第三中学校 1年 日景 千晴

今まで「税」にはあまりいいイメージがありませんでした。何にでも税金はかかるし、「税金が高くて大変だ」と大人が言っているのもよく聞きます。しかし、自分が税について何がわかっているのか、病院や公園、学校などの公共のものに税金が使われていることや消費税のことしか知らないことに思い当たり、調べてみることにしました。すると、現代の社会的問題を解決する目的で「税」が作られることもあると知って、とても驚きました。

例えば、アメリカでは、肥満の人が増えたため「炭酸税」を制定したそうです。炭酸の会社側から見れば商品の売り上げに関わる点で少しかわいそうですが、健康のために課したこの税で実際に炭酸飲料の売上高は下がり、効果はてきめん。他にもハンガリーでは「ポテトチップス税」と呼ばれる健康増進税が導入されました。こちらも肥満防止が目的で、ポテチ以外にもスナック菓子や清涼飲料などの糖分や塩分が高い食品が対象となっています。私はよく清涼飲料水を買うので、日本に導入されずによかったと思いました。

また、世界で初めてデンマークで制定された税が「脂肪税」です。この税は、二・三パーセント以上の飽和脂肪酸を含む食品、例えばバターやチーズ、牛乳、肉類など多くの食品に及びました。しかし、管理コストの増大や低所得者への影響など危惧されることが多く、およそ一年間の短さで廃止されてしまったそうです。

最後に、日本の「入湯税」についてです。社会的問題の解決という点からは離れてしまいましたが、日本では当たり前前の温泉に入ると支払われる入湯税も、海外からきた人にとってはとてもユニークに感じられる税金なのだそうです。税金の使い道として、環境衛生施設や鉱泉源保管施設の整備、観光振興などがあります。温泉を守るために作られた税ということがわかります。私たちにとっては当たり前前の税金も違う国から見れば、「炭酸税」や「ポテトチップス税」のように驚かれる税になることに新鮮さを感じました。

もし、私が社会の問題をよくする「税」を制定することができるならと考えてみます。

まず、一つ目は「SNS税」です。SNSの使用時間に比例して課税することで、使用時間を減らし、その分デジタルデトックスした生活のための時間とお金を増やせると思います。

二つ目は「夜更かし税」です。世界の中でも日本は睡眠時間が短いことで知られています。夜更かしが健康に良くないことはわかっているにもかかわらず流されてしまう人が多い日本にぴったりの税ではないかと思えます。

今回、「税金」は理由があつてこそそのものだとわかりました。さらに、「人」や「社会」のために税が使われていくことをもっと調べて、理解していきたいです。

生きるための大切な会費

学校法人古川学園古川学園中学校 3年 守谷 鳳甫

祖父が荼毘に付した。火葬場は洋風の建物で、大きな屋根のエントランスから吹き抜けのある明るく広いホールへと繋がる。最後のお別れをする焼却炉の前は、温かみのある電気を利用し広々とした個室になっていた。二階にある待合室までは、じゅうたん敷きの大きな階段を登り、まるでホテルのロビーのようだった。待合室に置かれていたファイルに、人が亡くなった時の手続きや火葬の費用が書かれていた。住民の祖父は無料だった。母が、税金で賄われ自治体によって違うのだと教えてくれた。

税金という言葉に良いイメージを持つ人は少ない。それは、取られてしまうお金というマイナスのイメージが大きく、今の当たり前前の生活が税金によって守られていることを体感しにくいからではないかと思う。一生懸命に働いて得たお金を、我が身の生活のためになると思いながら、税金を納めている人はどれだけいるだろう。ましてや、自分が死んでからも税金が使われるなんて、思ってもみないのではないだろうか。人は母親のお腹の中にいる時から妊婦健診という医療を必ず受ける。毎日、トイレで水を使う。信号や街頭が整備された道路を利用して、安全に目的の場所へ行く。その医療費や水の管理、道路の整備や維持、電気には税金が使用されている。もし、税金が使用されなかったら、医療費を十割支払うことも、自分で安全な水を作り出すことも、安定して使える電気を作り出すことも、とても一人ではできない。社会はみんなから集めた税金を上手く活用されて成り立っているのだと思った。税金は互いに助け合い支え合う手段の一つなのだと思った。子どもの頃に遊んだ公園も、使用している教科書も、祖父が利用した介護保険も、挙げればきりが無いほど様々なところで税金が使われている。身近な生活から、ひいては国の防衛まで、僕たちの生活とは切っても切れないものだと思った。生まれてから死ぬまで、公的なサービスを受けずに生活することは皆無であり、納税の大切さを感じた。世界には税金がない国もあるが、その国は衰退してしまった。改めて、税金は豊かな社会をつくる大切な会費のようなものだと感じた。そして、その大切な会費だからこそ、どんな所にどんな風に正しく使われているかを判断できる知識を身につけることも大切だと思った。それは、高額な税金を納得して納めることに繋がり、納税者の義務でもないだろうか。

宇宙から見た日本は、世界一に明るいという。今の僕が消費税などで自分の小遣いで納める税金は、一人あたりの税金使用料にはとても及ばないが、この豊かさを守るためにも、いつか、しっかり納税の義務を果たせる大人になりたいと思った。また、納税の大切さを正しく伝えられる納税者になりたい。

税の可能性は無限大

会津若松市立河東学園後期課程九年 渡部 小夏

令和元年十月一日。消費税及び地方消費税が八%から十%に引き上げられた。我が家は、私が小学校一年生の時に新築にした。両親が「消費税が十%になる前に建てなくちゃね」と、建てたのだ。幼稚園児の私には消費税なんてものは全く理解できていなかったが、単純に「軽自動車一台買えるくらい損をしてしまうんだよ。」と聞かされていた。お金が目に見えて消えていくと、どうしても損をしているという感覚に襲われる。

小学六年生の時、税について学んだ。警察や消防、医療に介護・教育、さまざまところで私たちが払っている税金は使われている。もしも税金がなかったらこれらのもの全てが有料になってしまう。しかし、実際にお金を支払っている税金に対して、これらのものはタダが当たり前という感覚があり、実は税金による恩恵を相当に受けているということを忘れがちだと思う。

税金のことを調べていくと、私自身もとある税金の恩恵を受けていることを思い出した。それは、軽度・中等度難聴児補聴器購入費等助成事業費補助金というものだ。私は生まれつき耳の聞こえが悪いので補聴器をつけている。初めて補聴器を購入した二歳の時は、ベビータイプのものでとても高価なものだった。「何十万円もするんだよ。」と聞かされていたので、幼稚園の先生もとても慎重に扱ってくれた。プールに入る時補聴器を外すことを忘れていても、小さいながら周りのお友達が「先生！こなっちゃん補聴器取るの忘れてるよ！」と教えてくれて、皆がいたずらしたりすることなく大切に扱ってくれた。補聴器の寿命は五年程度。次に購入するときの小学校入学後に、補助制度がある事を主治医から聞いた。そして私の住んでいる市でもその制度がスタートし、利用できることがわかった。これは、対象の補聴器を購入すると、市から費用の三分之一、県からも三分之一を助成してもらえる制度だ。これは全て税金でまかなわれていると思うととてもありがたい制度である。市によって内容は異なり、故障の度にその費用を負担してくれる市もあるようだ。私の住んでいる市は故障の場合は出してもらえない。「ケチくさいな」と思うこともあった。しかしこうして税について考えてみると、皆の税金を使わせてもらっているのだから、我が家で全額負担していた時のように、大切に補聴器を扱わなくてはならないと思えるようになった。このような制度を利用するのはおそらくごく一部の人。このようなごく小さなことでも、国や県・市では絶えず話し合いが行われているのだろうなと思った。

税の始まりは飛鳥時代、七〇一年大宝律令の租・庸・調という税から始まった。それから何度も形を変えて今がある。税金は私たちのより良い生活のためには不可欠である。そのためにもしっかりと税金を納めよう、未来の私！

税金が守る地震被災者の笑顔

茨城県立並木中等教育学校 2年 野末 有紗

私は今夏、南海トラフ巨大地震の発生確率が高くなっているというニュースを目にした。「巨大地震」という言葉を聞いて、十三年前の東日本大震災が浮かんだ。母は、経験したことのない揺れと、ニュースで連日放映される被害の大きさに、衝撃を覚えたと言った。震災後は、行方不明者の捜索活動や、復興に向けた仮設住宅の建設等、様々な支援が大勢の方々の協力で行われた。

私は被災地の支援について興味を持ち、調べてみると、支援に係る費用に税金が投入されている事が分かった。復興庁ホームページによると、復興関連予算は四〇兆円を超える額にもなるそうだ。そのため、東日本大震災の被災者救援の財源確保を目的に「東日本大震災からの復興のための施策を実施するために必要な財源の確保に関する特別措置法」が、平成二十三年に公布・施行されていて、現在でも続けられている。この税のお陰で、多くの不安な気持ちで一杯な被災者の心を救うことができたと思う。また同時にもしも税金による支援がなかったら、どんな状況になってしまうのだろうと思った。

ふと、愛知県に住む祖母の家に帰省の際、祖母が昭和東南海地震について話してくれたことを思い出した。祖母は、今も南海トラフ大地震に備えながら、日々を過ごしている。一九四四年当時は戦時中だったので、十分な支援はなく、家が壊れた曾祖母（祖母の義母）達は竹やぶで一か月もの間、余震に怯えながら過ごしたそうだ。また、情報が十分に行き届かず困っていた。私は、今では考えられない話にとっても驚いた。そして、災害時の支援が如何に大切かを気付かされた。

日本は地震の多い国の一つであり、私達の生活から防災対策を疎かにすることはできない。だからこそ、自分にできることを考えてみた。まず、一つ目に、ふるさと納税という形で、地域に寄付できる制度を利用することである。納税をする年齢になったら、被災地に積極的な納税活動をしていきたい。二つ目は、最近増えている外国人観光客への対応である。例えば、地震発生時に、日本語の読めない観光客が避難に遅れてしまう可能性がある。私が通学するつくば市では、バス停で困っている様子の外国人をよく見かける。外国人観光客が避難に遅れないよう外国語表記の看板を増やす、ハザードマップを作成する等の取り組みを行っていきたい。

今回、税金が被災地支援に使われていることを知った。また、被災地の方々の笑顔を取り戻す一筋の光となっていると感じている。その一方、復興費によって歳入が不足した場合、不足分を補うための国債発行が、次の世代に大きな負担を残すことになる。私達若者がこの大きな負担を前向きな気持ちで、受け止めていくことが必要と考える。私は、将来、納税を通して地震対策や被災地支援を支え、未来の人々の笑顔を守る一員になりたい。

祖父母の家には、がれきの前で手をつなぐ、私と姉の写真が飾ってある。東日本大震災の約一カ月後に撮られたものだ。当時私達は、神奈川県に住んでいたが、祖父母の家は宮城県の七ヶ浜町という所にあり、約7メートルの津波が押し寄せ、集落ごと飲み込んでしまった。祖父母の家があったあたりは、今は広い駐車場になっていて、自転車の練習やバドミントンをしてよく遊んだ。そしてそのすぐ前には、高い防潮堤がある。地震と津波が来て、そこから復興したという事が、いつの間にか私の中であたり前の事になってしまっていた。

今年の修学旅行で私達は岩手県を訪れ、震災学習列車に乗った。三陸鉄道リアス線の田野畑駅という所から乗車し、各車両でガイドの方から震災で起きた事や、被災地の今についてのお話を伺った。その中で、ガイドの方が何度も話してくれたのが『防災』の大切さだった。

改めて防災について調べてみると、家族で避難場所を確認したり、水や食料を備蓄するなど私達に出来ることの他にも、国や県・市町村では、被害を最小限に食い止めるために様々な対策をし、多くの税金が使われていることが分かった。防災無線の整備やハザードマップの作成、建物の耐震改修工事の一部助成などの身近なものから、道路脇にある法面の崩壊を防止するための道路防災工事や津波の観測・監視体制の強化や避難を容易にする地域づくり。数えきれないほどあるこれらの事は、全て税金のお陰で成り立っている。

震災学習列車からは、古い道路と新しい道路がはっきりと分かり、また、真ん中だけ新しいコンクリートで補修された古い防波堤も印象的だった。広範囲に及んだ被害と、その側にある家々を見た時、全ての家に暮らしがあり、津波でどんな思いをしたのだろうかと思像すると、胸が苦しくなった。災害発生時の救助活動や捜索活動をはじめ、人々の暮らしを立て直すための支援金もあり、これらも全て税金で賄われていることを知った。

私が今まで祖父母の家で楽しく、何一つ不自由なく過ごせているのも、税金で地域を再建してもらったお陰なのだと思う。災害があった時だけではなく、医療や学校など、実はいつも税金に助けられながら暮らしている。

私たちは、税金から、安心や安全をもらい生きていることをよく理解し、将来は納税の義務を果たして誰かの役に立ちたいと思う。

税によって起きた奇跡

本庄市立本庄南中学校二年 平野 葵生

母のお腹に新しい命がやってきた。そのことを知った日の喜びを、今でも鮮明に覚えている。しかし、母は入院してしまった。まだ、予定日より四カ月も早かった。

緊急帝王切開で産まれてくることが決まった。予定よりも二カ月近く早く、いよいよ僕がお兄ちゃんになれる。ワクワクしながら、対面した弟は、とても小さくて、とにかくかわいかった。でも、すぐに保育器に入り、一緒に過ごすことはできなかった。

弟は退院してからも、定期的フォローといって、大きな病院に通い、診察や検査を毎週行った。筋肉が弱く、ミルクを自力で飲むことができなかった。そのため鼻から管を通し、「経管栄養」と呼ばれるやり方で、胃に直接流して栄養をとっていた。医師からは「99%車いすの可能性が高いです。」と言われた。そして、たくさんの検査をしても、何も問題はなかった。けれども、一歳になっても、歩くことも立つことさえできない弟だった。

弟が一歳になった頃、医師から胃ろうの手術を勧められた。その時、母と父が泣いていたのを見て、「僕が強くならなきゃ」と思ったことを思い出した。

手術を受け、集中治療室にいる弟は、胃ろうがついた。何日かして、お見舞いに行ったら、鼻から管が取れていた。これから毎日、管の無い弟の顔を見ることに、逆に違和感があった。いつも眼鏡をしている人が、急に眼鏡を外した顔を見るのと同じ感覚なのだと思う。でも、久しぶりに会う弟の笑顔が、誰よりも輝いて見えた。

療育を懸命に行い、一歳半で、歩いた。たった三歩だったけれど、家族みんなで泣いて喜んだ。胃ろうになったとたん、離乳食を食べるようになった。手術からたった九カ月で胃ろうを外すことができた。

弟は今、小学校三年生。サッカーが好きで毎日家でもボールを蹴っている。あの頃の病院通いが嘘のように、家族の中でも、誰よりもよく食べる。産まれてすぐの頃言われた「99%車いす」の、たった「1%」の奇跡が起こったのだ。それは、様々な医療や療育を、全て税によって受けることができたからだ。弟のような、グレーゾーンと呼ばれた医療的ケア児だった例は、健康に過ごせた幼少期の人数からしたら限りなく少数である。しかし、このグレーゾーンだからこそ、幼少期に受けられることができた医療や療育のおかげで、奇跡のような喜びを与えてもらった。税金がこのような素晴らしい奇跡を与えてくれる。

通常の出産では生きることができなかった弟。税がこのような使われ方をしていなければ、元気に走り回る弟の笑顔は今、見ることはできなかった。僕は、将来きちんと税を納めて、弟のようなグレーゾーンの医療的ケア児の家族を幸せにしてあげたい。そのために、医師か政治家を目指して、さらなる日本の発展に貢献し、きちんと税を納めていきたい。

果てない青空を自由に翔けていく白い鳩。白く美しく咲き誇る梨の花。私の住む白岡市では今年も、白い鳩と梨の花が春の始まりを教えてくれた。

新しいクラスにも少し慣れてきたある日。ニュース番組を見ていると、手に持っていたリモコンを思わず落としそうになるニュースが流れてきた。なんと、白岡市の市道の二か所に、大量のがれきの山が不法投棄されていたというのだ。がれきの山は、道路を完全にふさいで通行不能にしていた。現場の近くに住む農家の男性は、テレビのインタビューに応じると、眉を曇らせながら、

「事情はあるんでしょうけど、ちょっとふざけてますよね……」
とこぼしていた。その声と表情が、頭の中を何度もループして離れなかった。

約二週間後、がれきの撤去作業が完了して道路を通れるようになったとインターネットで知ったときは、祝福より先に安堵がやってきた。そして、画面をさらにスクロールしたとき、衝撃的な一行が目飛び込んできた。

「市は撤去費用として予備費から五五六万円を計上」
つまり、白岡市民が白岡市に納めた「税」が、がれきの撤去に貢献したということである。これを理解したとき、脳内に映ったのはあの農家の男性の笑顔だった。「税の力」に痛いほど気づかされた、初めての瞬間だ。

一か月後、部活動の部長として生徒総会に出席した。一人あたり一〇〇円の生徒会費が学校生活を充実させている。そう再認識したとき、はっとした。「税」といっしょだ。税も生徒会費も、豊かで充実した毎日を過ごすためには、かけがえのない存在なのだ、と。

いままで毎朝、当たり前前に教室に入って、当たり前前に教科書を机にしまって、当たり前前にイスに座り友だちと喋っていた。しかし、この当たり前前の朝は、すべてだれかが納めた「税」によって成り立っている。もしも明日「税というしくみをなくします」と突然言われたら、きっと私は……。この十五年間ずっと、「税の力」に甘えてしまっていた。

この日本のどこかに、私の学校や教科書、机やイスのために納税してくれた人がいる。その人の顔も名前も、知る由もない。だが、もしもその人に会えたら、うるさいと言われるまで何度でも「ありがとう」と伝えたい。

来春三月、私は九年間の義務教育を終える。白い鳩が果てない青空を自由に翔ける姿が、自分で決めた進路へと飛び立つ私と重なる。どのような大人になるべきだろう。白い鳩は平和の象徴、梨の花は希望の象徴と言われている。ならば、私は「税の力」で日本に平和と希望を運ぶ大人になりたい。

将来の日本を担う世代として、納税という形で「税の力」を引き出し、日本に貢献という名の恩返しをする。これこそが、私たち将来世代の究極の使命ではないだろうか。

税と子供の権利～未来に向けて～

ふじみ野市立福岡中学校 2年 栗原 みのり

私の家の近くには、多くの人が利用する、福岡中央公園という大きな公園があります。そこでは長い間、ボール遊びが禁止されていました。そのため、近くでボール遊びをする場所がなく、私たち子供は困っていました。しかしある日その公園を通ったとき、一部の場所でボール遊びができるようになっていました。私は、これでボール遊びができるという喜びとともに、どうしてボール遊びができるようになったのだろうと思いました。

調べてみると、昨年八月に「ふじみ野市立福岡中央公園のボール遊びについて考えるワークショップ」が開かれていたことを知りました。目的には、身近な公園でボール遊びが禁止になっていることが子供の体力低下に繋がるなどと書かれていました。このワークショップの結果、公園の一部の区画でボール遊びができるようになったようです。私がとても驚いたことは、その会議に市内の小学生、中学生が参加していたことです。ふじみ野市では、おととしの三月に、子供たちにとって可能性に満ち溢れたより良い未来を残していきたいという目的で、「ふじみ野市こどもの未来を育む条例」が全国で初めて制定されました。第四条には「こどもは、児童の権利に関する条約に基づくこどもの生きる権利、守られる権利及び参加する権利をはじめとした、こどもにとって大切な権利の保障を求めることができる。」と書いてありました。この条例に基づいてワークショップが行われていたので、子供が参加していたのだと思いました。私は子供の権利を守ってくれるふじみ野市って素晴らしいなと思いました。そして、同時にあることを思い出しました。それは、小学生の時に租税教室で学んだことです。身近にある、税金でまかなわれている施設を学習した時、公園もその中に入っていました。つまり、ふじみ野市が企画したこのワークショップでは、小中学生も税金についての話し合いに関わっているということが分かります。これに気付いたとき、私はとても驚きました。なぜなら、私は今まで、税金の使い道は大人だけで決められているものと思っていたからです。たしかに、税金は社会全体のためにあるものだから、社会の一員である子供にも意見を言う権利はあると気付きました。それなら私もそういう機会で、積極的に意見を言うようにしようと思いました。そのような場が増えれば、私たちが将来、どのような場で税金を使うと良いのか、未来のことについて、真剣に考えることができると思います。

今日本では、少子高齢化が進み、税金が使われている医療や介護、年金などに必要なお金が増えていくこととなります。このような社会では、お互い助け合っていくことが必要となってきます。未来の社会をつくっていくのは、子供である私たちです。そのために今、社会の現状を知り、税金の在り方について学びたいです。私たちがつくる未来に向けて。

「私達の未来」を創る

新潟市立横越中学校 3年 泉 あすか

私はピアノを持っていない。それでも、ピアノを続け、この夏、中学最後のピアノの発表会で好きなアーティストの好きな曲を弾くことができた。私の十一年間のピアノを支えてくれたのは、公共施設のピアノ達だ。

私の通っていた幼稚園では、放課後、園舎で色々な習い事のレッスンが行われていた。そこで私はピアノを習い始めた。その後、造形教室など次々に習い事を増やしていった。

ピアノを習い始めて数ヶ月が経った頃、ピアノ購入の話が出たが、様々な習い事をする中で、いつまで続くか分からないし、どの習い事も辞めたくないのであれば、経済的にも今すぐピアノという大きな買い物はしないでおこうというのが母の考えだった。

初めのうちは八十八鍵盤キーボードで練習していたが、上の課題曲に取り組むようになると、タッチの重さやペダルなど、本物のピアノが必要となった。そんな時たまたま、母が「市報にいがた」で「だれでもピアノが弾ける日」という記事を見つけた。市民プラザの大ホールの使用がない日にステージにあるグランドピアノを弾けるというものだった。家からは少し遠く、使用料の他に駐車場の代金もかかったが、母は頻繁に申し込んでくれた。そうした練習を何年か続ける中で、もっと近くで沢山ピアノが弾ける環境はないかと母が色々と調べてくれていた。そこで見つけたのが、家からも近く、無料の広い駐車場もある、江南区文化会館の音楽練習室だった。

何かを始めたい、続けたいと思っても、必ずしも恵まれた環境が全て整うわけではない。だが、ピアノを弾きたい、続けたい、そう願えば、こうして叶えることができる。読みたい本があつたり調べたいことがあつても、量が多かったり高価だったり、自分で本を購入できない場合にも、図書館がある。みんなが払う税金が巡り巡って色々な形でまた誰かの助けになる。私もまた、沢山の方が払って下さった税金の恩恵を受けながら、安全で快適な生活が送れている。

先日、地域の回覧板で新潟市からの「被災された皆様へ」 「生活再建のため支援制度をご利用下さい！」というお知らせを見た。今年元旦に起きた地震で被災した方が「罹災証明」の申請をすると、その判定区分に応じて支援が受けられるというものだった。金額的には被災された方々の日常を取り戻すには到底足りないのだが、それでも、気持ちを立て直し前を向くきっかけになるのではと思った。

近年、コロナや地震、自然災害、他にも様々な脅威が次々と起こってきている。私自身はまだ消費税くらいしか払っていないが、私達の払う税金が少しずつでも誰かの助けになっているのだと思うと、改めてすごいことだと感じた。

税金が「私達の未来」を創る。「きちんと支払い」、「大切に使う」を心がけたいと思う。

一応、私は税について少し理解があると思っている。昔、税がない世界はどうなるのか、というある本のコラムを読んだことがある。救急車は呼ぶのに数千円、警察も消防もないうえ、ゴミ収集車だってこないから自分で何とかするしかない。私はこんな世界に住みたいと思わない。だからこそ、税のありがたみは少しながらも感じている。しかし、私の日常生活において「税」を意識したことは少なく、税の恩恵はあまり深く感じることはなかった。

私の父方の祖父母は鳥取県の中部、三朝町に暮らしている。三朝町はのどかな温泉街が広がっていて、特に三朝温泉は有名な観光地で、多くの人々が三朝町に訪れる。私たち家族も、三朝に帰省をする際は毎回お世話になっている、私の大好きな温泉だ。

一つ興味深いものを見た。「入湯税」。そんなに値が張るわけでもないが、少し気になってしまった。入湯税とは何だろうか。そもそもなぜ銭湯に税をかけるのか。色々考えてしまった。

あのあと、インターネットで入湯税について調べてみた。入湯税は、公衆浴場やお風呂がある旅館やホテルなどの整備に使われるようだ。また、その観光地のイベントの宣伝費用に使われたり、観光スポットの整備に使われたりする。気づいた。もしこの税がなかったとしたら、どうなるのか。三朝温泉はここまで有名になれなかったかもしれない。ここまで三朝町の活気がなかったかもしれない。

入湯税は、温泉街を支えている。一見疑問に感じる税だが、それは私たちの観光を豊かにしてくれるものであり、そこに住む人々や街を支えているものでもある。私の祖父母にもその恩恵が届いていると思うと、一人の観光客として自分が誇らしく思える。

世界に目を向けると、一見疑問に感じる税がたくさんある。イギリスの「渋滞税」や、ヨーロッパ各地の「犬税」、ハンガリーの「ポテトチップス税」など様々である。これらの税にも、その土地の理由があり、その税で恩恵を受けている人々がいるはずだ。入湯税だって、海外の人から見ると意外な税のようだが、相応の理由があり、恩恵を受けている人々がいる。

税は助け合いである。自分が納める税金で恩恵を受けている人がいるが、逆もしかり。自分も恩恵を受けているということを忘れてはならないと感じた。お互いに納めることで、お互いが恩恵を受けられる。

入湯税を通して、自分の視野が広がった。税の向こう側にいる人々や街が見えた。そして、自分も支えられているということを感じた。税の向こう側に見える人々や街。それは自分の祖父母かもしれない。自分の好きな温泉かもしれない。私は納税をする。税の向こう側の人々や街のために。そして、いつか還ってくる自分のために。

期待された未来を生きる

四街道市立四街道北中学校 3年 本間 紗紀

私には小学生の弟がいる。生まれつき障害があり、今でも定期的にリハビリをしに病院に通っている。夏休みに私は父と一緒に弟のリハビリ病院について行きその様子を見学させてもらった。

理学療法士の先生が付きっきりでハサミを使う訓練やボタンを穴に通す訓練をしてくれている。段階に合わせて用意されている道具や設備。手作りのようなものもあり先生たちの情熱を感じることができた。周りを見渡すと、同じようにたくさんの子供たちが療育を行っていた。そのあと主治医の先生に診察してもらい、今後の計画などを話してくれた。

こんなにもたくさんの専門家が弟達のために尽力してくれていることに感謝したとともに、この医療行為がすべて無料だと聞かされて本当に驚いた。税金の補助がなかったら、今のように通うことはできないかもしれないね、ありがたいことだと父は言った。

私の住んでいる四街道市は子供の医療費が無料であるのはもちろん知っていた。財源が税金というものであることも何となくわかっていたが消費税くらいしか払ったことのない私はどれくらいの税金が納められ、どこに使われているのかなど深く考えたことがなかった。こんなに専門的な設備の使用料まで賄うことができる税金というものに興味をもち、自宅に戻り早速調べてみると、医療費の助成には市の税金が四億円以上使われていた。小学校も中学校も自己負担だと年間で百万円近くのお金がかかる事がわかった。それだけではない。私が所属していた部活動の大会も、通っている図書館もすべて税金で賄われていた。

私の両親が支払っている税金も教えてもらった。中学生の私にとってはとても高額だと感じたが支払うのは嫌ではないのかと母に聞いたら、それがきちんと国民のために使われ、少しでも子供たちの未来に役立つのであれば喜んで払わせてもらうのよ、と笑っていた。

私はその言葉を聞いて、ある言葉を思い出した。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、税金によって無償で提供されています。大切に使いましょう。」

いつも年度の初めに配られるまっさらの教科書の裏表紙に書いてある言葉だ。そして、先生はいつも配る時に言っていた。

「教科書は無料じゃないんだぞ。大事に使いなさい。」

今ならその言葉の真意がわかる。

弟のリハビリも、私の学校生活も私たちの未来のために税金を支払ってくれている皆さんからの期待が込められている。だから私はそれを無駄にすることがないように、しっかりと期待に応えられるように生きていかなければならない、と思った。そして将来につなげていくために立派な納税者になりたい。

二〇二四年一月一日十六時十分、地震が起きた。私自身は、それ程揺れは感じなかったが、テレビをつけて啞然とした。そこには、
「津波から逃げろ。」

と必死で訴えるアナウンサーの姿。そして、地震で大きく揺れる海の映像が流れていた。能登半島地震の被害は、時間の経過とともに深刻化していった。あたり前にあった日常が突然奪われてしまう現実。昨日までそこにあった景色が壊れていく現実。被災した人たちの苦しみや悲しみは、計り知れない。

私は、この時の映像が今でも頭から離れず地震が発生した時、国や地方はどのように手を差し伸べるべ、復興・復旧に向けての金銭支援を行っているのかが気になる、調べてみた。

まず国は、能登半島地震で被災した人たちに、すぐに支援を開始した。この『プッシュ型支援』の支出額は二十七億円余りに達し、過去最大なものとなった。また、二〇二三年度予算の予備費から四十七億円余りを支出。六月には、特別交付税五二〇億円の財政支援を行うことに決めた。さらに政府は、道路などのインフラ復旧や仮設住宅の建設などを進めるため、二〇二四年度予算の予備費から、一三九六億円を追加で支出することも決めた。

このように、国は甚大な被害にあった地域や人たちに、しっかりと手を差し伸べて、支援していることが分かった。

そして、調べていく中で『復興税』という言葉が目にとまった。これは、復興特別所得税といって、東日本大震災からの復興財源に充てるために、二〇一三年一月一日から二十五年間、通常の所得税に上乗せして徴収される特別税らしい。父に、この復興税のことを聞いてみると、

「復興のために納税している意識はなかったけど、少しでも誰かを助けるために使われている税だとしたら嬉しいね。」

と話してくれた。この話を聞き、何だか私も嬉しくなった。

今回、能登地震の復興・復旧に関する税の使い道を調べてみて、やはり税金は困っている人たちのために使ってほしいと強く思った。

私は二〇二〇年八月、旅行で南房総を訪れたことがある。そこで、ある看板を見つけた。

『この辺りは、二〇一九年の台風一五号で、甚大な被害を受けましたが、たくさんの方の支えと税金により、復旧が進んでいます。』

と書かれていた。その時は、まだブルーシートが屋根に張ってあったりと復旧途中だったが、現地で出会った人たちは、皆笑顔で接してくれたことを今でも覚えている。

地震に限らず、今もさまざまな自然災害で辛い思いをしている人がいる。それでも、前を向いて乗り越えようとしている。

納税は、人々が身近につながることができ、助け合えるものだと思う。納税によって少しでも、人々の力になれるとしたら、私は喜んで、税という名の幸せを納めていきたい。

税金の使い道知って！

江戸川区立小岩第一中学校 1年 稲垣 心寧

お買い物をすると、消費税というものが必ず取られる。何で商品を買っただけなのに、商品とは関係がないお金が取られるの？と心の中でずっとモヤモヤしていた。そんな小学校三年生の時に、税金の大切さについて会うことになる。

それは、学校で配られた「税に関する絵はがきコンクール」という一枚の紙だった。そのコンクールに応募しようと思った理由は、参加賞が図書カード五百円分だったからだ。なぜなら、私は本が好きだから。そんな安易な応募理由だったけれど、テーマが税に関する絵だから、まずは税金について調べないと絵が描けない。だから、私は税金について、インターネットを使って色々と調べてみることにした。私自身税金は、国の運営に使うお金だと思っていた。しかし、その予想とは全く違った。税金は警察署、消防署、市役所、病院などや介護や年金などの色々な場面で、公共施設や公共サービスを提供するために使われていることを知った。税金は、みんなが安全で快適に過ごせるために、必要不可欠なものであることが分かった。さらに、税金には色々な種類があった。消費税、所得税、住民税、法人税、たばこ税、酒税等の多種多様な税が存在していることも分かった。

それから今、税金で賄われている社会保障が問題となっている。最近、少子・高齢化により、お年寄りが増えてきていて、二千五十年には六十五歳以上が三千八百四十一万人になると推測されている。二千年と比べて、千六百三十七万人も高齢者が増えることになる。これは、将来自分が年をとった時にどうなっていくのだろうか、今から心配だ。高齢者が増えると、税金が使われている医療や年金、介護などのお金が増えていく。だから、今のままでの税の仕組みでは、今後税金の役割が果たせない。なので、いつかは消費税をおよそ十パーセントから引き上げることが必要だと思う。しかし、引き上げたら国民から税金が高いと不満が出るだろう。でも、税金を上げざるをえないと思う。いったい税金の使い道を知っている人は、どれくらいいるのだろうか。だから、私はまず、国民全体が税金の使い道を知っておくことが、大切だと思う。そのためには、小さい頃から、税金について子供達に知ってもらう必要がある。毎年、小学校や中学校で特別授業として、税金について知ろうという授業をする。その授業を受けた子供たちが、自分たちの親に税金について話す。そうしたら、子供を持っている大人に知ってもらうことができる。このことから、税金についての理解を広めることができるのではないだろうか。

みんなに税金について知ってもらい、より良い社会になっていくことを願う。

昨年、港区が港区立の中学三年生の修学旅行の行き先を、京都奈良方面からシンガポールに変更すると決定した。それは英会話能力を発揮し、異文化体験を通じて国際理解を深めてほしいという理由かららしい。これは全国的にニュースになり、あるテレビ番組では賛否両論となっていた。しかしなぜそのようなになっているのか、私には理解できなかった。

そのあと、費用のほとんどを全て港区が負担してくれると知った。賛否両論が生じたのは、その費用は港区に住む人が納めている税金から出されるからだ。つまり税金の使い道について賛否が分かれたのである。私は今回のシンガポール旅行は税金で行かせてもらってありがたいと思っている。しかし、大切な多額の税金をそれに使ってしまったいいのだろうかとも考える。もし中学生に使ってくれるのなら、古くなった学校の修繕や設備の拡大に使ってほしいと思った。

私はシンガポールへの修学旅行が決まった頃から税金について学校で学ぶようになった。それまで私にとって税金とは「ただ払うもの」だった。お店で買い物をする時消費税を払ったし、旅行で温泉に行くと入湯税を払った。父は都税、区民税、所得税、自動車税、固定資産税なども払っている。私は小さい頃、道路や橋のお金を誰が出しているのだろう、公園の遊具や図書館の本は誰が買ってくれたのだろう、などと思ったこともあった。

しかし、公民の授業で国の財政や税金の仕組みと役割を勉強して、それらは全て税金でまかなわれていることを知り、私たち子供がどういう場面で税金にお世話になっているか分かった。私たち子供が、病気になって病院を受診する時も、学校で教科書が配布される時もそうだった。税金は他にも、上下水道の設備から介護、年金まで、様々な公共サービスを運営するのに使われているそう。そのおかげで私達は健康で豊かな生活を送ることができる。どんな大金持ちでもその全てを支えることは出来ないが、一人一人が税金を納めることによって、一人ではできない大きな支え合いが生まれている。納税とは私達を助けているものなのだとわかった。

私の将来の夢は医師になることだ。医師になって目の前の患者さんをできるだけ救いたい。ただそれだけではなく、その後ろにいる大勢の人たちを支えることができる立派な大人にもなりたい。これからますます少子高齢化社会になっていくと聞いている。税金で誰もが住みやすい街づくりをすれば、高齢者はいつまでも健康で安心して老後を過ごせるだろうし、少子化対策にもなるだろう。そのためにも、一国民として税についてもっとよく調べ、今自分に何かできることがあるかを考え、行動に移したいと思う。そして、私は今税金の恩恵をたくさん受けている側であるので、将来大人になって、きちんと納税し他の納税者と共に社会に大きく貢献したい。

税の助け

小平市立小平第五中学校 3年 岡崎 紫

好きなものを買う時に、消費税を払う。

私は税金に対してその程度の認識しかしておらず、あまり馴染み深いものではありませんでした。

ある日、母が市役所から届いた書類を記入している時に「児童扶養手当」という文字が見えました。母に詳しく聞いてみると、私達の家族は、児童扶養手当やひとり親の医療費助成制度などの援助を受けていることがわかりました。私の家庭は母と姉、私の母子家庭です。父親がいない環境で育ってきた私が、欲しい服などを買ったり、高校受験のために塾に通ったり、日常を有意義に過ごしているのは「児童扶養手当」を受けているからだとなりました。

「児童扶養手当」はひとり親の家庭で扶養されている子が十八歳になる日以降の最初の三月三十一日まで給付され、税金で賄われている社会保障制度です。また、ひとり親の医療費助成制度はひとり親家庭に対し、医療を受けるために必要な費用の一部を助成する制度です。

私は正直、税金に対して「買い物たびに消費税をとられてしまう」とマイナスな印象を抱いていました。しかし、ひとり親家庭を援助する様々な制度のこと知り、私が不自由なく生活を送ることができているのは、多くの国民が払っている税金のおかげなのだと思います。税金が私達家族の生活や健康を支えてくれていると考えると、税金への私のイメージも大きく変わりました。

「ひとり親家庭で家計が苦しい中、第一志望の私立高校への進学は許してもらえないのではないか。」という心配や絶望を感じていましたが、私立高校進学の際には授業料支援補助金という国が授業料を援助する制度があることを母から教えてもらいました。どのような経済状況でも未来に進んでいくことができることも、税金のおかげです。

この作文を書くために、ひとり親家庭と税金について調べることで、税金を今までより身近に感じることができました。私の家庭同様に、税金によって生活を助けてもらっている人は多くいると思います。今、幸せな生活を送っている人々も国の援助がないと生活できなくなるでしょう。税金は「幸せな生活を送るための助け合い」だと思います。税金のおかげで私達の生活が助けられていることを、多くの人に知ってもらうことで、税へのイメージがプラスに変わると思っています。税金に込められた優しい想いを、この世の中の人に知ってもらいたいです。

ひとり親家庭は、より多くの税金に支えられています。これからは、働いている方々のお金を使わせてもらっていることを認識し、税金の正しい仕組みや使われ方を学び、社会に貢献できる大人になりたいと思います。

名前も知らない「誰か」のおかげで

調布市立第六中学校3年 傍士 夏妃

「税」と聞くと、負担ばかりが注目されがちだ。ニュース番組で税について取り上げられる時、いつも税は人々を苦しめる悪魔のような扱いをされる。だが蓋を開けてみると、出産一時金の支給に医療費の免除、認可保育園の設置、教科書の無償化、道路の整備、年金など考え出したらきりが無いほど、私たちは生まれてから死ぬまで、常に税の恩恵を受けている。そして、税と無関係な人は一人も存在せず、生きている限り税は片時も私たちの側を離れず、活躍しているのだ。

しかし、税が悪魔扱いされていることにも納得がいく。その理由は、所得の多い人ほど税率が高くなる、累進課税制度があるからだ。実は、給与三千万円の人は、五百万円の人と比べると収入は六倍だが、納める税金は約九十五倍にもなる。これより、富の再分配や格差の是正につながるが、頑張った分だけ収入が減るととらえることもでき、労働意欲が減退するかもしれないという落とし穴がある。

では、納税しなければ幸せなのかと疑問に思い、調べてみると決してそうではないと知った。南太平洋に浮かぶ人口約一万人の小さな島国ナウル共和国は、リン鉱石採掘で財を成し、税金が存在しなかった。その上、生活費が支給され、教育や医療を無償で受けられた結果、全体の九割が無職で毎日が日曜日となった。しかし、資源の枯渇とともに約三十年の夢のような楽園生活は終わり、現在は近隣先進国の経済支援に依存している。私は、納税義務を課さずに過保護な経済運営を一時の快樂のために後先考えず行ったことが破綻の原因だと考える。納税義務がないと、「額に汗して働こう」という人間味が失われ、「どうしたら働かずに生きていけるか」を考え続ける墜落した暗い未来が待っていると感じた。

つまり、今の日本が天然資源がなくても豊かなのは、先人たちの血の滲むような努力があったからだ。私たちが税は大人だけが関係していると放り投げて努力を怠れば、先人たちがつないできたバトンを絶ってしまうことになる。そうならないためには、納税の仕組みと福祉や公共サービスという受益がどうあるべきか関心を持ち、理解して、日々の何気ない生活が名前も知らない誰かのおかげで成り立っていることに感謝することが大切だと思う。そうして社会に出た時、きっと私たちは税が「悪魔」ではなく「相棒」と見え、バトンを次につなぐことができると私は信じている。

「悪いインフレ」の突破口

座間市立相模中学校 3年 高橋 遼馬

連日、至る所で猛暑日が記録される日本の夏、この暑さに追いつちをかけるようなニュースを僕は耳にした。大手菓子メーカーの明治と森永製菓が、相次いで商品の値上げを発表したのだ。値上げの対象には、僕の好物である「スーパーカップ」や、「チョコモナカジャンボ」なども含まれており、中学三年生の懐には少々厳しい夏となるだろう。

物価上昇の波が国民を襲う中、企業の賃上げは一部を除いて追いつておらず、現在の日本は、いわゆる「悪いインフレ」の状況下にある。これを打開すべく、政府が打ち出した政策が、「定額減税」だ。これがどういった政策なのか、僕は調べてみることにした。

今回行われる定額減税は、「所得税（三万円）と住民税（一万円）を合わせて、一人あたり合計四万円が減税される」という内容だそうだ。また、減税の対象は「国内在住で、二〇二四年分の所得税と前年分の住民税の納税者であり、合計所得金額が一千八百五万円以下の人」と、幅広い層が対象になっている。

定額減税のメリットとして、税負担が軽減されること、それによる消費意欲の向上が見込まれることが主に挙げられる。一方デメリットには、企業側の給与業務の負担が増すこと、一時的な措置であるため、経済効果は長続きしないことなどが挙げられる。

ここまで、定額減税について調べてきてふと思ったのだが、国民の負担軽減や消費意欲の向上が目的であれば、給付金の支給も手段の一つだったのではないか。給付金の場合、指定した口座に直接お金が振り込まれるため、「国から援助を受けた」という実感が湧きやすく、より国民の消費に直結すると思う。その上、先程デメリットにも挙げた企業側の給与業務の負担も、大幅に削減される。こう考えると、一時的な経済措置を減税という形に拘る必要はなかったのかもしれない。

定額減税は、税負担の軽減による一時的な経済効果は生むものの、「悪いインフレ」を打開する抜本的な改革には繋がらないことが分かった。では、どうすればこの「悪いインフレ」を乗り越えられるのだろうか。

まず大前提として、政府や自治体の継続的な経済支援が必要だ。また、税金の使われ方が適切かどうかも、今一度見直すべきだろう。だが僕は、日本経済を立て直す責任を行政にばかり押しつけるべきではないと思う。僕達が行政に対して、不平不満を垂れるのは簡単なことだ。しかし、それでは何の進歩もない。余っている資金を少しでも消費に回すなど、僕達自身が経済を動かす努力をしていかねばならないのだ。一億人の「少し」が集まれば、経済回復の大きな原動力となるだろう。

国民一人一人が日本の経済、そして、日本の未来を担っているという自覚を持つことで、「悪いインフレ」の突破口は開かれる。

「税」に対する新たな視点

北鎌倉女子学園中学校3年 川西 カンナ

日々の生活の中で、税と聞くと、ネガティブなイメージが先行してしまうように感じる。私自身、税を意識するのは買い物をするときくらいだ。この夏、そんな印象をガラッと変える出来事があった。

夏休み、私はかまくら子ども議会に議員として参加した。普段ニュースで一部を見るだけの私にとって、実際に議員になるということは、とても刺激的な体験となった。議会を通して、疑問に思ったことが二つある。

まず一つ目は、議会の運営にかかる費用や、市が実際に行っている環境保全や観光振興などのさまざまな活動の費用がどのように賄われているのかということだ。鎌倉市の令和四年度の歳入・歳出決算額の内訳によると、歳入の約八割強が市民税や自動車税などの税金であった。また歳出では、議会の運営費や私たちの学びを支える教育費に一割、福祉や子育て支援にあたる民生費が約四割を占めていた。このことから、市が行うさまざまな活動が税金によって支えられていることを実感し、改めて、私たちの生活に必要な不可欠であり、私が普段意識していないところで、税の恩恵を受けていることに気づかされた。

二つ目は、市長さんや教育長さんが、答弁の際に「します」という言葉を使わなかったこと。「しようと考えています」や「する方向で検討しています」などの表現は使うのに、決して「します」と断言をしなかった。それは、税が貴重な財源であること、社会的な変化や予期せぬ事態に柔軟に対応するため、議会で議論を重ね、慎重に見極める必要があるから、その場での断言を避けたのだと考えた。

そもそも税とは、国民の「健康で豊かな生活」を支え、実現するために、国や地方公共団体が行う活動の財源となるもので、その費用を国民一人一人が出し合って公平に負担しているもの。日本には約五十種の税があり、一つの税のみでは実現できない公平を、課税方法の異なるいくつもの税金を組み合わせることで、公平に負担できるようにしている。また、「富の再分配」とも呼ばれ、国民の経済格差を埋めるための仕組みである所得再分配をすることにより、納めた税金の額に関わらず、誰でも国や地方公共団体から、公平にサービスを享受できるようになっている。これらの公平のルールを決めているのは私たちの代表であり、税の使い方を決めているのも私たちの代表である。

将来、自分が公平のルールや税の使い方を決める立場になった時、あるいはその代表を選ぶ時に、適正な判断ができるよう、今のうちから社会のしくみや税について、日々意識して生活しなければならないと強く感じた。そして、情報社会の中で、必要且つ正しい情報を取捨選択し、日頃からニュースを見聞きするだけでなく、新聞や、市区町村の広報誌を自主的に読んでいきたい。

税金の重要性と必要性

駿台甲府中学校 1年 雨宮 優梨香

毎年夏に家族で川の近くに、蛍を見に行く。川の流れる優しい音と共に、小さな光がゆらゆらと舞いながら、ついたり消えたりする光景がたまらなく好きだ。私は、どこの河辺にも蛍は生息していると思っていたが、そうではない事を知った。調べてみると、蛍は、魚や巻き貝が生息できるような自然に近いきれいな水辺が必要な生物だという事が分かった。私が蛍を見に行く川は、その様な条件が揃っているという事になる。そして私はこの夏、川を通じて税金がどれ程大切なものなのかを痛感する事になった。

七月の下旬よりフランスのパリでオリンピックが開催された。私は、柔道や陸上などの競技はもちろんだが、芸術家や文学者たちのインスピレーションの源になっていると言われている首都パリを流れるセーヌ川の映像を楽しみにしていた。しかし、テレビに映し出されたセーヌ川は、想像とかけ離れている様子だった。とても驚き、がっかりした。色濃くにごった灰色の水からゴミや草の様なものが時折り顔を出している。臭いもかなり酷いと観光客やアナウンサーが口をそろえて言っている。さらに驚いたのは、その映し出された川がすでに、二千四百億円もの大金をかけて整備された川だという事だ。なぜにこれほどまで水質が悪化してしまったのだろうか。得た情報によると、下水道の整備が不十分で雨に伴う増水時に下水が流入してしまっていた事が原因だそうだ。想像に難くないが、セーヌ川を泳いだトライアスロンに出場した複数の選手が体調不良を訴え、入院した選手も出たと聞いた。二〇二〇年に日本で開催された東京オリンピックの際、その様な問題は起きていない。私が今まで見てきた日本の川で、これほどひどいものはない。日本は税金に支えられて下水道整備がきちんとされているからだ。改めて税金の重要性と必要性を痛感し、蛍の見られるきれいな川が身近にある事を幸せに思った。

下水道整備の他にも税金によって私たちの暮らしは支えられている。記憶に新しい、コロナウイルス感染症が蔓延した際の予防接種の費用負担や、無料配布された布マスク。福島県や石川県で起きた大地震の際の災害復旧。私が通った公立小学校六年間での教育費負担の約九十四万円。犯罪などの取り締まりをしてくれる警察官によって治安は守られ、日常生活に欠かせない道路や橋の整備によって生活が便利になっている。また、お年寄りや体が不自由な人の為の施設、保育所の設置や医療機関の整備も行われている。日本では緊急時に無料で利用できる救急車も海外では有料な所が多い。このように、私たちが国や地方に納める税金を集め財源とし、私たちの暮らしは支えられている。この先も豊かに安定して守り続ける為に、皆がきちんと負担をし、納めていかなくてはならないと強く思ったこの夏であった。

未来へのバトン

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校3年 船橋 舞有

二〇二四年一月一日、一六時一〇分。能登地方を震源とする最大震度七を観測する大きな地震が起こった。その後、「令和六年能登半島地震」と命名された。

私が住む石川県野々市市でも今までに感じたことのないような揺れに襲われ、物が落ちたりガラスのものが割れたりもした。また、何より何度も続く余震に精神的に辛く、とても気持ちが不安定な状態で冬休みを終えたのを今でも覚えている。

しかし私が住む加賀地方は大きな被害がなかったものの、古くから住まいし、昔ながらの建物で生活を営む能登地方、特に珠洲市・輪島市では家屋倒壊・道路陥没・液状化現象に加え、火災での家屋減失が多く出た。地震発生直後、石川県知事からの要請で各自衛隊や消防・警察など全国各地から派遣され、一斉に災害支援と情報収集が行われた。

現在もまだ復興の途中ではあるが、そこには沢山の「税金」が使われていると知ったのは恥ずかしながらつい最近だ。

税金と言えば私が思いつくものは「消費税」である。しかしそれが何に使用されているのか、なぜ徴収されているのか、今まで調べることも考えることもなかった。なぜなら疎ましいものだと感じており、マイナスなイメージでしかなかったからである。

そこで今回の能登地震での税金の使われ方に興味を持ち調べてみることにした。

まず壊れた家屋の撤去、道路の応急工事、各インフラの復旧工事など生活をするための基盤作りに税金は使われていた。そして自衛隊による水の供給、入浴支援、物質の調達、また被災状況に応じて医療費の全額及び一部免除などにもまた多くの税金が使われていることを知った。この地震で多くの方が家を失い、水道も電気も使えない状況下で、何度も続く余震に私が感じたものと比べようがないほどの不安と恐怖を被災者の方は感じていたことであろう。そんな中での大きな支援が身体的にも精神的にも支えになったことは間違いないと思う。

また能登地方には古くから伝わる伝統工芸品も多くあり、代表的なものでは輪島塗や珠洲焼、七尾ろうそく等がある。これらに関しても「石川県伝統工芸事業者債権支援事業費補助金」として事業の再開を支援している。

能登は自然にあふれ、歴史を感じることでできる素晴らしい場所である。震災前の元通りになるには何十年とかかるであろう。しかし誰かが納めてくれた税金で、その第一歩を踏み出すことができている。そして、また少しずつみんなに笑顔が戻り、幸せな生活を過ごせる日がくるのではないだろうか。

私もいずれ大人になり社会貢献をする日がきたとき、誰かの不安を取り除くことができるよう納税をしたい。そのためにも日頃から税に対して関心を持つことが重要であり、それが未来へつなぐバトンになると思う。

感謝を納める

福井大学教育学部附属義務教育学校 8年 小俣 昂子

私が今住んでいる家に住む前は大きな道がすぐ目の前に見える家を借りて住んでいた。冬に雪が降ると、除雪車が雪を遠くへ運んでしまい、しょっちゅう朝からご機嫌斜めモードに。雪が大好きだった私にとって、絶好のおもちゃを持って行ってしまう除雪車は、悪者だったのだ。だからこそ、この家に住んで初めて除雪車のいない冬を体験したとき、本当に心躍った。ふかふかで真っ白い雪があたり一面に広がっている銀世界。当時六歳の私にとってそれは最高の景色だった。ところが無邪気に笑う私とは裏腹にどんより曇り顔の大人が二名。私の両親。ここ福井の雪は水分が多いのでスコップでかき分けようとするはずしりと腰におもさがかかる。ここに越してきたばかりの我が家には雪かきの救世主、ママさんダンプもないので、一向にやまない雪を永遠にスコップで運び出す冬休み。案の定腰痛と共に春を迎えていた。

次の冬、前回の反省を生かし雪かきグッズを取り揃えて挑んだ両親の前に立ち上がったのは去年とは比べ物にならない大雪だった。絶望に包まれる我が家。そんな時に現れた救世主こそあの除雪車だった。毎朝私たちが寝ている間に忌まわしい雪を遠くへ連れ去ってくれる、紛れもないスーパーヒーローだった。残った雪をみんなでどけて、雪かきはびっくりするほどスムーズに進んでいった。

「ありがたいね。これも税金のおかげだよ。」そう笑う両親の顔は十四歳の今でもよく覚えている。

立場が変われば視点も変わる。雪を連れ去る除雪車が、私たちが雪から守ってくれていたように、車道をふさぐ道路工事は私たちがより安全に交通機関を利用するためのもの。大きな音を立てる電線工事だってより快適に電気を送り届けてもらえるようにするためのものなのだ。それらがないと私たちはどれほど困るだろう。私のように、目の前からなくなって初めてありがたみに気づくのでは遅い。

また、何より忘れてはいけないのが、それらの恩恵が人の活躍によるものだという事だ。朝早くに起きて雪を掻きだしてくださる人。暑い中外で工事をしてくださる人。市を、県を運営してくださる人。彼らのおかげで今日の私たちの生活が豊かで安心安全なものになっている。間違いなく彼らは私たちのスーパーヒーローなのだ。そんなヒーローの活動資金。それこそが税金。大切な、税金。

地域のため、市のため、県のため。国のためにだってあなたの税金は使われている。そういう言葉をたくさん聞く。けれどそれを支えるヒーローがいること、そっちのほうが何百倍も大事な事実。税金はそれができない私たちの、せめてもの協力なのだ。けして感謝を忘れてはいけないと、そう思う。

森林の未来を描く税

静岡市立清水第七中学校 3年 菅原 佳奈

私の住む県は、自然条件に恵まれ、森林が六割を占める緑豊かな県だ。私は自然環境が身近にあるこの県をとっても魅力的に感じている。森林は、四季の景観だけではなく、環境保全や防災、水の浄化など私たち生活の土台を守り、重要な役割を果たす。私は、この緑多き県の森林環境が維持され、未来へ繋がってほしいと強く願う。しかし、日本の林業の現状は衰退に向かって進んでいる。従事者の高齢化、所有者不明の森林増加による手入れ不足、森林資源の産業育成が停滞するなど直面している課題は山積みだ。このままでは森林の荒廃が進行してしまい、自然生態系が崩れ、当たり前前の生活に悪影響が及んでしまう。

そこで、今年度から新しい国税として森林環境税が導入された。この税は、森林の温室効果ガス排出削減の目標の達成や山林災害を防止するための森林整備を目的としている。年間一律千円を納税することで、未来に向けて林業再生の架け橋となる税だ。千円と聞くと大きな印象ではないが、国民全体では年額約六〇〇億円の大きな税収となる。この集められた税金は、森林面積や人口および林業従事者数から算出された森林環境譲与税として都道府県と市区町村へ配分される。森林環境譲与税は先行してすでに開始されており、私の県では二〇二三年度に一億八千万円、市には二億八千万円と、とても大きな金額が配布された。この税金の用途を調べてみると、県産木材が病院や学校、空港などに使用されていることが分かった。また、市内にある観光施設「日本平夢テラス」の施設内や展望回廊にも多くの県内産ヒノキやスギが使用されていて、伐採した木が有効的に活用できていることを実感した。他県にも県の木材の良さをアピールできる良い機会だと思った。このとおり税金が公共施設に活用されて、だれもが公平・平等に恩恵を受けることができる使い道で嬉しかった。私自身、これから森林が少ない県と協働し、問題を共有することで森林資源を活用した商品開発に期待ができるのではないかと考え、興味を惹かれた。

私たちは、報道で国民に直接関わる税金ばかりに注目をする。しかし、間接的に当たり前の生活を支える税金の用途には無関心だ。きっと未来に向かって税金の種類は増えるだろう。私は、未来を守る納税者になるために、税金の種類に関係なく税の知識を高め、目的を理解し、使い道まで確認をする。なぜなら税金に関心を持つ国民が増えれば、国全体で適正な税金を見極めることができるからだ。このように、国民の見極める力の正しさこそが未来の豊かな社会の実現へと繋がっていく。

山からは当然のように水が湧き出し、森林からは綺麗な空気が放出される。緑豊かな日本。私は願う、税金を通して森林を守り、次世代まで自然環境が保たれるようにと。

困ったときはお互い様

学校法人金城学院金城学院中学校 3年 藤井 智聖

「税務署で表彰を受けてくる！」と誇らしげに出かけた祖父の顔を私は忘れない。

なんでも優良法人に選ばれたらしく、いつもは作業服姿なのに、その日、珍しくスーツ姿の祖父。でも嬉しそうな祖父とは対照的に私の心の中は、税金を取られているのに表彰ってどういうことだろうと疑問に感じていた。

私にとって身近な税金というと消費税だが、会社は法人税を払っているんだと祖父が教えてくれた。調べてみると、法人税は、法人の企業活動により得られる所得に対して課される税で、その名の通り、個人ではなく会社が払う税金だ。また国の税収のトップ3は、消費税・所得税・法人税で、一般会計歳入総額の内約15%が法人税ということもわかった。ただ法人税の計算や申告はとても複雑なため、祖父の会社は専門家の税理士さんに毎年計算してもらっていることも今回初めて知った事実だ。

ところで、会社が税金を払うメリットはどこにあるのかと不思議に思っていた私に、祖父が

「困ったときはお互い様なんだよ。」

だと言い、いい機会だからと会社の思い出話をしてくれた。

実は、祖父の会社は、約四十年前に火事があり、その当時、工場の約三分の一にあたる延べ面積 6617.89 m²を焼失したんだそうだ。でも消防署の方々がすぐに駆け付けてくれたおかげで全燃しなくて済み、半年後には工場生産ラインが完全稼働して無事に復活したことを懐かしそうに教えてくれた。

国や都道府県・市町村は、私たちが豊かで安心した暮らしができるように、いろいろな公共サービスを行っている。そしてこれらの公共サービスを受けたりできるのは、税があつてこそだ。もしあの時、消防車がすぐにきてくれなかったら、今の会社はないかもしれない。そう思うととても怖くなり、税は取られるだけのものだと感じていた矛盾にも気づき、恥ずかしくなった。

税は他にも、道路や橋の整備、犯罪防止や交通安全の確保などに務める警察、学校の建設などにも使われている。こう聞くと、税の力を借りずに生活している人間はいないはずだ。税金は、必要なお金を全員で負担し合うための仕組みなんだと改めて痛感した。

祖父は私に会社を継いでほしいと思っている。昔、税によって火事から助けられた会社だからこそ、税金を納めることで表彰されるのはこれ以上ない喜びがあるのかもしれない。税の作文を書くにあたり、祖父の秘めた思いにも触れることができた。今の私は、税によって支えられる側にいるが、大人になったら祖父の思いも受け継ぎ、きちんと納税したいと思う。少子化により将来は税率も変わっているかもしれないが、その時はもっと『税』の大切さを知ることができる気がする。

拍子抜けするほどの風景

愛西市立佐屋中学校 3年 樋口 葉奈

私は、修学旅行で東日本大震災の被災地である東北地方を訪れ、震災について学びました。東日本大震災の伝承館を訪れたり、伝承交流施設で震災によって自身の子どもを亡くしたお母さんのお話を聴いたりしました。

震災学習の最終日、学習のまとめとしてワークショップに参加しました。ここでは、震災学習の率直な感想などを共有し、学びを深めました。語り部の方のお話を聴くなかで、「思っていたよりも普通の風景で拍子抜けしませんでしたか。」という問いかけをされました。たしかに、伝承館のように意図的に当時の様子をそのまま残している建物は別ですが、想像していたよりもずっと普通の風景でした。それどころか、私が住んでいる地域よりも整備されていると感じるほどで、「震災」という言葉を少しも感じさせないような風景でした。語り部の方はそのことについて、二〇三七年までの国民負担があるからなのだとおっしゃっていました。そこで、その国民負担について興味をもったため、調べてみることにしました。

東日本大震災の直後、現地での救助活動や捜索活動を行った自衛隊や全国の警察の方々、消防の方々の派遣費用などはすべて税金によってまかなわれていたそうです。また、被災地に届けられた救援物資のうち、自治体があらかじめ備蓄していた非常食などは、税金で購入されたものがほとんどであり、津波で流された学校や市役所などの公共施設の建設といった被災地の復興にも国費が使用されます。震災のみならず、他の災害があったときにも税金が使われるそうです。

ここで使われる税金が、語り部の方がおっしゃっていた国民負担の「復興特別所得税」というものです。「復興特別所得税」とは、東日本大震災の復興財源に充てるため、二〇一三年一月一日から二〇三七年十二月三十一日まで、通常の所得税に上乗せして徴収される、税率二・一パーセントの特別税のことを指すそうです。この「復興特別所得税」の対象者は、所得税を納める義務がある個人です。所得税の納税義務者とは、日本国内に居住している人のうち日本国籍保持者か、過去十年間のうち五年以上国内に住所または居所があった人のことを指します。つまり、日本に住んでいるほとんどの人が「復興特別所得税」を納めているのです。

東日本大震災と税金の関わりを調べてみて、税について深く考えさせられました。「税」というと、マイナスのイメージが強くありましたが、税金とは国民が協力し合い、それぞれの幸せを実現するためのシステムであり、被災地の復興だけでなく、困っている人々を支えることにつながるということを「拍子抜けするほどの風景」から感じ、イメージが大きく変化しました。これからは、国民の一人として、税についての知識を深め、税に感謝して生活していきたいです。

観光客と一緒に守る伝統文化

京都市立高野中学校 3年 中島 美妃奈

千年の歴史を持つ京都は、その豊かな伝統文化で多くの人々を魅了し続けています。しかし、観光客の増加に伴い、地元の生活には渋滞やゴミの問題などさまざまな影響が及んでいます。これに対処するため、京都市では「宿泊税」という新しい税金が導入されました。この税金は、京都を訪れる観光客から宿泊費に応じて徴収され、京都の街をより良いものにするために使われています。京都に住んでいるのに知らなかったこの宿泊税が私たちの生活にどのような変化をもたらしているのかを調べてみることにしました。

今年、私は学校からの案内で「子供の文化体験事業」に参加しました。この事業は、宿泊税を活用して私たち子供たちに地元の伝統文化に触れる機会を提供してくれます。特に印象に残っているのが、初めての歌舞伎と能の観劇です。歌舞伎では、役者の迫力ある演技や華やかな衣装に圧倒され、能では、静寂の中で繰り広げられる緊張感あふれる舞台に引き込まれました。今まで触れることのなかった伝統芸能に触れ、今後も観劇に行くとても良いきっかけになりました。これらの体験を通じて、私は京都の伝統芸能の深さや美しさを直接感じることができました。このような貴重な経験ができたのも、宿泊税が京都の文化を支えているからこそです。

世界の他の都市でも、宿泊税を活用して地域文化を守る取り組みが行われています。フランスのパリでは、宿泊税を使って歴史的建造物の修復や公共交通の改善が進められています。これにより、観光客は快適な滞在ができると同時に、地元の住民もその恩恵を受けています。他にも、スペインのバルセロナでは観光税は道路、バスのサービス、エスカレーターの改善など市のインフラ整備に充てられています。観光客から徴収した宿泊税は、更なる魅力的な都市としての発展に寄与しています。京都でも同様に、宿泊税が地域の文化の維持と発展に大きく貢献しているのです。

京都の宿泊税は、単なる財源ではなく、街の未来を築くための重要な資源です。私が体験した歌舞伎や能の観劇は、この税金が地域の文化を守り、次世代に伝えるためにどれほど重要な役割を果たしているかを実感させてくれました。さらに、税金は私たちの社会を支える大切なものです。私たちは納税することで自分たちの暮らしを豊かにし、次の世代に美しい京都を引き継ぐことができます。私はこれからも、京都の伝統文化を大切にし、この素晴らしい街を次の世代に誇りを持って伝えていきたいと思います。そして、税金が私たちの生活にどう貢献しているのかを理解し、納税の大切さをずっと忘れずに胸に刻んでおきたいです。

「空から見る税金」

大阪星光学院中学校 3年 奥谷 漱有

小さな頃からよく各地の航空祭に連れて行ってもらった。航空祭の花形ブルーインパルス、白いスモークとアクロバット飛行で空に様々な模様を描く。映像ではなく実際に近くで観ると、轟音と共にパイロットが人間業とは思えない操縦技術で観客に感動を与えてくれる。ただ、航空祭の開催には各基地への理解を深めてもらうという目的もあるようだ。

なぜ基地への理解が必要なのか、それは基地の全てが税金で賄われているからだ。

自衛隊に配備されている戦闘機の価格は一機あたり百億円以上で、維持費や一回空を飛ぶだけの燃料でも膨大なお金がかかる。自衛隊の運用費用は防衛関係費と呼ばれ、令和六年度の国の歳出の約七%を占め、近年は増加傾向にある。

ただ国の安全保障や防衛政策はとても重要だと僕は思う。今平和な暮らしができて日本には、島国という立地やアメリカ軍基地の存在も大きいと思うが、自衛隊による防衛力が必要だろう。そういう面では、防衛関係費が一番遠いところで使われている税金に見えるが、実際は一番身近で大切な税金ということになる。

平和というものが、本当に握手と言葉だけで解決できるのであれば問題ないが、実際には複雑な利害関係、領土や資源の問題などがあり、自分の国は自分で守る精神でいなければならないのだ。防衛力は一朝一夕で備わるものではなく、長い年月の積み重ね、そして新しい人材を育てるリレーが必要になる。

僕がこのように理解するようになったのも、各地の航空祭に連れて行ってもらって、自衛隊の仕事の一部を見てきたからである。展示や基地の見学程度であっても、やはり実際に見るということは貴重な体験であり、日々厳しい訓練をされている自衛官の方々の姿勢や所作などを見ると、僕自身が気が引き締まる思いになる。しかし、訓練中の戦闘機の轟音だったり墜落事故の可能性であったり、基地近隣の住民の理解の必要性の実際に行ってみるとわかる。直接国防に使われているわけではなくとも、国民に理解してもらうために使われる税金には多大な意義があるだろう。よって、ブルーインパルスを飛ばすために使われる税金には次世代の自衛隊を形成し、国民全体で国を守るようにするという役割があるのだと思う。

僕たちが払う税金が、自分たちと関係の薄いところに費やされるのには納得いかないこともあるだろう。だからブルーインパルスの存在意義などについて言及されることも多いが、防衛関係費に関わらず、必要のないところに税が使われることなどないと自分でも理解できるように知識を深めることが必要だと感じた。あまり知られていない税の利用先についても認識しておくことが大切なのだろう。

渋沢栄一を通して税を考える

神戸市立長峰中学校 3年 西川 結愛

令和六年の夏に新紙幣が発行され、一万円札に記される人物は、福沢諭吉から渋沢栄一に変わることによって渋沢栄一という人物が大きく取り上げられた。渋沢栄一とは国立銀行を設立し、その他多くの会社を立ち上げ、日本の近代化に貢献した人物、というのが歴史の授業で学んだことであつたが、新紙幣発行に合わせて多くのテレビ番組に取り上げられる中で、さらに大きな功績があることを知った。それが国や国民を豊かにする税制度への取り組みだ。

埼玉県の大きな農家に育った栄一は、たびたび領主からお金を差し出すように命じられることに対して、自分たちが努力して集めたお金を権力者が当たり前のように使うなんて納得できないと十六歳の栄一が訴えるのだ。ほとんど私と同じ若さで、こうした考えを持ち、毅然とした行動に移す姿に大変驚いた。

その後栄一は幕府の一団として訪れたフランスで大きな体験をしたという。一つ目は戦争で負傷した兵士を国の負担で治療するという制度があること、そして会社を作る時にはみんなでお金を出し合い、利益が出たらそれをみんなで分け合うという株式会社の仕組みである。権力者がお金を吸い上げて事業を行い、お金を出しているのに恩恵も少なく、守ってもらえない日本との差にショックを受けたに違いない。そしてこの体験が国民から税金という形でお金を集め、そしてそれを有効に使うことで国民は豊かになり、さらに一生懸命に働くことで国が一層豊かになるという考えになったのだ。

栄一が病人や貧しい子供などの保護施設を運営していた時、貧しい者を税金で養うことに対する批判的な意見もあつたそうだ。しかし、栄一は過度な貧富の差の拡大を防ぎ、よりよい未来のための税金の使い方を考え抜き、安定した税制度の確立を目指した。

私たちの暮らしはみんなの税金で支えられている。私たちがきれいな学校で快適に学習できるのも、図書館で本を読めるのも、安心して生活できるのもみんなでおし合つた税金のお陰である。教科書にも「この教科書は税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」との記載もあり、税金の大切さについては何となくではあるが知つたつもりでいた。しかし、今回渋沢栄一の生き方を通して税について改めて知ることによって、税というものの共生や共助の理念を感じることができた。さらには、多くを稼ぐことができたものはその分多くの税を払うことで、富の分配という役割や福祉的な側面もあることを知ることができた。

私はいま多くの大人や社会に支えられる側にいる。しかし、私が大人となり納税する際には、今度は私が支える番であり、共生社会に役立っているという誇りを持てるような納税者になりたい。

「助け合いの架け橋」

宝塚市立光ガ丘中学校 3年 大杉 陸

私の父は建設業の現場監督である。橋を架けたり、道路を作ったりといった、国から請けた大規模なプロジェクトにも携わっている。ある時、父の仕事について聞いてみたことがある。

まず、初めに知ったことはそれらの仕事が税金によって行われていたということだ。例えば、二〇一五年に起きた関東・東北豪雨による鬼怒川の氾濫。堤防の一部は決壊し、川の水が街に流れ出した。テレビでも、連日放送されていたそうだ。その災害復興にあたり鬼怒川の堤防の強化工事に父は約一年間従事した。父によると、この工事の発注者は国土交通省、つまり国である。したがって、父が携わっていた鬼怒川の堤防復興工事は、税金によって行われていたのだ。あれから九年、鬼怒川の堤防は決壊することもなく市民の安全を守り続けている。

父は「常に丈夫で安全なインフラ設備を作る」ということを信条として、働いていると語った。そんな、地域に暮らす多くの人々のために汗を流す父を、私は誇りに思う。このような尊い仕事をして人々の安全を守れるのも、国と税金のおかげである。税金というひとりひとりが納めたお金が、巡り巡って人々の生活を守っている。税金のおかげで、被災地から遠く離れた人でも、被災者を支援することができるのだ。私も、被災地を映したニュース映像を見て、何もできない自分にもどかしさを感じたことがあった。しかし、そんな自分も大人になれば、納税という行為を通して被災者を支援できる。そのことを父の話から気づき、嬉しく思った。また、このような大規模なプロジェクトでは、作業員だけでなく、建設資材を取り扱う人、建設機械を製造する人といった非常に多くの人々が携わる。そのため、雇用にも良い影響を及ぼしていると思う。

私たちが住む宝塚市でも、一九九五年一月一七日に阪神・淡路大震災という災害に見舞われた。多数の人命が失われるとともに、設備や建物等に大きな被害をもたらした。それらの復興にも、税金が使われていた。私たちが住む宝塚市も鬼怒川と同じように、災害の復興に税金が使われていたのである。自分が住むこの大切な街を守るためにも、私たちがいずれ納める税金が不可欠なのだ。

税金と聞くと、マイナスなイメージを持つ人が多いだろう。しかし、税金というシステムのおかげで、遠くの被災者を助けたり、自分たちの住む街や暮らしを守ったりすることができる。税金とは助け合いの精神の象徴、つまりは人と人とを繋ぐ架け橋なのだと、今回改めて思った。その精神を後世へと繋げるために、税金の意義について、将来を背負う私たちが考えなければならない。

もしも税の仕組みが無かったら

奈良教育大学附属中学校3年 安井 友那

私達の生活と税は、深く関わっている。学費やゴミ収集の費用などは税金によって賄われており、全ての国民がある一定のレベルの生活を維持することができるようになってきている。このことは知らない訳では無いけれど、税の仕組みについて考えたり、実感する機会はあまりないように思う。だが私には、この税の仕組みによって今の私達の生活を送ることができているということを理解した出来事がある。

それは、今年に入ってから、私がある感染症にかかり、病院を受診した時のことだった。私は、その月に入ってから二度目の受診で、いくつか薬を処方してもらったにもかかわらず、受付の人にお母さんが「今回はお金いららないんですよね。」と言っていたことが気になった。家に帰った後、そのことをお母さんに尋ねてみると、それは税の仕組みのおかげであることを知った。これが衝撃的だった私は、お母さんと「もし税の仕組みが無かったらどうなっていたのか。」ということ話を話してみた。すると、来年小学三年生になる私の妹のことが話題に上がってきた。

私の妹はダウン症で、その影響から、生まれた時に普通繋がっているはずの胃と腸が繋がっていなかった。そのため、生後七日で胃と腸を繋げる手術を受け、約三ヶ月間NICU（新生児集中治療室）にいた。妹が生まれた時私は七歳で、このことについて深く考えたことは無かった。だが、今考えてみると、手術やNICUにかかる費用はとても高額で、私達のような一般家庭では簡単に払うことができない。妹は、税金が巡り巡って保障金となり、手術やNICUに入る費用が負担されたため処置を受けることができ、命が助かった。この時税の仕組みが無かったら、現在の妹と一緒に暮らしている未来は無かったかもしれないと思うのだ。

もちろん、私達が税の仕組みによって助けられたのは、過去のこの出来事だけではない。妹は今でも様々な支援を受けているし、私達家族も福祉といった公共サービスの恩恵にあずかっている。現代社会では様々な人が生活をしているが、誰しもが税の循環の中で生きているのだ。税金と聞くと払うだけのもののように感じてしまうが、私達は税金による沢山の補助によって、今のよう暮らしができています。そのため、当たり前であるこのことを忘れてはいけないと思った。

私はこのように、「もし税の仕組みが無かったらどうなっていたのか。」ということを考えてみると、税金によって今の生活が成り立っていることがわかり、税の仕組みは現代社会に必要不可欠な存在だと実感することができた。将来この社会を背負うことになる私達が税について一度考えてみることは、より良い社会を作っていくための第一歩になる。そのため、今よりも沢山の人が税について知り、考えていくべきだと私は思う。

「税金で繋ぐ未来へのバトン」

和歌山大学教育学部附属中学校 3年 北野 伊武季

きらりと光る笑顔。真剣な眼差し。全力疾走。競い舞う赤、黄、青、緑色の応援旗。今、和歌山大学附属中学校の運動場では「附中杯、陸上競技と応援合戦の創作ダンスが三学年ブロック対抗で行われています。学生達は砂だらけになり、一致団結、優勝目指します。そんな学生達を運動場の中心で一本の「根上がり松」が親のように見守っています。根上がりの高さ3.5m、根周りは8mあり、樹齢五百年と言われているクロマツです。いつ見ても立派で安心感を与えてくれます。それがあたり前に過ごしていたけれど、なぜ運動場の中心にポツンと一本？。その上、きれいな状態をずっと保つことが出来ているのか、疑問に思い調べてみることにしました。

かつて、運動場は「岡山砂丘」と呼ばれ、和歌山湾の海浜でクロマツ林がありました。豊臣秀吉が和歌山城を築くうちに、砂丘は姿を変えていきます。そうして、クロマツの根元の砂が流され、根上がり松となりました。1958年に和歌山県指定文化財に指定されましたが、マツクイムシ被害によって、1996年に伐採され、一本のみとなりました。

最後の一本となった根上がり松は、保全事業によって守られています。費用の約60~100万円は、和歌山県の税金と小中同窓会から拠出されています。これには、未来への願い、人の気持ちがあり、価値のあるものになっています。

このように僕の周りにあたり前にあるものは、社会によって支えられていることに意識が向きました。僕たち中学生は教育費112万円のサービスを受けています。だから、それに対して子供の僕たちもより一層気を引き締めて、期待されていると思って授業に臨もうと思います。

国の収入は消費税、所得税、法人税などで、支出は社会保障や地方交付税交付金などです。国や都道府県、市町村は僕たちが豊かで安心した暮らしができるように、いろいろな公共サービスを行っています。

一歩僕が家の外に出ると、道路、信号、公共の建物、公園、病院…などがあることが分かりました。これが税金のおかげであり、この税金で安心できる場所が保たれているのだと実感しました。

僕が働いて、納税する時が来たら、高齢化率40%以上の自治体が全国で4割を超えてしまいます。さらなる税金負担がかかるでしょう。それに対して、税金の使い道の再考と税収アップを今から僕たちも大人たちと考えていかなければならないと思います。

「秋風のふきあげにたてるしら菊は花かあらぬか波の寄するか」と古今集には根上がり松から見た運動場の光景が記されています。五百年後の未来へも気持ちのバトンを繋げられるように、税金を考え社会みんなでシステムを支えていくことが大切だと考えます。

今こそ、税について考えるべきだ！

宇部市立藤山中学校 3年 白尾 駿弥

最近私は、今までと比べて言葉についての知識が増えたせいか、新聞やニュースに目を通すことが多くなりました。そのことから、今までは「難しいから。」と諦めていた税の仕組みについて知ることができ、興味がわいてきました。そこで、税に関する三つのことについて考えてみました。

一つ目は、税の使い方についてです。先日行われた、都、道、府、県知事選の記事を読んでいると、「当選後、税をどう使っていくか」が注目されていました。税は基本的に国民のために使われるものなので、国民からすれば、その使い道は投票する上での大事な決め手です。そのため、限りがある税をどのように使っていくのが良策か、先を見越しながらみんなで考えることが大切だと思いました。そうすることで、今、日本が抱えている問題が改善されていくと思います。

二つ目は、税の仕組みについてです。今現在、日本では物価高と円安によって、企業や消費者などの支出が増えています。そのため国による財源確保の施策として、増税が行われています。

ですが、物価が上がると、税を払う国民の給料も上がることになり、円の価値は今までと同じになると思います。よって、増税の効果はあまり長くは続かないと思うのです。そのため、増税よりも、働きやすい環境づくりをしたり、少子高齢化問題を改善したりして働く人を増やすほうを優先するとよいと思います。そうすることで、国が発展していき、増税しなくてもよくなると思います。

三つ目は、税の力についてです。今年度から、「森林環境税及び森林環境譲与税」という国税が追加されます。内容は、国内に住所のある個人に対してお金を徴収するというもので、国土の保全、水源の維持、地球温暖化の防止、生物の多様性の保全などを管理していこうというねらいがあるようです。

このことから、近年、新たな税（法律）を追加するほどの問題が起きているということがよく分かります。そして、その問題を解決する策として税が使われているということを踏まえて、どれだけ税の力が大きいのかということが実感できると思います。

以上のことから、特に、紛争や環境問題が絶えないこの時代、国の中のことでなく世界規模のことも変えられる税をどう使っていくのか、あるいは、どう付き合っていくのかを何度も考え、深めていくことが大切だと思いました。そうして得た知識で、未来をいい方向にもっていきたいです。

税と権利

岩国市立周東中学校 2年 山根 愛

税は自分と他の人々の権利を守るために必要であり、この生活に欠かせない存在になっている。私は税について調べてそう強く感じた。

しかし、私は税について調べるまで税についてあまり興味はなかったし、ただただ高まる税に対して少し不満を感じたりもしていた。そんな私が税に対して興味を持ったきっかけは、十三年前の東日本大震災での税の活躍を知ったことからだった。

その地震によって被害を受けた、宮城県気仙沼市に税金二百六十四億円を使って被災者のために仮設住宅などを作り多くの被災者の支援や復興に役立てたり、生活上での権利を守った。このことから、私たちが日頃から払っていた税がこのように実際に災害時、被災者に安心と笑顔をもたらすことができていることを被災者の声を通じて知り、驚きと嬉しさや、前の私のように自分の払った税が必要とする人々に役立っていることを知らないで税を払うことに対して益々不満を持っていくのではないかと思い、もったいなさも感じた。また、被災後も変わらず生きる権利が守られていることに税の必要性がよくわかった。

他にも「権利」に着目すると、私たちの生活で役立っている税がとても目立って見えてくることがわかる。一つ目の例はごみ収集が無料なのは、きれいな町で暮らす権利があるからだということ。二つ目は点字ブロックが設置されているのは、誰もが自由に外出する権利があるからだということ。三つ目は病院の診察代や自治体の健康診断が無料なのは、誰もが健康に過ごす権利と生存権があるからだということ。そして、権利があるからだけでなく、みんなが安心して日本で暮らせるように、絶対に無くなってはいけなくて、守らなくてはならないものだからだ。

このように私たちの生活から少し違った見方をするだけで、税の必要性やこれまで当たり前だと思っていた生活の一つ一つにありがたさや驚きを感じ、税は決して無駄ではないことがよくわかる。

この税について調べた貴重な機会を通じて、税の必要性やメリットがたくさんわかった。災害時の被災地の復興と、被災者の変わらぬ権利の保護が、地震国である日本は必須であり、税を日本で暮らす人全員が払うことから、自分が日本の未来を支える一員であるという自覚と、協調性が磨かれると思う。今回税について学んだことを家族などに私の口から、税の必要性を「権利」という視点から伝え、知ってもらいたい。

本当の税・導入してみたい税

岡山市立竜操中学校 3年 富吉 亜弥

みなさんは税と聞いてどんな印象を持つでしょうか。私はあまり良い印象を持っていませんでした。なぜなら、ニュースや新聞などで税に対する明るい報道を見たことがないからです。そこで、実際に調べてみると予想以上に自分が何もわかっていなかったことがわかりました。警察や学校、救急車などに使われているだけじゃなく、社会の問題を解決するために税が作られることを知って驚きました。

例えば、アメリカは肥満の人が増加したため、炭酸税を法定しました。税額は二十八グラム当たり約十三円が課税されました。炭酸飲料の売り上げは下がったらしく大きな効果がありました。ただ、炭酸会社は大変だっただろうと少しかわいそうに思いました。

税がもし制定できるのであれば、電子機器の廃棄税を導入します。日本は、携帯電話や家電など電子機器の廃棄量を大陸ごとに比較すると、アジア大陸がだんとうつに多く約二千四百九十万トンもありました。電子機器にはレアメタルが含まれている場合があり、「都市鉱山」とも呼ばれるほど活用のポテンシャルを持っていますが、一方で鉛や水銀といった有害物質を含むものもあり、健康被害や環境悪化の懸念があるため、電子機器の廃棄税を制定することで、少しずつ解決していくのではないかと考えます。また、室内税も導入します。コロナ禍で運動不足問題があり、コロナ禍でテレワークという働き方が増え、外へ外出する人が減ったと思います。運動不足がもたらす悪影響は多くあり、解決するために室内税を導入したいです。家事税も導入したいです。夫婦共働き世帯の一日あたりの家事関連時間が妻は七時間二十三分だったのに対し、夫は一時間五十四分という大きな時間の差があります。これは、家事は妻がすると思っ込んでいる男性が多いからです。そこで、家事税を導入することで、夫がサボっていたら税が増えるため、積極的に家事に参加すると思います。

このようなことから、私たちが日常で払っている税金は、社会の問題を解決するために税が作られています。解決するために、国民から「こんな税は？」というアイデアを募集することで、自分たちでは考えられない多くのアイデアが集まると思います。私は、税にもっと多くのことを知り、これからの人生や生活に生かしていきたいです。

「夢は国税調査官!!」

これは、最近の我が家で飛び交っているワードです。国税調査官とは、納税者から提出された確定申告書に基づき、申告、納税が適正に行われたか調査を行う人のことです。国税庁の令和五年度査察では、脱税総額が約 120 億円であり、ピークの昭和六三年度は約 714 億という高額であったことに驚愕しました。

僕の姉は、現在高校三年生で大学受験を控えています。その姉が将来就きたい職業が、この国税調査官です。その姉の夢は、高校二年生の時に一日税務署長という貴重な経験をしたことでより一層強くなったそうです。

姉は、0歳からひどいアトピーに悩まされ、十五歳から高額な自己注射を二週間に一度打っています。医療費は三か月分で約三十七万、年間で百四十万かかる計算になります。それを、一般家庭から捻出するのは難しいですが、健康保険と乳幼児等医療費助成制度で自己負担なく治療ができています。この治療のおかげで姉は明るくなり、その人生は大きく変わりました。

姉は税金で自分が救われたように、今後高額な治療を受ける人、今から教育を受ける子供たちの将来のために、国税調査官という職業に就き、脱税を許さず国民全員が公平で正しい納税をすすめていくことで、自分が受けた感謝を社会にお返ししていきたいと思っているそうです。

そんな姉の影響で僕自身も税金について勉強しました。そして、自分たちが受けている教育の小・中学校の校舎や教科書、先生の人件費、自身の治療も税金からの恩恵を受けていることを知り、収入や社会的背景に左右されることなく、誰もが医療や教育を平等に受けられるようにする社会をつくる「根幹」が税金なんだと知りました。

今、日本では少子高齢化が進み、高齢者の年金や医療費など社会保障の費用が増え、それを支える労働人口が減少している現状があります。高齢者に対する現役世代の人数が減っていくにつれて、現役世代への税負担が増えることは容易に予想できます。税収が減れば、医療費負担額の増大や公共サービスの縮小、年金額の減少など社会の根幹がくずれてしまいます。

今後増税という未来は、社会にとって必然なことなのかもしれません。増税に対して否定的な意見が多いですが、みんなが支払っている税は、自分自身の生活や教育などに還元され、世の中のどこかで必ず誰かの役に立ち、社会を発展させ生活を豊かにしていると分かれば増税への見方が変わるのではないのでしょうか。

将来、僕も納税者になります。中学生の今から税について関心をもって学ぶことで、自分たちが支払う税が何に使われ、社会に役立っているのか理解していきたいです。

「お大事にしてくださいね。」

の言葉と共に、病院の窓口で返される保険証や診察券。私や姉が受診したときには、必ずもう一つ返してもらう物がある。それは、子ども医療費助成資格証という証書だ。私の住んでいる新居浜市には、十八歳以下の子どもの医療費は無料となる制度がある。無料と言っても医療費が発生しないという意味ではなく、本来支払うはずの自己負担分を、公費から助成してくれるというものだ。

私は夏休みに入る少し前、指を骨折して通院することになった。通院中に、母が窓口で財布を出すことは一度もなく、私は無事に治療を終え、元の生活に戻ることができた。お金の心配をせず治療を受けることができるこの制度に、私は何度も助けてもらっている。そしてこの制度の源となるのが、私たちが日々納めている「税金」だ。

税金は、私たちの生活を様々なところで支えてくれている。しかし日本では、税に対してマイナスな感情を抱く人が多い。それは一体なぜだろうか。私は、他の国と比較することで、その理由を考えてみることにした。

毎年国連が発表する「世界幸福度ランキング」で七年連続一位のフィンランド。この国では消費税が二十四パーセント、その他の税も高税率にも関わらず、国民の満足度は八割を超えている。それに対して、日本の順位は五十一位、なんと主要七カ国の中で最下位だという。私には、他国より税率の低い日本の方が幸せではないかと思ったが、調べていくうちに考えが変わっていった。

フィンランドでは、国民全員の医療費も大学までの教育費も全てが無償だという。そして、出産育児に関わる制度や失業保険など、国民の生活を守る為の社会保障制度が充分整っていることがわかった。私はとても驚いたが、高い税率でも、そのおかげや安心で豊かな生活を得られている、という実感があるからこそ、不満が出ないのだと思った。

私たちの日々の暮らしは、税金の支えがあるからこそ成り立っている。日本でも一人一人がもっとそれを実感できれば、幸福度の上昇に繋がっていくのではないだろうか。

日本は今後も少子高齢化が進み、社会保障費は更に必要になってくるだろう。そしてまた、私たち国民の負担は大きくなり、不満の声が上がるのが想像できる。だが、その声を減らす為にできることもあると、私は思う。

それは、国や自治体がもっと税金の使い道を広く明確にし、納得して納税してもらえるようにすること。そして私たちも感謝の気持ちを忘れず、税金についての知識をもっと深めていく努力をすることだ。

将来、私たちが社会に出て納税者となったとき、納得し、安心して税を納められる国であって欲しい。そして一人でも多くの人が、「日本に生まれて幸せだ。」と思える国になっていて欲しいと願っている。

命を救った税金

福岡市立城南中学校 3年 石川 美月

一月一日。石川県の能登半島で震度七の巨大地震が発生した。能登半島地震だ。

この地震で多くの人々が亡くなり、およそ八万一二四二棟の住宅が被害にあった。しかし、この地震から半年経った現在、道路や水道などの復旧が進み、お店も徐々に営業を再開し始め、生活しやすい街へと復興を遂げている。私は、大規模な地震で大きな被害を受けた街がこんなにも早く復興するために、どのような人が動き、費用はどのように用意されたのか疑問に思った。

私は小学生の頃、石川県に住んでいた。そこで当時の友達に地震後の状況について聞いてみたところ

「道路が崩れて家に帰れない状態だった。でも自衛隊の方に助けてもらった。」と言っていた。私はそんな状態だったことに衝撃を受けたと同時に、少し安心した。自衛隊の方はどんなに危険な場所でも、私達の命を優先して活動してくれる。どんな場合でも助けに来てくれる「自衛隊」は私達にとって、すごく大切な存在だ。その自衛隊の仕事である、国の防衛や災害派遣などの活動には私達が払う税金が使われている。税金があって自衛隊の活動ができていることに気づき、今まであまり意識したことがなかったが、税金の大切さを強く感じた。また、災害時に怪我をしたときの医療費や仮設住宅の建設にも税金が使われており、地方税や国の補助金、寄付金、地方債といった様々な税金が復興のために県に寄せられている。その中に「義援金」というものがある。これは被害の大きかった市と町の全ての住民に一人あたりの配分を決め、申請できるというものだ。能登半島地震を受けて県に寄せられた義援金は、なんと五三〇億円を超えていた。これらのお金は、募金活動などで集められている。街の復興のためには、多くの人々の協力がないと遂げていくことはできないと改めて実感した。私達の払っている税金や募金活動など一人一人の支援が積み重なって社会に貢献している。

私は、税金に対してあまり深く考えたことはなかったが、今となっては命を救うためにも税金は重要であり、とても大きなものである。

—もしも、あのとき自衛隊が派遣されていなかったら—

友達はもっと危険な状態にあっていたかもしれない。税金によって救われたと私は思う。様々な支援・協力があって今、能登半島地震からの復興を徐々に遂げている。

世の中は税金によって成り立っており、一人一人の税金が誰かの助けとなって社会は動いている。今はまだ私達は、税金によって守られている側だが、次は私達の番。大人になり、社会に貢献するためにも税金を納めて国の未来を担っていかなければならない。税金への感謝を忘れず暮らしていく。幸せな未来になるように。

私の生活を支えるもの

福津市立福間中学校 3年 毛利 真琴

私の姉は面白い。「私の頭はファンタジー！」と言ってしまうほど夢の国が大好きで明るい姉は、勉強や運動は少し苦手だがディズニーに関する知識は豊富で、ディズニーの曲を得意のエレクトーンでたくさん演奏してくれる。こんな楽しい生活を送れるのは、私達が日本に生まれたからだと言ってくれた。

約十七年前、母は姉を出産する際、切迫早産で約百日間の入院をした。そして姉は出産予定日より四か月早く、六百グラムの超未熟児で生まれた。母の産後は良好だったが、出産までの入院費用は百万円位かかったそうだ。これには診察代や点滴や注射等の治療費、食事代も含まれるので決して高額とはいえない。

一方姉は、生まれてすぐにNICUに入り六か月間入院した。まだ目も見えない、自力で呼吸もできない、ミルクを飲むこともできない状態だったので、保育器の中で人工呼吸器を装置し、ミルクは胃に直接チューブで送られ、点滴で薬の投与を受けた。その間、輸血や目の手術も行った。姉は、酸素吸入をしながらの退院だったが、私が生まれる少し前にそれも無事に終了している。姉の入院時の医療費は合計数十万円だったが、その請求は病院ではなく市から送られてきたそうだ。

母の入院費用は自己負担が三割、姉の医療費も未熟児療育医療制度の対象となり自己負担の軽減があった。なぜ、母や姉の医療費を全額支払わずに済んだのか、調べてみると「社会保障」という言葉にたどり着いた。「社会保障」とは、年金、医療、介護、子育てなど、国民の生活を支えるためにつくられた制度である。そして税金の使い道として最も多い額を占めている。もしこの制度がなかったら、私の家族は高額な医療費により生活が困難になっていたに違いない。ひょっとしたら、その負担が原因となり、妹の私が生まれてくることがなかったかもしれないと思った。

現在、国民には所得税や法人税、消費税などの納税の義務が課されている。これまで一番身近な消費税でさえ、自分の小遣いが減らないようにと、食品は八%、それ以外は十%のようなことしか考えてこなかった。税金の使われ方なんて気にも留めなかった。しかし姉の出生時の話を聞く中で、税金のことを勉強してその使われ方を意識するようになった。社会保障、公共事業、防衛、教育など国民の安心安全と、未来への投資にも使われていることを知った。何より、私達家族がその恩恵をこんなに受けていることを初めて知った。

今姉は、毎日元気に自転車で通学し、高校生活をエンジョイしている。そしてディズニーへの家族旅行を楽しみにしている。この幸せな生活が多くの人々の支えによってつくられたものだというのを忘れてはいけない。私も多くの人々が幸せな生活を送れるように、たくさん勉強をして自立した社会人になって、心を込めて納税できる大人になりたい。

税金の使い道と幸福度

福岡市立三宅中学校 3年 高井良 実音

情報番組を見ていると、社会保険料や消費税や児童手当などさまざまな税に関する情報が流れてくる。しかし日本人は税に対してプラスのイメージよりマイナスのイメージを持つ人の方が多いように思う。その二つの理由に納税したことに対して自分たちへの還元されているという実感の低さと将来への経済的不安も関係していると考える。

令和元年十月にそれまで八%だった消費税が十%に引き上げられた。世界の国々と比べて日本の消費税率は十一位である。驚くことに、消費税率が二十五%で二位であるデンマークは幸福度ランキングで二位なのに対して日本は五十一位であった。この大きな開きに対して私は、大きな疑問を覚えた。デンマークの人々は納税に対してプラスに受け止める人たちが多く、その理由として医療費・介護サービスが無料で、大学までの学費は国が負担してくれ、出産費も無料で育児休暇中の給料もきちんと保障がされている。無料で使うことの出来る結婚式場や葬儀代もある。デンマークの人々にとって税金の使い道はとても透明化されており、生活の中で恩恵を受けていると実感できることによって納得して前向きに納税している人が多いことが分かり、そこには日本との大きな開きがあることを感じた。デンマークのロスキレ大学のベント・グレーベ教授の言葉に「国の成長とは経済成長ではない。GDPでもない。」という言葉がある。その言葉の表すように、安心ができる生活を基盤として国民の幸福感の内の人々の生活の質に転換できてこそ、さまざまな競争力が生まれると考えられている。

政治に対しても国民一人一人が関わる姿勢が強く、自分たちの力で社会は変えられると考えているため国会議員選挙の投票率は常に八十%を保っている。それに対して日本人の投票率は五十%代である。このことから、日本人は政治に対して「受け身」である傾向が強いと考えられる。税金の使われ方は、行政のホームページに使われた報告など掲示してある。しかし「受け身」であるため情報を収集しようとせず、国が教えてくれないという思考になりがちである。そのため税金の使われ方が分からず、納税するにもネガティブになる。もっと税金が何に使われ、どのように役立っているのかを知り、以前よりもより良い生活に変わっているのか理解していればもっとポジティブな意識が芽ばえるのではないかと思う。その事から、自分が選挙権が得られるようになったら税金の使い方を任せる人を選定する投票には自分も政治に関わっているという意識で能動的に参加したいと思う。

相手の立場や回りの人々のこと、自然環境について多くのことに目を向けながら、さらに自ら知ろうとする意識が大切だと考える。また、全ての人が豊かさと幸福度を実感できる社会に日本も近づいていく事を私は信じている。

税が添える生活の彩り

国立長崎大学教育学部附属中学校 3年 小嶺 桃佳

「増税反対。」「負担だ。」マイナスなイメージに捉えられがちな税。税を自分にはあまり関係のない遠いもの、として感じている人も多いのではないか。しかし、本当に税は「生活を圧迫するだけの遠い存在」なのだろうか。

昨年末、私たちの地域で長く親しまれてきたスポーツセンターが閉館した。愛され続けた場所だっただけに、地域に走った衝撃は大きく、そこでエアロビクスをしていた私の祖母も、がっくりと肩を落としていた。

そんな祖母の救世主の一つは、公民館講座だった。祖母は、講座を通して、たくさんの知識や新たな友人を得て帰ってくる。大好きなエアロビクスも、公民館講座などで続けられている。興味のあることを気軽に学べ、さらに、同じことに関心をもつ人々と知り合うこともでき、祖母にとってとても有意義な時間となっているようだ。

そんな祖母に影響を受けたのか、今度は祖父が、公民館での囲碁教室に参加し始めた。祖父はもともと仕事一筋で、交友関係も限定的だったが、今では幅広い年齢層の個性豊かな方々と囲碁を楽しんでいる。最近では公民館に足を運ぶ回数も増えたそうだ。公民館での交流は、祖父母の生活をより一層明るいものにしてきている。

祖父母の生活をより彩っていている公民館は、どのようにして運営されているのだろうか。調べると、公民館は基本的に市町村が運営しており、「地域性」、「教育専門性」、「公共性」が運営の原則として定められていることが分かった。また、私の住む長崎市では、いくつかの公民館の改修工事のために予算が使われていた。公共の施設は、誰もが、楽しく実りある時間を過ごせるように運営されている。

公共施設について考えて、私たちの毎日を継続的に支えてくれるような仕組みが意外にも近くにあることに気づいた。それらがあるのは税が使われて、私たちの生活の礎が知らぬ間に築かれているからだ。また、特に公民館では、ホール、和室、調理室など数多くの施設が備えてあるため、用途に応じて選択して使うことができる。税で運営されているものを利用し、自分の生活をより明るいものにする選択肢を得られるのだ。加えて、このような場は、税金の活用により、たくさんの人が長く、継続的に利用しやすい。公共施設は「それぞれの地域に根ざした交流の場」としての価値がとても高いのだと思う。

社会に目を凝らしてみると、生活の中で税が還元されている部分がきっと見つかるはずだ。思ったよりも身近にあり、私たちが自分の人生をどう彩っていくかをサポートしてくれる税。「義務」としてただ払うだけではなく、「なぜ払うのか」を改めて考え直し、自分の人生をより色彩豊かにしていきたい。

税金と歩く

八代市立第五中学校 3年 福嶋 悠瑞花

「税金についての作文か。消費税について書けばいいな。」先生が作文の説明をされたとき、私はこう考えていた。

夏休みのある日、私は整形外科に通院した。その際、お医者さんは「その靴にも税金が使われているよ。」と話された。いつも履いているこの靴に税金が使われていることに驚いたし、私は税金について何も知らないことを実感した。

私は一歳の時に、扁平足になった。小学校二年生からは凹足という足が変形する病と共に生きている。凹足はハイアーチともいい、土踏まずが通常より高い状態になる。そのため足の前部と後部でしか体を支えられない。安全に歩くためには専用の靴が必要になる。一年半ごとに靴型の装具を作り今まで履いてきた。

去年、新しい装具を作る際に「補装具費支給制度」を利用することができた。

「補装具費支給制度」とは車椅子や義肢などの補装具を作り替えたり、修理したりする際に、費用の多くを市町村が支払ってくれる制度である。そのお金の税金が使われていることを知った。母はこの制度について、

「支給制度があってよかった。みんなが納めた税金だから、靴を大事に、きれいに使いなさいね。」と話してくれた。

靴がないと夜中は眠れないほどの強烈な痛みが襲ってくる。靴がないとふわふわした歩き方になる。私の生活にとって、装具は必須のアイテムだ。この道具は税金という人々の手助けで作られている。今までこのことを知らなかった。知らなければ、税金という人々の思いやりに感謝をすることさえ、できなかった。

私にとって税金は「大人」というイメージがあった。しかし、この作文を書くにあたって、私のイメージは一変した。教育の充実、警察や救急車などの公共サービス、学校や公園などの公共施設。どれも私の靴と同じで当たり前のものと錯覚していた。今後、少子高齢社会の日本では社会保障費は増加し、一人当たりの税金の額も大きくなる可能性がある。この時に、税金に対して不満をもつだけでなく、税金が何に使われているのかを知り、身近に使われる税金に感謝できる世の中になってほしい。きっと私の靴のように身近なものに税金は使われているのだから。

この十五年間、私は常に装具と共に歩いてきた。そこには税金が使われている。これからも装具、つまり税金と共に歩き続けるだろう。支えてくれる税金に感謝し、さらに私も税金を納めることで、同じ病気に苦しんでいる人を支えていきたい。

税は幸福をつなぐバトン

大分大学教育学部附属中学校 3年 中川 美羽

私は、湯けむりがもくもくと立ちのぼる景色が好きだ。私が住む大分県別府市では温泉などの観光業が盛んで、多くの人を訪れる。

そんな温泉に関してつくられた税が、入湯税。これは、鉱泉浴場における入湯に対して入湯客が納める税金である。鉱泉浴場とは、一般的に、天然温泉と呼ばれるミネラルを含んだ水を使った浴場のことを言う。「なぜ、入浴料を払っているのに税金も納めなければいけないのか」と思う人は多いと思う。だが、私は入浴料と入湯税は大きく違うものだと考える。入浴料は、お風呂を提供してくれた施設に払うものであり、その施設やお風呂の維持費に使われることが多い。それに対して、入湯税は市町村に納めるもので、地域全体のために利用される。現在、銭湯や宿を利用する人は当たり前のように清潔で、整備された温泉に入っているが、それは徴収した入湯税のおかげである。入浴料だけでは、温泉を衛生的に保つことはできないだろう。つまり、入浴料は「今」、入湯税は「未来」の温泉をつくっていると言える。

こういった入湯税の話聞いて、「銭湯や宿の温泉を使わない人には関係ない」と思う人もいるのではないだろうか。だが、それは違う。税は納税した人だけが恩恵を受けるものではないのだ。入湯税は消防施設の整備にも使われている。他にも、環境衛生施設や観光の復興などにも利用できる。入湯税によって地域の安全が守られ、地域の発展のためにも役立てられている。税が、私たちの市町村と、そこに住むすべての人を様々な面から支えてくれていることを忘れてはいけない。

これらのことから、私は考えた。入湯税によって、将来に繋げられる「持続可能」な温泉や、安心できる社会がつくられているのではないかと。

今を生きる私たちだけでなく、未来を生きる人たちの幸福をつくる。そして、私たちに幸福を繋いでくれた人たちに感謝を示す。それが税金の役割だと思う。「税を払わされている」「税は負担だ」という意識の人が多いかもしれないが、その税によって私たちの当たり前の生活がつくられているということを考えなければならぬ。税による恩恵を当たり前と感じているように、税を払うことも当たり前と考えられるようになりたいと思う。私は、身の周りにある多くの税の恩恵や、その税を払い社会を支えてくれている人の存在を意識して生活し、「納税の義務」について考えていきたい。そのために、税を大切に使いしていきたいと考えた。学校の机や椅子、教科書を大切に使うなど、私たちができることは身近に多くある。これらのことを少しずつでも続けることで、将来に幸福を繋げられる社会を自分たちの手でつくっていききたい。そして、社会を税金から多様な視点で見られるような人になっていきたい。

姉の笑顔

鹿児島市立天保山中学校 1年 池山 菜桜

今日も姉が施設から嬉しそうに笑顔で帰って来た。「い、い。」と明日も行きたいと私に言ってくる。話ができない姉は最初の一言で自分の気持ちを伝えてくるのだ。二十一歳になった姉には重度の知的障害があり毎日、施設に通っている。得意の手芸をしたり、お友達と公園の清掃をしたり楽しい時間を過ごしている。夜に父が帰宅すると、姉が連絡帳を持って来る。その日の様子を声に出して父が読み、家族で姉の話題で会話もはずむ。これが我が家の日常だ。

小学校の社会の授業で国民の義務の一つに税金を納める義務を習った。税金という言葉はもちろん知っていたが、税金について調べてみると知らないことばかりだった。姉の通っている施設の福祉サービスは税金での補助があるからこそ毎日利用することができるを知った。税金がなければ高額な利用料になるため毎日通うことは難しい。そうなる姉のあの嬉しそうな笑顔も少なくなるだろう。そして、姉は一人で留守番が難しいため両親が毎日働くこともできなくなる。我が家の日常は税金のおかげで成り立っているのだと感じた。

消費税しか払うことがない私にとって税金は学校で習うまで自分には、あまり関係ないと思っていた。けれども、授業で学んだことをきっかけに税金について調べてみると、様々なところで使われていることを知った。蛇口をひねれば出てくるきれいな水、毎日出るゴミの処理、楽しく通っている学校。身近にたくさんの税金が使われていることを知り驚いた。

消費税は今まで、ない方が良かったと感じていた。百円の商品を買う時に十パーセントの消費税がかかると百十円払うことになる。大切なお小遣いが十円減ってしまい、損をした気分になっていたからだ。でも、税金がどのように使われているかを知り、納めようという気持ちに変わった。毎日当たり前と思っていたこの生活は税金で成り立っていると気付いたからだ。一方で大切に欲しかったという気持ちもわいてきた。だからこそ税金がどのように使われているか、これからも関心を持っていこうと思う。

今日も姉が嬉しそうに施設に行く準備を始めている。夏休みになり朝は姉の方が早く家を出ることが多くなった。「行ってきます。」と言葉で言えない代わりに姉は笑顔で手を振ってくる。私はその姉の笑顔が大好きだ。いつまでもこの笑顔を見ていたい。大切な税金が姉の日常に使われていることに感謝をし、この気持ちを忘れないでいたい。

今は消費税しか払う機会がない私だが大人になったら、しっかり税金を納めていきたい。税金は誰かを助け笑顔にしているものであり、自分も助けられて笑顔をもらっているのだから。

身近な税金

石垣市立石垣第二中学校 3年 磯部 桔花

私の住む石垣島の隣には竹富島という小さな島があります。竹富島は昔ながらの沖縄の町並みが有名で、毎年多くの観光客が訪れる島です。今回私がこの作文を書く為、母に身近な税金を聞いてみたところ、その竹富島で訪問税という税を設ける事を検討していると知りました。そこで私は訪問税について調べてみる事にしました。

まず訪問税とは島を訪れる人に課される税で去年巖島神社がある宮島で設けられた税です。現在竹富島では三百円の入島料を任意で徴収している様ですが任意の為、強制権が無く、徴収率は十四パーセントとかなり少ないようです。そこで訪問税が必要となります。ですが去年から訪問税を取り入れた宮島では一人一回の入島で百円が課されているところ竹富島ではその二十倍となる二千円もの訪問税を検討しているそうです。この竹富島の訪問税の用途は大きく分けて二つあります。一つ目は観光客が持ち込むゴミへの対応です。竹富島にも小型焼却炉はありますが、燃やすゴミしか処理出来ないためペットボトルや燃やさないゴミなどは一度石垣島へ運び、そこから西表島や沖縄本島に運ぶ必要があるそうで、ゴミ処理だけでも膨大な費用がかかってしまいます。二つ目は観光客が快適に過ごす為のインフラ整備です。例えば無料ワイファイの整備やトイレを洋式に改変すること、水道施設の改修等があります。しかし島民の間では二千円という高額な設定に対して賛否両論があるそうです。賛成側の意見としてはトイレなどの公共施設に使ってもらえるのであれば良いという意見や、このくらいの税を払ってでも入島する魅力があり、魅力を維持する為にも必要などという意見が出ています。一方で反対側の意見としては観光業に携わって生計を立てている町民からは税によっての観光客の減少に不安の声が多く上がっています。そしてこのような意見から訪問税を千円にすると決定したようです。

今回訪問税について調べてみて私は訪問税の導入に賛成です。なぜなら、今の竹富島の現状を理解してもらい、島民と観光客が快適に共存できたら良いと思うからです。また、現存全国の観光地で問題となっているオーバーツーリズムですが竹富島も例外ではありません。そこでこの訪問税を取り入れることによって小さな島と観光客のバランスが取れ、オーバーツーリズムの解消に繋がるのではないかと私は思います。

税と言われると難しく堅苦しいものという印象が付きやすいですが今回の訪問税だけではなく所得税や消費税などの全ての税も国や国民の生活等のために使われています。この美しい竹富島の守り方は時代の変化と共に変えていく必要があるのではないのでしょうか。

思いやりの形

沖縄市立美東中学校 3年 屋良 愛美

私は、白血病で入院したことがあります。現在も、経過観察で通院しています。ある日母に、「私の通院でたくさんお金がかかっているよね。いつもありがとう。」と話したら、母は『「高額療養費制度」という制度のおかげで、私の医療費は無料なんだよ。』と教えてくれました。

私は、母が言っていた、高額療養費制度というものが気になり、私はインターネットで調べてみました。カゼをひいたときなどに病院に行くと、その診察費用などのうち、七割を保険で、残り三割が自己負担になります。しかし、高額療養費制度では、その三割も負担してくれる制度であることを知りました。そして、その制度は日本に住む人みんなが納めた税金でまかなわれていると知りました。

税金のおかげで、私は白血病を治すことができ、今学校で友達と過ごすことができているので、私はこの制度にととても感謝しています。また、医療費だけでなく、救急車や私たちの受けている義務教育も税金でまかなわれていることを知りました。税金のおかげで、いろいろな公的サービスを安く、もしくは無料で受けることができることを知り、私は、税金とはみんなの思いやりややさしさの象徴だと感じました。

最近、私が税を納めることで、他にできることは何だろう、と考える機会がありました。それは、日本各地で地震や台風、大雨などの自然災害が発生しているニュースを見た時です。たくさんの警察や自衛隊のみなさんが活躍していました。父が、「この救助活動も税金があるから、たくさんの人を助けにいけるんだよ。」と教えてくれました。私は、私が住んでいない地域で災害が発生した時に、一人一人が、被災地に向けてたくさんのお金を送ったり、被災地へ行って支援や救助を行うのは難しいと思います。しかし、私や日本に住むみんなが納めたいろいろな税金が、救助隊の活動を支えられていることを知り、間接的に支援することができるのだ、と感じました。万が一の時の資金を、税金として出し合うことで、一人が多くのお金を払うよりも、多くのお金を集めることができ、大がかりな作業を行う支援に繋がります。それは、とても素敵な思いやりだと思いました。

最近、自然災害がたくさん起こる日本に住む私は、みんなが納めた税金から、多くの支援や恩恵を受けるかもしれません。もしかすると、私の身近な人が災害に巻き込まれて、支援を必要とするかもしれません。その時のために、私は、みんなの思いやりが形になった「税金」をきちんと納めていきたいと思います。

税とは公共財、サービスの対価だ。政府は消防や警察、道路や公園といった公共財や教育環境、社会福祉等サービスを提供し、それらに対し私たちは税金を支払う。消費行動には対価を支払うことは当然なのに、「苛斂誅求」という言葉が示すように、なぜ納税にはいわゆる「痛税感」が付きまとうのだろうか。「税が適正に使われないなら、払いたくないし、結果労働意欲もわかないだろうな。」と、留学した兄はその国の現状を嘆く。財政運営が不透明なその国は徴税率が低く、インフラ不足が深刻で基本的なサービスにアクセスできない人々が存在するそうだ。また、水回りの不衛生は重い感染症を引き起こすが、貧困により受診行動が取れず、日本では治療可能な感染症で命を落とす人も少なくないという。人間が安全安楽に生きるためには、納めた税や社会保険料を無駄なく適切に活用してくれるという国や政府への信頼感があることが大前提だ。そして政策を実施するための予算を税制制度により確実に集め、資源配分をするという仕組みが必須なのだと痛感した。

日本は社会保険、社会福祉、公的扶助、保険医療・公衆衛生というセーフティネットが概ね問題なく機能しており、国家が納税の対価として私たちに便益を与えてくれていることを忘れがちである。一見無料のように見える公共財には、「自分たちがそのサービスを選んでいる実感」が持ちづらいため、支払い、すなわち納税に負担を感じるのではないかと私は考える。現在日本は、一般会計の約六割を税金、約四割を国債と借金で賄っているそうだ。これは危機的状況と言える。少子高齢化が進むことで医療や年金などにかかる保険料の負担は増加したにも関わらず、収支のバランスが取れていない現状がある。税や社会保険料の負担が、今現在や将来の生活の安心感につながらない場合、世論の動向は「痛税感」だけが目立つものになるだろう。

しかし、私はあえて「痛税感」を大切にすることを提言したい。痛みがあるからこそ財政に関心を持ち、その規律を求めるようになると思うからだ。なぜ税を払う必要があるのか、税はどのような目的で使われるのか、という疑問の先には国家の組織や制度設計がある。自分たちで選んだ国会議員が国会で決めた税を自分たちの手で支払う。この行動こそが国を作る仕組みである。だから国民には選挙権があり、同時に納税の義務があるのだと気づくのだ。私は、税を知るとは社会のあり方を学ぶことだと思う。自助だけで人生を生きることなどできない。ケアやリスクに対処する機能を社会に埋め込むことが納税の目的だと知ると、人生に安心感が生まれる。私は税について学び、社会保障などの恩恵の享受は当たり前ではないことを知った。私はこれからも生活と密接に結びつく税の正しいあり方を考え、来たるべき時には誇りを持って納税できるよう、学びを深めていきたい。

入湯税から考えたこと

羅臼町立知床未来中学校3年 芦崎 風葉

私は税金に対して、「人々が十分な生活を送っていくために国に納めなければいけないお金」だとか、「難しそう」というイメージを、正直持っている。そんな税金について、この作文を書くために色々調べていると、一つ、目を引く情報に出会うことができた。それは「入湯税」という税金だ。

聞き慣れない名前の税金に興味を持った私は、入湯税について詳しく調べてみた。調べた結果、入湯税とは「市町村が温泉施設を運用し、施設の整備や観光促進などの温泉に関する目的でかかる費用を、温泉の利用客に負担してもらうための税金」であることがわかった。つまり、温泉による、温泉のための税金といえる。また、入湯税は国に納める「国税」ではなく、市町村に納められる「地方税」という税金にあたるようだ。税金は全て国に納められていると思っていたので、地方税の存在に驚いた。さらに、入湯税は「目的税」という、その税金の使い道が明確に決まっている税金であることもわかった。

入湯税のような、市町村を復興するための税金は、とても重要だと思う。日本は現在、地方の過疎化が進行している。私の住んでいる町も例外ではない。人口減少や過疎化が進むと、納税者の数が減る。すると、「町にお金がない」といった状況が生まれて、地域は行政維持のために予算を使うことに手一杯になり、その地域が誇れる特色を支援する経済的余裕がなくなってしまうのではないか。

そんな事態を防ぐために、私は、小さな村や町でその地域の背景を考慮した「地方税」を取り入れていくべきであると思う。また、入湯税のように、税金とその目的の繋がりが明確で、地域の活性化につながる内容の税金であれば、人々からの理解を得やすくなると思う。例えば、人材不足や原材料の枯渇が問題となっている伝統的工芸品産業の支援資金の確保を目的として、工芸品の購入に応じて、工芸品支援税などを設けるのはどうだろうか。私はこのような地方税によって、衰退が進む地方を、特色の保護という観点から復興し、盛り上げることができると思う。

税金は、暮らしやすい国をつくるだけでなく、使い方次第で地方の活性化にも活用することができるはずだ。どんな地域でも、余すことなくその魅力をアピールしていくためには、税金の力がきっと必要になる。

今後、税金に関する社会の変化の中で必要なのは、一人ひとりの税金に対する理解と、これからの税制度について考える力だと思う。私は、日本のすべての地域が一つ残らず活気に溢れる未来を望む。だから、あらゆる可能性を持った税金について継続して調べ、理解し、これからの日本や、地域と税金の関わりについて、自分の考えを持つことを意識していきたい。

「税」を知った日

仙台市立仙台青陵中等教育学校 3年 山形谷 アラン

今年の春休み、久々に家族で風邪をこじらせ、母と一緒に病院で診察を受けた時のこと。会計を終えて何げなく領収書を見せてもらおうと、ほぼ同じ内容の明細書なのにもかかわらず、支払い額だけが、母の分と異なっていることに気付く。疑問に思い、母に尋ねると、仙台市が負担してくれているとだけ説明があった。どういう意味なのかわからず、その時はそのままにしていた。だが後日、別の病院で診察を受けても、やはり先日と同じ額しか支払っていない。しかも薬局には支払いすらしていなかったのだ。前回の母の言葉を思い出し、調べてみることにした。

まず、仙台市では子供の医療費の一部を子育て支援として負担してくれていることがわかった。財源は税金であることも初めてわかった。今まで私の身近な税金は消費税で、多く支払うだけの印象しかなかった。まさかこんなふうに、自分に直接、税金が使われているなんて思いもよらなかった。そして、ふと病院に診てもらわないと損なのではないだろうか、一定額を支払えばいいのであれば何回も行った方が得なのではないだろうか。という考えに至る。そのことを母に伝えると、母から神戸市のホームページを見るよう促された。

神戸市では子供の医療の一部負担金に対する支援は完全に無料化しない取り組みが行われている。その理由として、軽い風邪や小さなすり傷などで受診する「コンビニ受診」を誘発するのを防ぐこと、過剰受診を防ぐことで本当に医療を必要とする人たちへの対応が遅れることを防ぐこと等が挙げられていた。

確かに、神戸市の主張のとおりである。自分の利益だけを考えた発言がとても恥ずかしくなってしまった。更に考えてみると、そもそも税金で支援が行われているのだから、自分たちが納めたお金のなかなので、損得で考えるものでもない。ますます、自分の考えに嫌気がさす。

この出来事がきっかけで、市町村のホームページを閲覧したり、図書館で税に関する本を手取るようになり、税を意識することもなかった日常から、税の使い道に興味を持つようになった。税の仕組みを知ること、社会における私自身の位置を認識することができ、「公共」と「私」がやっと線で繋がった気がしている。そして改めて、自分の周りを見渡すと、ライフライン、ごみの処理、消防、図書館、教育と挙げればきりがなくらいの公共サービスに支えられていることを実感する。

しかし、私たちが納めた税は有限である。感謝の気持ちを忘れず、納税の義務を果たしていくことが大切である。

「観光税ってどんな税だろう。」夏休みに東京に行くことになり、家族でホテルを探していたら、宿泊税というあまり馴染みのない言葉が目にとまりました。気になって見てみると、東京ではホテルや旅館に泊まる際、宿泊費に応じて一人一泊あたり百円から二百円の宿泊税を支払うことになっています。宿泊税は宿泊料金に上乗せされるため、利用者はあまり気にせず支払うケースが多いようです。宿泊税、入域税、入湯税といった観光に関わる税金を総称して観光税と呼ぶそうです。

私は観光税に賛成です。なぜなら、その税収でオーバーツーリズムの対策ができるからです。コロナの制限が解除され観光業が復活し経済面ではプラスですが、その反面、一部の観光地に旅行者が集中して、交通混雑やマナー違反などの問題が生じ、地域生活が影響を受けています。持続可能な観光を目指すためには、観光地は旅行者の受け入れ体制やインフラ整備を充実させる必要があります。観光税はそのための貴重な財源となります。

私は小学生のころ大阪の北部に住んでいて、京都市内の混雑をよく目にしました。路線バスは観光客であふれ、地元の人が乗車できない状況でした。また、観光客から出される大量のごみは、ごみ箱からあふれて道路に散乱し、今でも深刻な問題です。高額なごみ処理に住民の税金を使うのではなく、旅行者自身が負担すべきだという声があがっています。観光税を旅行者から徴収することで、その税収を使って、混雑緩和やごみ問題の対策を講じることができるので、持続可能な観光を目指せると思います。

現時点で宿泊税を導入している自治体は東京や大阪や京都など九つですが、最近では地方でも注目を集めています。少子高齢化により全自治体の四割が消滅の可能性があります。そこでインバウンドを積極的に地方に誘客し、交流人口を増やすことで地域経済を活性化しようという動きがあります。しかし、地方には受け入れ体制が十分でない所が多く、そのまま多くの旅行者が訪れると自然環境や住民に負荷が生じてしまいます。各地域の実情に沿った策を講じるためにも、環境税などによる財源確保が必要になってきます。

私が住んでいる山形県は観光立国をめざしています。現時点で宿泊税は導入されていませんが、観光客誘致に向け受け入れ体制を充実させることができるなら、今後導入を検討してほしいと思います。中心地から離れると、宿泊先や交通インフラやトイレや外国語案内など整備が不十分なところがあります。最近では自然体験型旅行が外国人観光客にも人気だそうです。山形の美しい自然をアウトドア志向の旅行者に満喫してもらい、山形へのリピーターが増えてほしいと思います。地域と観光客の双方にとってプラスとなる持続可能な観光を実現できるよう、税金の財源確保や使い途について考えることが大切だと思います。

税の本質に迫る

米沢市立第二中学校 3年 伊藤 颯真

「税金は高いなあ。」

「税金を払うのは、面倒くさいなあ。」

そういう大人達の声が、日常生活の中で僕の耳に入ってくる。僕自身は、買い物をする時に支払っている消費税以外、税金の意義や仕組みを詳しく考える機会がなかった。

しかし、僕にとって、税金に対する考え方が大きく変わる出来事があった。昨年、僕は税務署で勤労体験学習を行うこととなった。なんとなく堅苦しいイメージがあり、特に興味を持っていたわけではなかったが、税金について初めて知ることが沢山あった。その中でも特に心に残ったことが二つある。

一つ目は税の平等性だ。税には、消費税、所得税、法人税、住民税など沢山の種類があり、支払う金額は様々である。しかし、それら全ての税金は、国民全員に平等に求められている。例えば消費税。これは国民全員が、買い求めた商品に平等に課せられた税率で支払うという点で平等である。一方、所得税は所得の大きさに応じて税率が変化するため、所得額によって生じる富裕と貧困のバランスがとれるという面で平等なのだ。職員の方は、「税の徴収については、国民全員が公平に受けているものであり、不平等は存在しない。」とおっしゃった。僕は、この事実をもっとたくさんの人に知って欲しいと思った。

二つ目は税の重要性だ。税金がなくなると一体どうなってしまうのか。まず、警察や消防、救急車の利用が有料となってしまう。道路は整備されずに町中がゴミで溢れる。そして、僕達が義務教育として受けている中学校の授業も豊かな家庭の子供達だけの特権となってしまう。このことから、税金は、僕達の生活を安全に、より豊かにしてくれることがわかる。また、それは、僕達が税金によって平等に恩恵を受けていることの表れでもある。

僕の住む米沢市では、小中学校の給食費完全無償化や医療費の助成があり、僕自身も正に税金に支えられて生活していることになる。

国民の生活を守ってくれる税金。それを国民が答える意味があるだろうか。近年、消費税が十パーセントに上がり、不満を訴える人々が増えている。しかし、その背景には「少子高齢化」が問題であることを大多数の人々が知らない。僕達人間は感情に流され、物事を深く正しく理解しようとしない。そして納税の義務を果たさない人もいる。「自分さえ良ければ」という考えをなくさねばならない。

今、税務署では、小学校で「税の授業」を行ったり、中学校の「勤労体験学習の受け入れ」をして下さったりしている。そのお陰で僕は税の本質を理解できた。税の大切さを納税者の大人に深く理解して頂くことは勿論だが、幼い頃から「税によって守られていること」を学ぶ機会をつくるのが大切だと思う。

「常よりも春辺になれば桜川
波の花こそ間なく寄すらめ」

これは、平安時代に編纂された後撰和歌集の中で歌人・紀貫之が詠んだ歌である。

私の住む桜川市は、古くから「西の吉野、東の桜川」と並び称される桜の名所となっている。周りの山々には五十五万本ものヤマザクラが自生しており、春には、淡いピンク色の桜と深紅の若芽、木々の新緑の時期が重なり、まるでパッチワークのような幻想的な景色を楽しむことができる。「桜川のサクラ」は、国の天然記念物に指定されており、今年是指定五十周年の節目の年になる。

しかし近年、ヤマザクラの衰弱や枯死が進んでおり、ここ二十年で二百本以上もの木が枯死してしまったそうだ。桜川市の誇りであるこのヤマザクラを守り、再生するにはどうしたらいいか調べてみると、今年度から課税される「森林環境税」というものを知った。

日本の国土の約七割を占める森林には、環境保全や水源の維持、地球温暖化の防止、生物多様性の保全など、様々な機能があり、私たちの生活に恩恵をもたらしている。しかし、林業の担い手不足や所有者不明の森林の増加等により、森林と人との結びつきが途切れ、手入れ不足の森林が増えているという。そこで、豊かな森林が持つ多くの機能を活かし、森林整備やその促進のための取り組みを実施するための財源として、森林環境税の課税、そして森林環境譲与税の自治体への譲与が始まったそうだ。

桜川の美しいサクラを育ててきたのは、市内を取り囲む里山である。里山は、古くから食料や燃料、木材などの自然資源や、水や空気の供給源として、地域の人たちによって手入れされ、利用されてきた。しかし近年、産業構造や生活様式の変化、そして、高齢化や人口減少により、里山に人の手が入らなくなり、管理放棄林や耕作放棄地が目立つようになってしまった。そこで、森林税の活用事例を追ってみると、このような里山を再生するための整備に森林税を活用している自治体があることを知り、一筋の光が見えた気がした。そして森林税は、自然を守り、活用していくという側面から見ても、SDGsを達成する上でも大きな意味を持っているのではないかと考えた。

森林税を通して森林と人との結びつきを再び強めることで、自然資源や生物多様性の保全など、私たちの暮らしを豊かにすることにつながると思う。地域の誇りであるヤマザクラと里山を大切に守り、育て、未来へ繋いでいくことが、これからの私たちに託された希望だと思う。そのためには、私たちも、森林税がどのように使われているかをきちんと知り、自分に何ができるのかを考えていくことが必要だろう。これから、さらに税に対する学びを深め、納税の意義や目的を理解し、将来、胸を張って納税できる大人になりたい。

税への感謝と恩返し

上三川町立本郷中学校3年 村上 舞桜

税と聞いてみなさんは何を思い浮かべるだろうか。私は真っ先に「増税」という言葉を思い浮かべた。近年、ニュースでは「税金が高い」「増税ばかりで嫌だ」などのネガティブな声がよく聞かれる。私もこのような意見に賛同するうちの一人であった。しかし、学校で受けた租税教室が、私の「税に対する印象」をがらりと変えた。

租税教室の中で特に衝撃的だったのが「私たちは税に一生お世話になる」という言葉である。私の中の「税」の印象は「納める」ことの方が圧倒的に強かった。例えば、私たち中学生も買い物をすれば「消費税」を納める。大人になれば、「所得税」や「固定資産税」「自動車税」「住民税」など数十種類の税を納めなければならないのだ。一方で、私たちはどのような場面で「税」にお世話になっているのか、私はほとんど知らなかった。そこで、税が何に使われているのかを調べてみると、驚くべき事実が分かった。それは、私たちは様々なところで税に支えられているということだ。私たちは、税があるからこそ無償で学校に行くことができる。小、中学校は全て税を使ってつくられているうえ、私たちが使っている「教科書」も税によって無償で提供されているのである。また、私が住む上三川町では十八歳まで医療費が無料だ。これも、税でまかなわれている。税によって支えられているのは子どもだけではない。誰もが利用する「道路」や「信号機」「図書館」「公園」「町役場」なども全て税が使われているのだ。さらに、「警察署」や「消防署」にも税が使われ、緊急の時にも無償でサービスを受けることができる。そして、高齢者は「年金」という面でも税に支えられている。

このように税は教育、交通、医療、社会保障など様々な場面で役立てられ、私たちを生涯支えている。ネガティブな印象を持ってしまいがちの「税」だが、私たちの身近な場所で大きな役割を担っているのだ。そして、もう一つ驚いたことがある。それは、日本よりも外国の方が税の負担が重いのに関わらず、不満は少ないということだ。この理由は、保障などが充実しているからである。これに対して、日本で不満が爆発しているのは、国民が、納めた税が何に使われているのか、理解していないからであると思う。これは、国が国民にはっきりと提示していないことも原因だ。そのため、国が税を何に使用しているのか、より鮮明に伝えるべきだ。そして、私たち国民は使い道を知ろうとするべきではないだろうか。

税は、一生を共に歩む大切なパートナーである。また、税は「納める」と「支えてもらう」の相互関係があってこそのものである。今の私は税に支えてもらうことが多い。だから、常に「感謝」の気持ちを持って過ごしたい。そして将来、様々な税を納め、普段支えてもらっていることに対する「恩返し」をしたい。

税の恵み

太田市立太田中学校3年 湯本 紗生

夕方のニュースを見た父の難しい表情。テレビ画面に映る「増税」という文字。私は、「税」というものに対してあまり良いイメージがありませんでした。税金がどのように使われているのか想像ができず、単なる負担であると思っていました。

しかし私たちは、その「税」に支えられて生きています。

私は幼い頃から小児喘息やアトピー性皮膚炎の治療のため、定期的な通院を続けています。また、スポーツチームや部活動の練習で怪我をしまい、長い間リハビリに通っていたこともありました。しかし、それらの通院にお金がかかっていません。

病院に行くと必ず、健康保険証と一緒にピンク色の紙を提出します。このピンク色の紙は「福祉医療費受給資格者証」というものです。群馬県では、福祉医療費支給制度によって子どもや重度心身障害者などの医療保険の一部負担額が無料化されます。昨年、この対象が中学生までから高校生までに引き上げられました。この制度は、国民の税金によって賄われています。「税」によって多くの人に充実した医療が提供される。これは、数ある税金の使い道の中で最も重要なことであると私は考えます。実際、国税庁の発表では医療や介護、福祉などを含む公的サービスである「社会保障」に最も多くの税金が使われています。スピードが命取りとなる医療現場には必要不可欠な救急車も税金で賄われ、私たちは緊急時には無料で救急車を利用することができます。

このように、日本では医療は誰でも平等に提供されるものです。しかし、海外ではそうでない場合のほうが多くあります。救急車は有料、治療費も高額です。日本のように誰でもというのは難しく、一部の限られた人にしか医療は提供されません。だからこそ私たちは、「税」がもたらす恵みに感謝し、それが当たり前のものではないことを肝に銘じる必要があります。

私はこのような税金の使い道があると知り、「税」に対するイメージが変わりました。税金は、多くの人々の生活をより充実させるために使われます。しかし以前の私は、「税」によって私たちに何がもたらされるのか考えたこともありませんでした。手元から離れてしまうお金にしか目が行かず、単なる負担だと思っていたのです。確かに、個人にとっては負担かもしれません。しかし、個人個人の少しずつの負担が、社会に何十倍もの恵みをもたらします。

私たち学生には、「税」について積極的に考える義務があると思います。「税」の大切さを十分に理解することが、未来の納税者として今必要です。

社会の授業で「税金」について学び、自分の身近でどんな税金があるか考えてみました。自分は難病指定である「クローン病」に患っています。毎日飲まなければいけない薬や栄養剤、二ヶ月に一回の検査と点滴があり、毎日の食事では脂質を二十グラムに抑えなければなりません。この病気は去年のゴールデンウィーク明けに突然始まりました。初めは腹痛から始まり病院で薬をもらっていても二ヶ月間効かず、体調は徐々に悪くなっていきました。最終的には血便が出て高熱が出て、食事が取れなくなりました。それから大きな病院に入院し、治療が始まりました。この治療には多額な医療費がかかると知り、治療を続けることに不安を感じました。でも自分の治療には、「小児慢性特定医療費」というのが使えるそうです。これは税金が治療費の一部を助成しているそうです。これを利用することで両親が自分の治療を続けるための、金銭面的負担を減らすことができ、とても助かっています。税金はこんなところでも使われていました。自分が知っていた税金は、消費税や所得税や市民税くらいしか思いあたりませんでした。医療にも使われていることを知りました。

授業では、税金で住み良い社会、より多くの人たちが幸福に暮らせる社会を築くためのものであることと教わりました。それを聞いてもその時はピンときませんでした。なんで多くお金を取られなきゃいけないのだからにしか思いませんでした。でも自分が病気になってその考えは間違いだったことに気づきました。税金の制度がなければ、自分は今も痛みと苦しみが続いてたと思います。病気が考え方を変える良いきっかけになりました。

このことをきっかけに、将来の夢を管理栄養士とパーソナルトレーナーになりたいという夢をもつことができました。この夢を叶えるためには、まず自分の病気に向き合い、根気よく治療を受けていくことだと思っています。この治療には多くの人からの税金で支えられているので、一日一日を無駄にせずがんばって生きていこうと思います。夢を叶えたら自分もできるかぎり税金を納めて自分もたくさんの人を支えたいと思います。また、自分が親になったら自分の子供に、税金はどのように使われて、どんな人の助けになっているか、わかりやすく話してあげたいと思います。また税金について多くの人が感心をもつために、今よりわかりやすく、身近に感じられるような制度になるといいなと思います。それには自分が税金の行き先、使われ方、誰がそれを受けることができるのかを学び、自分から周りに発信していきたいと考えています。まだまだ学ばなければと、あらためて感じました。このことを忘れないように、努力していきたいと思っています。

救急車の有料化のニュースを見て

深谷市立川本中学校 2年 福島 雄太

ここ数年、特にコロナが流行した頃から救急車の稼働率が高くなっていると感じる。この夏休み中も遠くや近くで救急車のサイレン音をたくさん耳にした。連日の猛暑で熱中症患者の増加が要因だろうと想像するが、数ヵ月前に見た救急車の有料化のニュースで救急医療の現状が危機的状況にあることを知った。

総務省消防庁によると、昨年一年間に全国の救急車の出動件数は約七百六十四万件で、約四.一秒に一回程度の頻度で全国のどこかの救急車が出動している計算になる。海外では有料の国も多いが、日本では無料で救急車を利用でき、こうした救急医療体制の整備は税金によって賄われていて、一回の出動で約五万の費用がかかるという。一年間でどれだけの税金が使われているのかが分かる。

救急車の有料化は、不適切な利用を減らし、救急隊員の負担を軽減し、真の緊急を要する患者への迅速な対応を可能にするメリットがある一方で、個人の経済的負担の増加で緊急を要するケースでも利用をためらってしまう懸念、貧富による命の格差の発生、管理・運営の複雑化といったデメリットも伴うということも考えなければならないとニュースで伝えていた。節税対策からみれば、救急車の有料化で不適切な利用の抑制ができれば税金を効率的に使うことが可能になるかもしれないということになる。

僕は二年前に二度も救急車を呼んだ経験がある。その時は痛くて苦しく一一九番をかけたが、搬送先の病院で症状は落ち着き、その日に帰宅できた。つまり、軽症だったわけで有料化されていれば支払わなければならないケースになる。あの時、救急車を呼んだことが何だか申し訳なくて今でも後ろめたく思っているのだから、有料化してたら恐らく快く料金を払っていたと思う。人の命を救おうと訓練された救急隊員が救急車で目の前に来て応急処置をしてくれた時に得られた安心感は忘れられないし、とても感謝しているからだ。

僕は数日前にテレビで富士山救護所のドキュメント番組を見たが、救護所では診察代や薬代は無料だった。でも『利用者の善意箱（協力金）』が設置してあるのを見てヒントを得た気がする。救急車の有料の支払う額を高いとみるか安いとみるか、賛成・反対の意見は人それぞれ違うと思う。ただ僕は、自分が利用し、お世話になった救急車や救急隊員が管轄されている市の消防本部にお礼の気持ちが届けられるシステムができたらいいなと思う。もし『利用者の善意箱』みたいなものが設置されたら感謝の気持ちを投入したい。

自分の身の回りの救急医療体制（救急車の出動）が税金で賄われていることを理解し、安心して公平に運行できるように、安易な利用は絶対しないで、正しい知識を身につけ、適切な判断をすることが大切だと改めて考えさせられた救急車の有料化のニュースだった。

助け合えるのであれば

さいたま市立田島中学校3年 谷畑 澄和

僕は消費税が嫌いだ。商品そのものの価格に税金が上乗せされて金額が変わる。それも、八から十パーセントという、高い割合だ。

例えば、僕が勉強するために必要不可欠なキャンパスノートを買いに行く。A罫五冊入、東大生も使用すると売りの大人気ノートだ。僕にとって、お菓子をかうのとは訳が違う、お小遣いから出したこの五百円は、未来の自分への投資だ。だが、税抜四九六円で売っており、大事に握りしめていた五百円玉では買えなかった。税込五四五円。家族が援助してくれて購入することができたが、消費税分の、たった四十九円で残念な気持ちにさせられるのだ。税金とは何だ。だから僕は消費税が嫌いだ。

令和元年十月十三日、僕の住む街が水浸しになった。

この日は大型台風十九号がもたらした大雨で避難勧告が出されていた。僕は栃木にある父の実家にいて難を逃れたが、翌日帰ってみると、まるで湖の中に家が建っているかのように街は水浸しで、僕の家はひざの高さまで水没していた。

僕の住むさいたま市桜区は、荒川や支流に囲まれた地域だ。土地も低く水はけが良くないため、ハザードマップで浸水想定区域となっている。そうと知りながらも、「まさか」の出来事にただぼう然と立ちつくすことしかできなかった。近所の人がお互いの被害状況を報告し合う。みんな見たことのない悲しい表情だ。建て替えたばかりの家、水浸しで車が動かないなど、一夜にしてみんなの笑顔が奪われてしまったのだ。とても悲しかった。

あの日から五年。街は笑顔に戻りつつある。調べると、行政は今回の台風被災者に様々な支援を行っている。身体に負傷、障害が出た方に見舞金等、住宅に被害があった方へ生活再建のための給付や融資、子供の養育、就学に関する補助も行っている。教科書や学用品などが使用出来なくなった場合、新しく支給してもらえるのはとても良い事だと思う。

さらに、また同じように水害被害が発生しないために、雨水を一時的に貯めておける大きな貯留浸透施設を荒川水系に三十箇所設置されるという。おかげで水が街にあふれ出す心配がなくなり安心して生活が出来るだろう。

このようなたくさんの支援や工事に使われる費用はどのくらいかかるのだろう。きっと想像も出来ないくらい大がかりなものだ。

では、その費用はどこから出ているのか。その財源の中心は、そうだ、「税金」だ。そして税金の一つに「消費税」がある。税金が僕たちを守ってくれているんだ。あの日、五四五円で購入したノートは、間違いなく未来の自分達への投資だったのだ。

税金によってより良い社会を作り、みんなが助け合える日本になるのであれば、僕はもう、「消費税が嫌い」なんて、恥ずかしくて言えない。

北欧三ヶ国と日本の税金の違い

小千谷市立東小千谷中学校 3年 関 美華

税金と聞くと私は真っ先に消費税が頭に浮かぶ。店で何かを買うときに一円玉や五円玉の小さい小銭を会計で出すことが面倒だなと思うことがよくある。日本の標準消費税は一〇パーセント、食料消費税は八パーセントとなっている。例えば、EU加盟国は最低十五パーセントの消費税を導入することが定められている。日本の消費税はEU加盟国に比べると少し低めに感じる。

では、世界的に見ても税率が高い北欧三ヶ国はどうでしょう。北欧三ヶ国の社会制度は「高福祉・高負担」という良いサービスを受けるならば、高い税や社会保険料を負担しなければならないという政府の考えのもと政策を行っている。

北欧三ヶ国の標準消費税は二十二パーセントから二十五パーセント。食料消費税は十二パーセントから十七パーセントと日本よりはるかに高い。

これだけ国民に負担が大きいと、どのようなサービスが提供されるのか。例えば、ノルウェーでは出産や子どもの学費が無料で提供される。日本と同じく高齢化が進んでおり、高齢者向けの社会保障サービスの充実。一方で元気な高齢者の社会参加を促す取り組みを行っている。スウェーデンでは子育て支援に力を入れており、児童手当と両親手当の両方を支給。出産費や二十歳までにかかる医療費、大学の学費無料、病気や障害がある子には別途で手当が支給される。フィンランドは教育大国として大学までの学費を無料とし、学力格差を極力なくすことで国全体の底上げが狙いである。

北欧三ヶ国の政府は「国が責任をもって国民の面倒を見る」という考えで政策が行われている。だから国民負担が大きくても国民がリターンを実感しやすい。

日本は北欧三ヶ国と比べると国民がサービスを実感しにくいと思う。しかし、毎日使っている道路の工事や医療費の一部負担、小中学生に無料で教科書の提供など普段身近にあって当たり前のもに税金は使われている。北欧三ヶ国と日本では税金の使い方に違いはあるが北欧三ヶ国も日本も税金があるから国民の生活は安定し、安全に暮らしていける。SNSなどを見ると税金に対して批判的な意見が投稿されているが、すべて国民に都合が良いように税金を使ったら国が成り立たなくなってしまうと思う。

日本は世界的に見ても治安が良い。これは秩序を守ってくれる警察や街のゴミを回収する人、子どもに教育をしてくれる教師など税金が給料の人やそうでない人たちが助け合い、未来の子どもたちへ安全な国を渡すために税金があるのだと私は思う。

税に感謝を

伊那市立伊那中学校3年 巢山 瑞喜

皆さんは、税金が無駄なく使われているのか考えたことはありますか？2022年度の決算検査報告では、税金の不適切な支出や無駄遣いをしたとされる金額は580億2千万円となったそうです。私はこれを知り、無駄遣いは抑えてほしいと感じたと共に、皆さんに「税金の無駄遣いはやめよう」と訴えます。

私はアトピー性皮膚炎の治療で母と通院しています。通院したての頃は、「足りなくなったら大変だ」と思い、肌に塗る軟膏をお医者さんが指定してくれた量より多く指定し、もらっていました。通院し始めて驚いたのは母が病院でも薬局でも一度もお金を払っていなかったことです。その頃の私は、「病院ってそういうものなんだ」と思っていました。

ですが、その考えが変わる時が来ました。小学5年生の頃軟膏が変わり、私はいつも通りお医者さんが言った量より多く頼みます。すると、お医者さんは「うーん、大丈夫ですがこれ1g150円くらいするんですよ」と苦笑いしていました。私は、「いつも無料でもらっているのに、なんでお金の話が出てくるんだろう？」と疑問を抱えたまま、その日も多めにもらった軟膏を持って家に帰りました。

その日私は、ずっと「そういうもの」だと思っていた病院での医療費がなぜ無料なのかについて調べてみることに。

まず知ったのは、私の住む伊那市では窓口で健康保険証と共に福祉医療受給者証を提示することにより18歳未満の医療費が無償になること、そのお金は税金で賄われているということです。

さらに税金は様々な種類があることも知りました。特にたくさんの方が一生懸命働いたお金の一部が所得税として支払われていることに1番衝撃を受けました。

私はこれらの事実を知り、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。なぜなら、たくさんの方が働いて納めてくれた税金を、「足りなくなったら大変だ」という気持ちだけで無駄遣いしてしまったと思ったからです。それから私は、必要最低限の薬をもらうようにしています。

税金は人々の生活を豊かにしてくれる、なくてはならないものだと思います。ですが、まだ税金というものにあまり馴染みがない子供である我々も、それを当たり前享受するのではなく、たくさんの人へ感謝をしながら無駄遣いしないのが大切だと私は訴えます。

安全な暮らしを支える税金

長生村立長生中学校 3年 新保 歩都

四年前、僕の住む地域で記録的な大雨により、六つの市町村に流れている一宮川が氾濫し、川沿いの広い範囲で浸水被害が多発した。

僕の家は川の近くだったけれど、幸いなことに近くに広大な遊水地があり、僕の家は浸水せずにすんだ。

しかし大雨が過ぎ去った後、六つの市町村では、いたるところで動けなくなった車が点在していたり、家の壁に木が押し寄せた跡がくっきりと残されていたりと、被害の大きさを物語っていた。

数日後、災害によるごみがあちこちに山のように積もっていたが、それぞれの市町村が無料回収を行い、そのおかげで、被害にあった人達は家を整えることに専念できた。

街並みが元通りになってくると、一宮川流域の各所でいろいろな工事が始まった。どんな工事が行われているのか気になった僕は、千葉県のホームページを調べてみた。

そこには、調整池の増設、堤防整備、河道拡幅に掘削、雨水ポンプの増強などの多岐にわたる対策が全長約三十七キロある川のいたるところで講じられていることが載っていた。

そしてこれらが完成したらきっともう一宮川の氾濫による水害がないのだろうと、ホッとしたと同時に、この大規模な工事は税金でまかなわれているということがわかり驚愕した。それ以外にも、災害ごみの回収と処理も税金でカバーされており、僕の家のある遊水地も税金で作られていた。

身近なものに税金が大きく関わっているところをはじめて目の当たりにして、税金のありがたさに、僕は心が揺さぶられた。

日本は小さな島国の中に、約一億二千万人が豊かな自然と共に暮らしているが、自然災害も多い。テレビでは毎年、各地で自然災害による被害のニュースが報じられる。

しかし一方で、それらの被害を教訓に、安全対策が日々講じられているのだ。

税金は防災や復興などになくってはならないし、医療や教育、治安維持や社会保障、さらには海外からの危険に備えた防衛など、様々なところで税金は私達の安全な暮らしの地盤となっている。税金という一人一人の支えで、日本は成り立っているのだ。

物心ついたときから当たり前のように税は存在するため、その役割や重要性を感じることに希薄になり、ただ自分の手元からお金が減っているという目先の現状に不満を持っている人が多いが、もっと使われ方を把握するべきだと思った。

自然豊かで、みんなが助け合いの精神を持ち、その気持ちが税金として社会に恩恵をもたらし、みんなが平等で安全な環境の中、教育を受けられる日本が僕は大好きだ。

今の日本を築いてくれた先人の納税者の方々に感謝をし、将来は僕もこの平和で安全な暮らしを持続できるように、しっかりと納税したいと改めて実感した。

税金が作る優しい世界

神崎町立神崎中学校 3年 加藤 愛理

皆さんにとって税金はどのようなものですか？私にとって税金は理不尽をなくすためのものだと思います。私は小学三年の時に大きな病気になり車椅子生活になりました。いわゆる障害者になったのです。障害者が生活するにはたくさんのお金が必要でした。病気の治療費は勿論のこと病気が治った後も全て容態が元通りというわけではありません。医療物品がたくさん必要です。それを国が十七万円も負担してくれるのです。私の生活も税金で成り立っています。例えばお風呂介助や体調管理をしてくれる訪問看護師さん、私の筋力低下予防のために来てくれている訪問リハビリや、私の世話で母が外出できない為母の代わりに買い物に行ってくれるヘルパーさんの費用。そして町が災害時には電源がないと生命に関わるということを心配してくれてモバイルバッテリーを買ってくれました。またモバイルバッテリーの補助も認めてくれました。それを聞いて本当に税金の有り難みを知りました。そして税金を納めている人達に感謝しました。私はみんなの税金で生きているのです。病気になって治癒している時は自分の事が大変でお金のことを気にする余裕がありませんでしたが、母に聞くと、集中治療室に一ヶ月入っている時の入院代が約四百万円かかっていましたが、子供医療受給券を利用すると三、四千円ですんだと聞いています。その事を聞いて私は税金は必要な人、設備に適切に届く優しい制度だなと感激しました。何の不自由もない日常生活を営んでいる私達の裏側で、税金が国民の意見に寄り添い、色々な観点から人々の生活が支えられているという現状があるのです。私達家族が不安を抱えず楽しく暮らしていけるのは、税金が人それぞれの需要に合った適切な支援をできるように形を変え、その人の生活を支えているのだと実感出来たからだと思います。そしてこの優しいお金は労働者の納税という不断の努力によって納められています。そのおかげで現在まで理不尽によって経済的に苦しくなることはありません。小さいいざこざがあれどみんな生きられる社会を実現しています。税金がどのような形で社会貢献しているかが見えてくると、未来を支える私達の納税の意識がより良い方向に変わっていくでしょう。その思いの先にあるものはいつも誰かが誰かを支え合い明るい未来の為に一緒に頑張る道なのでしょう。そしてこの素晴らしい優しい制度をつないで、これからも一人一人に生きやすい社会が続くことを祈っています。私は、今の自分にできることは何か考えてみました。それは今、自分が置かれている状況で頑張るということでした。受験勉強を頑張って将来きちんと税金を納め社会を支える一人になれるよう頑張ろうと思います。子供の未来を支える税金のあり方や必要性を知ることによってみんなの税金への意識が変わればいいなと思います。

私達に託された未来

板橋区立赤塚第二中学校 2年 丸山 心由宇

「楽しかったね。」私は、帰り際に友達と笑みを浮かべながら移動教室の思い出話に浸った。昔から仲が良いその友達と一緒に帰るときはいつも移動教室の話になる。移動教室では、普段行けない遠い場所に行き自然を味わい、宿に泊まって友達と寝食を共にする。この行事は私達にとって楽しい時間であるとともに貴重な経験であり、勉強以外の部分でも沢山のことを学べる。だから、私はこの行事が大好きで毎年楽しみにしているのだ。

以前、移動教室から帰宅した際に母に「移動教室の費用の多くは区からの援助で板橋区の税金なんだよ」と言われた。移動教室の費用は多額なので私はそのことを知り、驚いた。同時に板橋区は未来を担う子ども達に税金を使って応援をしているのだと感じた。思い返すと、教科書も運動器具も国や市区町村からの援助なのだ。学校がきれいで安心安全に保たれているのも区の税金による管理があるからだ。そして、いつも丁寧に勉強を教えて下さったり、相談にのって下さったりする先生方も税金から給料が支払われて働いてくださっている。私達が「日常」だと感じている学校生活は税金なしでは成り立たないものなのだ。もちろん、税金は私たちのためだけではなく、社会保障費や国債費などと比較すると割合的には小さい。だが、お金を生み出さない子どもたちに一人当たり年間約百万円もの援助を送っていることは、子どもたちへの期待の意味が込められていると思う。税金によって私たちが豊富な経験をしたり、学んだりする機会をつくり、将来の日本を支えていく大人を育てているのだと思う。そして、今の大人が高齢者となり、私達が働き手となった際に、経済を動かせるように今様々なことを学んでいるのだ。勉強だけではない。人とのコミュニケーションの取り方、自由と責任などを授業や行事を通して、社会に出てから必要となる能力を身につけているのだ。私達に求められていることは、勉強したことや自分の経験を社会に出たときに生かして良い影響を世の中に与えていくことだと思う。

だから、私達は目の前のこと一つ一つに真剣に取り組んでいかなければならない。学校生活は、当たり前のように過ぎ去っていくが感謝の気持ちを忘れずに、些細な出来事も大切にしていきたい。大人が私達に費やしているお金と時間を無駄にしないために、そして私達に対する期待を裏切らないために、ステップを踏みながら成長していきたいと思う。私達が大人になり私達を支えてくれた人たちの生活を支えることで恩返しができる。それまでは、自分の学びを深めること、視野を広げることに努め、より良い日本の社会を築いていきたいと思う。毎日を一生懸命に生き、自分のできることを最大限行い、行動の幅を広げていきたいと思う。未来の日本を支えることが次の世代の中心となる私達の使命なのだ。

「税を払ってもいいこと何も無いじゃん」と思いながら、政治家による税金流用問題のニュースを見つめる。国民が必死に働いて納めた税金が有効活用されていないように感じると、やるせない気持ちになる。「払っても返ってこない税金を払う意味とは何なのか」「大人になりたくないな」と呟いた。

そのイメージが覆されたのは、二〇二四年一月一日に届いた祖父からのメールだ。

「無事です、避難しています。」という内容だった。私の祖父母の家は石川県七尾市にある。能登半島地震の被害に遭った祖父母は近くの小学校に避難したそうだ。母と一緒に心配していた私は、「避難し、配給もあるから心配ない」という知らせに安堵したことを覚えている。同時に、配給はどこから来るのかその費用は誰が負担するのか、という疑問が浮かんだ。

地震の通知が大量に届いているスマホを使って検索すると、「復興特別所得税に関するお知らせ」と書かれた記事が表示された。東日本大震災による財源確保のための税金だということが説明されていた。被災地では仮設住宅の提供や堤防、道路の復旧に使われていたそうだ。また普段納めている税金も、学校などの避難所となる公共施設の運営に使われているため、災害支援につながると紹介されていた。そこで知ったことは「災害時に役立つ施設や備品の費用は税金からまかなわれている」ということだった。

復興特別所得税が公布された当時、批判の声が大きかったという記事を読んだ。長期間の徴収に対する不満や税金の使途の不透明さへの不安が主な理由だった。私の父に聞いてみても、「実際に税金が被災地のために使われているの不安だった」という返答がきた。確かに遠くの場所で起きた出来事に対して不安を感じるのは理解できる。実際、東日本大震災での復興特別所得税では、被災地以外での税金使用があったという。これでは、国民の信頼を損なうだけでなく、復興特別所得税の意義を再考する必要がある。使途が見直された今でも、不安の声は収まらない。

しかし、私は知っている。

地震の被害を受け、高齢で体が上手く動かせない祖父母が避難所に受け入れられ、救われたことを。

今、税が正しい使途で使われていることを。

「払っても返ってこない」のではなく、「返ってくる先を知らなかった」のだと今までの自分を恥ずかしく思う。今度は自分が助ける番ではないか。地震大国である日本は、どこでも地震のリスクが付きまとう。税金を納めて被災地を支援することが結果的に、いつかの地震で自分自身を支援することに繋がる。

あの日の感謝を私は忘れない。助け合える美しい国を守りたい。正しく使われると信じて税金を納めていきたい。税は、国民の夢と希望を実現させるものだから。

「医療費と税」

江東区立辰巳中学校3年 清水 結麻

中学三年の夏休み、私は自分の生まれた病院を腎臓検診で訪れた。私は九百十四グラムという超低出生体重児（千グラム未満で生まれた新生児）で生まれた。超低出生体重児は腎臓の大きさが生まれつき、やや小さくなりやすいため、成長とともに腎臓に負担がかかり、腎機能が悪くなってしまうことがあるらしく、その病院ではそこで生まれた超低出生体重児が中学・高校生の時期に腎臓検診を受けることを案内していたのだ。腎臓検診後、私は自分が生まれてから三ヶ月間入院していたNICU（新生児治療室）、GCU（回復治療室）について担当の医師と見学、案内していただいた。NICUには超低出生体重児のための保育器の他、常に新生児の呼吸や心拍、体温を管理するための特別な機械や設備が整っていて、新生児を専門に治療する医師や看護師が、二十四時間体制で治療やお世話をしていた。病院から帰宅後、私は両親から、NICUへの入院はすごくお金がかかるが、医療費助成という制度によって金銭的負担が少なく済んだことを聞いた。また、いままで出生時の入院以外にも複数回の入院や通院、手術、弱視の治療用の眼鏡の費用なども医療費助成によって金銭的負担が少なく済んだのだという。

漠然と自分は恩恵を受けていることはわかっていたが、改めて医療費助成について調べてみることにした。私の住んでいる自治体では子ども医療費助成という制度があり、高校三年生等まで（十八歳到達後の最初の三月三十一日まで）の子どもが医療機関等で健康保険証を使用して診療を受けたときの保険診療の自己負担分が助成されたり、補装具（治療用眼鏡等）の費用が助成される制度があり、このような制度は自治体によって独自のものとなっていて、それらの財源は税金であることを知った。税金が何かしらの形で生活の役に立っていることはわかっているのに、具体的にどんなふうに使われているのかなどは深く考えようとしたことがなかった私は驚くとともに、日頃よくわからずに納めていた税金が、私のような超低出生体重児、子どもたちの健康を支えているとわかって、とてもうれしかった。

しかしこちらも調べてわかったのだが、医療費助成制度によって患者側の過剰受診が増えるという問題も発生している。「医療費が無料なのだからいだろう」などといって必要のない受診をすれば、みんなから集めた税金が無駄に使われてしまうことになったり、医療現場の一層の疲労や、本当に医療を必要としている患者への対応に影響が出てしまったりする恐れがある。実際に、神戸市ではそういったことを理由に子どもの医療費助成を行っていない。私は、税金を便利だといって無駄遣いする人が少しでも減り、税金の大切さが世の中に伝わってほしいと思う。

守りつなげる私たちの税

サレジオ学院中学校 3年 重元 孝徳

僕は、広島県で生まれた。祖父母のいる広島は僕にとって、憩いの場であり、人気の観光地であり、自然豊かな場所でもある。そのような広島県で独自に導入されている税の中で印象に残るものを二つ紹介したい。

一つ目は、宮島訪問税。この税金の魅力は斬新さだ。オーバーツーリズムや観光客訪問のための施設整備から導入に踏み切られた。導入している地域がほとんどない税で、オーバーツーリズム解決への一歩を先頭を切って示したものである。集めた税収は宮島をより持続可能な観光地とするために用いられる。僕自身、宮島は部活の合宿でも訪れた思い出深い場所だ。さらに、平家とのつながりが深い厳島神社は、日本の歴史上重要な場所であり、かつ美しい景観を楽しめる地でもある。この導入を通して大切な景色、歴史的な地を守り、加えて災害などにも耐えられる、住む人にも訪れる人にもやさしい宮島を維持し、作り上げてほしい。そして、この訪問税を全国のオーバーツーリズムが深刻化している地域に導入したら、問題の解決の一歩となるのではないか。

二つ目は、ひろしまの森づくり県民税だ。県土の保全、水源涵養などの役割を担う重要な資源の森林を守り育て、次世代へ引き継ぐことを目的とした、この税金。集めた税収は人工林や里山林の対策・森林資源の利用促進等に用いられる。僕の祖父母の家からは武田山が見える。窓一面に広がる大パノラマに僕は幾度癒されたことだろう。この税金は広島県の緑を守ること、そして僕のなつかしの風景を守るとても大切なものであると感じた。

これらの税を通して僕が感じたことは、税金の在り方についてだ。森林の減少、さらには最近目立つ観光に関する問題。個人や民間企業の枠組みでは対処しきれないような問題の解決、そしてそれによってより良い結果をもたらすために税金はあるのだと感じた。税金は私たちの暮らしを支え、住みやすく、豊かな生活を後押ししている。そして、僕が喜ばしいと感じたことは、そのような流れが広島だけでなく、他の地域や全国にも広がっているということだ。オーバーツーリズムの面では竹富町が訪問税導入を検討、高野山も入山税の徴収を検討している。また、森林の保全面では、全国的に森林環境税が導入された。県や市で森林保全のための税が導入されている地域もあるようだ。この二点だけでなく、現実社会に存在する様々な細かい問題も税金で解決できるのではないか。

僕の故郷、広島県では今日も様々な人が行き交っている。そして、望めば誰でも足を踏み入れることができる。僕が訪れた場所がいつまでも同じような姿で迎えてくれるように、僕を癒してくれる自然がいつまでも変わらず残り続けていくことを、心から願っている。

未来への貯金

学校法人桐蔭学園中等教育学校 3年 井本 由維

消費税が10%に引き上げられたのは、今から5年前。その時私は「払うお金が増えるなんて嫌だな」と思ったことを覚えている。税のイメージが、家のお金を吸い取っていくような否定的なものだけだったことも記憶している。では実際、税とは私たちにとってどのような存在なのだろうか。

私は最近、歯列矯正を始めた。その時、普段の歯科検診よりもずっと大きい額の費用に驚かされた。矯正には医療保険が適用されないため、全て自己負担なのだ。だが、もし病気や怪我で病院にかかった場合も保険が適用されなかったらどうなるだろう。そのお金を払えない人もいるだろうし、病院に行くのを躊躇してしまう人も多いと思う。そうすれば守れるはずの健康が守られなくなってしまふ。それを防ぐのが私たちの納める税金なのだ。

ところで、逆に歯の矯正まで税金で賄ってくれるとしたらどうだろう。個人の支出は減り、矯正を諦めていた人も手が出せるようになるなど数々の利点が生まれる。だがそれは局地的で、一時的なものではないだろうか。様々なサービスに手を回せばすぐに税金は枯渇し、社会保障や道路の整備など、重要な問題に迅速な対応ができなくなってしまう。税金には限りがあるのだから無闇に使っていいものではない。税は集めるだけでなく、使うためのシステムも整っていないと意味を成さないのだ。

フィンランドは、現在国民の幸福度が最も高い国だ。しかし、フィンランドの消費税率は24%で、日本や他国と比べても圧倒的に高い。それなのに幸福度が高いのは何故だろうと思い調べると、税金が高い分社会保障がとても手厚く、税金の七割以上が福祉や保険、教育に使われているという。それに、国民の約96%が納得して納税しているということも分かった。その幸福度の高さはサービスの充実度も当然だが、何より国民が税の使い道を知りその目的を正しく捉えていることも大きいと思う。

税金は未来のための「貯金」だ。人間らしい生活を送ることは、一部の人だけが手にすることのできる贅沢ではない。全員がそういう生活を送るためには、税という柱でそれを支えることが必要だ。以前の私のように、税と聞けば「義務」や「負担」といった悪印象を抱く人は多い。そこで、そのような先入観を持ち続けないために、学校で税について学ぶ機会を設けてはどうだろうか。またそれは税の使途を数値として知るのではなく、一人一人が実例を調べ、見るべきだと思う。そうすることで生活と税金がいかに密接に関わっているかを感じ、「税は負担」というマイナスだけのイメージを払拭できるはずだ。

確かに、私たちと税との付き合いは長く、一生で納める税金は少なくない。でもだからこそ、税の意義を考え、前向きに税と付き合える社会でありたいと思う。

「公平な社会」を創るために

大月市立猿橋中学校2年 白川 夏帆

「税金が高い」と大人は嫌そうな顔をして言う。きっと私も大人になったらそんな事を言っていると思う。では、なぜあまり良い印象のない税金があるのか。そう考えてみてでた答えは「公平な社会」を創るため。今の日本では、子供のいる家庭といない家庭、介護を必要としている人がいる家庭といない家庭では対等な暮らしができているとは思えない。このことから、今の日本は「公平な社会」を創れているとは言えない。では、どうすれば「公平な社会」を創っていただけるのだろうか。

「公平な社会」とはどんな社会なのか。例えば、介護をする人の体力や経済、精神的な負担が無い社会。介護をするために職を変えたり辞めてしまう人や、介護のために本来受けるはずの教育を受けられないヤングケアラーがいる。さらには、介護うつになってしまう人がいる。この人たちに合った支援を提供することも「公平な社会」を創ることの一つだ。その支援とはどんなものがあるのか世界をみてみた。

世界には日本には無い福祉制度がある。例えば、フィンランドでは介護をする親族へのサポートとして給付や休暇が与えられる。この支援は介護をする人の負担を減らせる。また、フィンランドには他にも様々な福祉制度がある。教育の面では、給食費や小学校から大学までの学費が無料だ。このような制度は「公平な社会」を創ることに繋がる。ところが、この制度を行うには沢山のお金が必要で、そのお金を賄う税金が必要だ。そのため、フィンランドは日本よりも国民が負担する税金の額が高い。消費税は二十四%と日本の二倍以上にもなっている。

このように、税金があることには理由がある。税金が高いということは、その分国民が豊かな暮らしができるように仕組みや工夫がされている。そのため、税金を上げれば「公平な社会」に近づくと考える。けれど税金を今よりも上げてしまうと生活が苦しくなってしまう人がでてくる。現状は滞納者がいたり、税金に対する不満も多い。税金は上げすぎても下げすぎても困る人がいる。そのバランスは重要だが、正解がないから難しいことだ。

私は税金のことについて考えたり調べたりしてみて、税金と「公平な社会」には深い繋がりがあることが分かった。そして、私が今中学校に無料で通えているのも、教科書を無料で使えるのも税金のおかげだ。沢山の人のお金で使える物や場所は数多くある。その事を理解して、大事に使うことも税金と付き合いあっていくうえで大切なことだ。また、税金に不満ばかりを言うのではなく、税金はなくてはならない存在だということを頭に入れておくことも重要だ。しかし、税金や社会の制度にはまだまだ沢山の課題がある。私達はその事に他人事になるのではなく、向き合っていく必要がある。「公平な社会」を創るために。

税金は、どんな時にも助けになってくれる「ヒーロー」だと私は思っている。そう思うようになったのは、およそ半年前だった。

「ゴー、ドドド」

大きな地鳴りと共に、ぐらぐらと揺れた。

二〇二四年一月一日十六時十分に能登半島地震が発生した。私の住む富山県小矢部市では震度五強を観測した。幸い、私の家に大きな被害は無かったが、小矢部市の中でも他の地区は何日も断水が続き、家の屋根瓦が壊れているところがたくさんあった。また、私の祖父母の家がある氷見市では、断水が続いただけでなく、家が全壊したり、道路にひびが入って通行止めになったりと、とても大きな被害があったそうだ。

そんな中、この地震で被害を受けた人々の暮らしを守ったのは、税金だった。

地震が起きてから、注目されたのは避難所の生活や被災地の現状だった。ここでは、住む場所として集会所や体育館を開放したり、水や食料を提供したりと、できるだけ被災者が不自由なく過ごせるようになっていた。また、壊れた家を片付けるための費用は県や市町村の公費から出されていた。そこで、ふと疑問に思った。被災することを事前に分かっているはずがないのに、なぜ自治体の公費で被災支援できるのか。そんなにたくさんのお金はどこから出てくるのか。調べてみると、そんなことができるのは、私達がいつも何となく納めている税金のおかげだった。その時初めて税金の大切さを実感した。そして、税金が身近なものに感じられた。

今までの私は、税金なんて他人事だと思っていたし、深く考えたり調べたりすることもなかった。しかし、今回の地震を機に、税についてもっと知りたいと思った。

そこで、税金にはどんな種類があるのか調べてみることにした。よく目にする税と言えば、消費税、所得税、住民税、関税などだが、他にも、狩猟税や揮発油税などの私の知らないものもあり、全部合わせると五十種類以上もあった。

また「復興特別税」というのもあり、これは、東日本大震災の復興のための税金である。実際に、集められたお金で、仮設住宅の建設や被災地の復旧、被災者のケアなど色々な所で活用されているそうだ。このことから、私は、地震大国と呼ばれる日本は、みんなの税金で支え合ってきたからこそ、地震に負けることなく発展できたのだと思った。

このように、税金によって私達の快適な暮らしが支えられている。私を取り上げた例は、色々な税金の中の一部である。そして、まだまだ知られていないところで税が活躍している。だからこそ、税金の活躍を知り、大切さを感じてほしい。

これからも私は、みんなのヒーローを支えていきたい。

大人になりたいかと問われても、私は首を横に振る。なぜなら、心無い言動はもちろん、誰も傷つけていない言動まで批判するこの情報社会を恐れているからだ。そこでの少人数対大勢のやり取りを目にするたび、どうも息苦しさを感じてしまう。

そんな気持ちを変えた出来事を語るには、租税教室の存在は欠かせない。それは、社会は税で繋がっているという前向きで優しい考え方を教えてくれたからだ。無言で社会に存在し、敵対意識を持たれながらも人を支えてくれる税を想うと、それは優しい性格だと思わざるを得ない。このように、税にも関係する「支える」という言葉を思い浮かべると、真っ先に今年の元旦の出来事を思い出す。

能登半島地震。人々から笑顔を奪った地震。能登の形ある思い出が減ってしまった地震。この地震で被災した方の涙を見ると、誰でも心苦しくなるだろう。

そして、その涙を国も国民も見逃さなかった。租税教室を経て、能登半島地震と税との関係を調べると、国から復興のための税金が配分されていたことを知ったのだ。加えて、各地から多額の義援金が寄せられていることも分かった。これを頭に入れながら能登の姿を思い浮かべると、かつて訪れた輪島の朝市の景色が蘇ってきた。

商品を買うと、にっこり笑って「ありがとう。」「おまけで割引きな。」とおっしゃった優しい方々。次は、能登を越えて、「税金を復興のために使ってくれてありがとう。」と思ってくれている気がした。

石川の方々は、復興応援のための看板やCMを知っているだろう。これらからは、人々の温かい気持ちが十二分に伝わってくる。これを根拠として、社会の優しさの源は、税金とそれを納めている人々だと考えを変えた。この考えは、自分にはたくさんの味方がいるという、ほっとする気持ちを与えてくれる。

一方で、今日の社会には人の心を傷つける言葉や、能登半島地震でもあったようなフェイクニュースが絶えない。それは、自分の価値観や世界に留まっている、あるいは他人の姿が輝かしく見えて、妬んでしまうからではないだろうか。確かに、これらの気持ちはあって仕方がない。しかし、心の傷はなかなか癒えないものだ。この傷をこれ以上増やさないために、自分の味方を想像してみてほしい。税金で日本は繋がっていると考えれば、私と同じようにほっとできる人もいるだろう。そして、この気持ちが他者への感謝につながり、思いやることができると思う。

一人一人が人と税との役割について理解し、「おまけ」にそれらに感謝できたとき、この社会は明るい団体へと進化するだろう。これは、日本全体で叶えるから意味がある。そのため、まずは税を通して学んだ、社会の温かさをより発見していきたい。

産業を守る「鍵」

菰野町立菰野中学校 3年 中川 綾乃

ガシャンガシャン、ガララ。秋の田に響き渡るコンバインの音。丹精込めて育てた稲が収穫される。ハンドルを握るのは、祖父だ。祖父はコンバインをはじめ、トラクター、田植え機などたくさんの農耕作業用自動車を所有している。自動車の維持費は高いと聞くが、生活は成り立つのか。祖父に尋ねてみたところ、農耕作業用自動車は税制上の優遇措置がとられているようだ。

自動車を利用するには、道路や信号機、トンネルや高速道路など様々な社会整備が必要だ。それゆえに多種多様な税が存在している。例えば、環境性能割。これは二〇一九年から自動車取得税に代わり導入された税で、自動車を購入する際や、車検の度に納める。環境負荷の小さい車両の普及を目的としており、燃費性能の優れた自動車ほど税が軽減される。では、農耕作業用自動車の環境性能割はどのくらいなのか。私は、そのような自動車は大型で排気量が多いと考えていたため、環境性能割が高くなると思っていた。しかし実際は非課税であるを知り、驚いた。

また、自動車を所有している人は、毎年自動車税を納めることが義務付けられている。原則、自家用車の自動車税は排気量によって納める額が変化する。例えば、排気量が一〇〇〇cc超一五〇〇cc以下の自動車の場合は、毎年三〇五〇〇円。軽自動車の場合は軽自動車税が適用され、毎年一〇八〇〇円。そして農耕作業用自動車はというと、毎年二四〇〇円。比較してみると、農耕作業用自動車は自動車税において、かなり優遇されていることがわかる。

さらに、農耕作業用自動車に使用する軽油は軽油引取税が免税になる。軽油には一リットルあたり三二. 一円の税金がかかっているが、手続きをすれば免税価格で購入することができる。

日本政府は二〇三〇年までに食料自給率を四五パーセントとする目標を掲げており、目標達成のため農業経営の安定、発展を後押しする税制措置がとられている。このように、日本の農業は国に保護されている。今後も農業を守っていくためには、課税や免税の運用の仕方に工夫を施す必要がある。そうすることで、昨今の農業従事者の減少や、耕作放棄地の増加などの問題解決にも繋がるだろう。

農業の他にも、保護を必要とする産業はある。あらゆる産業が衰退していく原因の一つとして、収益の低下による担い手の減少が挙げられる。そこで、税制上の優遇措置をとることで収益が向上し、担い手の減少を防ぎ、結果的に産業を守ることに繋がる。つまり、正の循環が生まれるのである。

税制措置は産業を守る「鍵」となる。これからの日本を担う私たちは、税について学び、日本の産業をどのように守っていくべきか考えることが大切だと思う。

税金がもたらした経済効果と課題

名古屋市立丸の内中学校3年 伊庭 和奏

「税金」という言葉を聞くと、あまりいいイメージが湧かない。中学生の私は消費税くらいしか税金を納めたことがないはずなのになぜだろう。おそらく、テレビや新聞などのマスメディアでの税金についての報道はマイナスな印象を与える否定的なものが多く、肯定的な報道をあまり見かけないからだろう。確かに、お金を稼ぐということは大変なことだから税金を納めるのは決して楽なことではないだろう。

世間からの風当たりが強く、あたかも国民の敵のような扱いを受けている税金だが、人々の暮らしを豊かな方向へ導いたことはないのだろうか。

インターネットで税金について調べてみると、税金がある県に大きな経済波及効果をもたらした事例があることが分かった。その県では立地の条件が良く、国内での半導体産業を成長させるために世界的な半導体メーカーの工場が日本で初めて建設されるという国家プロジェクトが行われた。その工場は国民からの多額の税金が原資となって建てられている。近年、半導体の需要は増加しており半導体の市場規模は拡大していくと考えられているため、工場への働き手がたくさんその県に移住してきた。それによって働き手から所得税や住民税、法人税などを納めてもらうことができ、交通量も増え、インフラの整備も進んでいる。結果的にその県の経済を回すことができた。これは税金が効果的に使われ、人々の生活を豊かにした一例だと思う。

だが、いい効果だけではなく解決しなければならない問題が浮かび上がってきているのも事実である。その問題とは、先述した工場が好待遇すぎるあまり人々がそこへ流れすぎてしまっており中小企業の人手不足を招いているというものだ。中小企業は人材を確保するために給与を上げるなどの対策をしているが効果はあまりなく、悲鳴を上げている企業が多く存在する。また、私は今後増える半導体工場の働き手の量に比例して運搬なども含み交通量がかなり増えるのではないかと考えた。ある程度なら工場によって生まれた税金などでインフラの整備が可能だと思うが必ず限界があるため整備の資金が不足したり道路の完成が間に合わず、交通渋滞トラブルの発生なども考えられると思う。これらの問題が今後の課題となっていくだろう。

私は今回税金のことを調べるまで、こんなにも国家プロジェクトに税金が使われていると知らなかった。また、どのプロジェクトにも少なからず問題があるとはいえど、県の経済を大きく回せるほどの影響力を持っているとは思わなかった。だから、私はこれからももっと税金について学んでいく必要があると思う。税金は国民の敵ではなく、むしろ味方であり人々の生活を豊かにすると分かった。私も将来税金を納めるときには国を豊かにするという意識をもって納税したい。

税からうまれる笑顔

静岡大学教育学部附属静岡中学校 3年 齋藤 一翔

僕が「税」という言葉を聞いた時、身近なようで深く考えてこなかったものだった。増税、関税、国税、確かによく聞く言葉だらけだが、聞くだけでどのようなものなのかを考えたこともなかった。

そこで、自分の身近な税を探してみた。最初に思いついたのは、学校の教科書だった。始業式や入学式でもらう教科書。すべて税金で賄われている。他にも、僕はよく塾に行く前にコンビニを利用する。グミやおにぎりやお茶などを買うときに、毎回支払っている消費税が一番身近なのかもしれない。母と話をした時に、毎月の給料の中から住民税が所得税を納めているけれど、買い物一回ごとの消費税は少なくても、一生で考えると一番多く払うことになるのが消費税だと教えてもらった。僕は税金を納めていないものだと思っていたが、毎日のように納めていたことがわかった。

ところで、そんな毎日納めている税金は何に使われていて、誰のためになっているのだろうか。

ある日、僕と母で近所のこども食堂へ行った。そこは以前、英語を教わっていた先生が営む子ども食堂だった。中に入るとたくさんの人が利用していた。お父さんが三人の子どもを連れてきていたり、子どもたちだけできていたり、奥の方ではみんなのために汗をかきながら料理を作っている人が何人もいた。利用している人は、ひとり親の子たち、共働きで昼だけを食べにくる子もいる。

また、母からは貧困を支えていたり、子供たちの心の居場所としての役割をしたりしていると聞いた。初めて利用したが、確かに地元の人たちの居場所であり、次から次へとたくさんの人が利用していて驚いた。

調べてみると、こども食堂を運営するときに助成金という補助をしてくれるお金とボランティア、フードバンク、直接の食べ物の寄付から成り立っているとわかった。この補助されるお金が税金なのだ。

このように、自分たちが払っていた消費税というのは、知らないところでとても大切なことに使われていることがわかった。

そして、自分たちが食べている食べ物や教科書など身近にあるものは、当たり前ではなく、家に帰れば当たり前のようにある環境も当たり前ではないのだと感じた。

これからは買い物をする時、心のどこかで誰かの役にたっているかもしれないと思う。日常を過ごす中で、日々感謝しながら生活をしていきたいと思った。みんなが少しでも平等に温かいご飯が食べられるようになり、居場所が増えることを僕は願う。

一回に納めるものはわずかでも、積み重なれば、誰かを笑顔にできるかもしれない。

日本人の幸福のために

滋賀大学教育学部附属中学校 3年 馬場 莉子

私は、以前、日本の社会保障制度について考え、その制度の充実さに驚いた出来事がありました。

それは、私の父方の祖父が15年前に神経性の難病を患い、年々体中の筋肉が硬化し、寝たきり生活になり、年に数回は必ず肺炎になってしまい、その度に入院する姿を何度も見ていたのですが、祖母が祖父の介護をしている最中に私に「じいじはこれまで働いて高い税金を払ってきたけど、今はそのおかげで高い病院代を国にみてもらってるんや。本当にありがたいわ。」と言ったのでした。詳しい費用は知りませんが、祖父は病気の薬代や入院した際の入院費、筋肉が固まるので定期的にマッサージを受ける費用など、多額の治療費がかかっていたと思います。そんな費用を国から保障してもらっていることを祖母から聞いて知り、日本の社会保障制度は充実しているのだなと実感したのです。しかし、私はこのような充実した日本の社会保障制度は今後は維持できなくなってしまうと思います。

それは、今回、税について学んで知ったことですが、将来、社会はどんどん少子高齢化が進み、社会保障にかかる費用を負担する働き手が減少していくからです。しかし、これは仕方がないことだと思います。支えなければいけない高齢者が増加し、支える若者が減少していくのが現実であれば、社会保障費をまかなう税金が減少してしまうので、一人あたりの補償される額を減らし、日本国民全員で苦しさを分かち合って、節約するための知恵を出し合ったりする等して乗り越えていくしかないと考えます。父は公務員として働き、税金を納めていますが、私も成人すれば一生懸命働いて、日本国民の義務として、祖父のような高齢者を支えるために決められた税金を納めていきたいと思います。

しかし、8月中旬ごろの新聞記事に、ある自治体の永住資格をもった外国人の住民税や国民健康保険料の滞納率が、日本人と比較して、三から四倍も高く、国民健康保険料では日本人の滞納率が約九パーセントであるのに対し、外国人は約二九パーセントと高く、更に永住資格を取得するまでは納税して、取得すれば滞納する悪質なケースもあり、納めるべき税金を納めずに日本の手厚い社会保障を受けている外国人が多くいることを知りました。

国は、法律を改正して悪質な税金を滞納する外国人の永住資格を取り消せる制度にしたとありましたが、税金は無限に湧き出るものではなく、ほとんどの日本人が真面目に働き、納めた、限りのある財源なので、このような日本の手厚い社会保障制度を悪用する外国人のためでなく、戦後の苦労された時代から今の豊かな日本にさせていただいたご高齢の方々が幸せになっていただくために使ってもらえる世の中になればと心から願っています。

税金問題の答えとは？

京都府立南陽高等学校附属中学校 3年 平原 礼名

「皆さんには税の必要性について学んでもらいます。」

今まで繰り返し行われてきた税の授業。今日も学ぶ日がやってきた。私は過去の記憶を遡る。

「税金は、公共施設の提供や道路の整備など、私達の生活に欠かせないサービスを賄っています。」

先生の給料もサービスの一つですね、と無言で相槌を打つ。先生のおっしゃる通り、もし税金がなければ私達は生活が不便どころでは済まない。あらゆる公共サービスが解体され、瞬く間に社会が無秩序になる。先生も教壇に立つことすらできていないだろう。きっと、その税という制度が必要であることは国民は十分に理解しているのだ。しかし、税金を増やすとなれば国民から批判が殺到してしまうのが現状だ。私は、税金問題は簡単に解決出来ないと深く実感する。

「そして、大切なのは、一人一人税の意見を持つことです。」

意見。先生の言い分は最もだと思う。だが、私はこれまで耳にした意見の中で、妙だと感じる考えはなかった。税金を増やすべき、減らすべき、維持すべき。全ての主張が真っ当な答えであるように見えてしまう。これでは一貫した意見を持ってない。

この時、あることわざが頭に浮かんだ。

「問いを持った部族は生き残ったが、答えを持った部族は滅びた。」

たしか、アメリカのことわざだ。私は一人納得した。なにも、答えを持たなくても良いのだと。税について常に真正面から向き合う姿勢をとり続けていくことが重要なのだ。思えば、答えを固めてしまうと、他の意見を認めることが難しくなってしまう。意見は話し合うためにあるのだから、当然かもしれない。私は自分の成長を実感した。

「税金問題は、日本国民として皆が考えなければいけないことです。ですが、一人で考え続ける必要はありません。国民は一人じゃありませんから。」

税についての考え方は、人それぞれ異なる。正解は一つではなく、それぞれ異なる立場や状況で見つけ出すべきものだ。重要なのは、固定された答えを持つのではなく、常に「問い」を持ち続けること。社会が変わり続ける中で、私たちがまた考え方を柔軟にし、他者との意見を共有しながら、より良い未来を築いていくために協力し合うことが求められる。共に考え、支え合うことで、より良い社会を実現できると私は信じる。

子供たちの未来のために

貝塚市立第三中学校 3年 久世 夏帆

私の夢は教師になる事です。中学生になり、クラスや学年全体をまとめる学級委員長をしています。そして、毎日先生と打ち合わせや雑談をする中で、私も先生のように、熱心で生徒思いであり、みんなに慕われる先生になりたいと思うようになりました。きっかけを作ってくれた先生にはとても感謝しています。

今回の税の作文は、私が教師になったら未来の子供たちにどんなことを伝えたいかという視点で考えました。

まず、私たちの公立中学校は、一部PTAなどの保護者や地域住民の協力も不可欠ではありますが基本的に全て税金で運営されています。まずは、学校の水道、電気料金は全て税金から支払われています。学校の先生や事務の方の給料も税金から支払われています。そして、私たちが日々使用している校舎、黒板やチョーク、机、iPadなども全てが税金が原資です。また、教科書も税金から私たちに支給されています。これが全生徒分の全9教科、そして副教材も入れると、とんでもない金額になります。当たり前のように教科書を受け取り、教室に置きっぱなしにするなど雑に扱ってしまった時もありました。

しかし、日本では当たり前でも、世界ではそうではない国もあります。以前学習したフェアトレードの話です。アフリカでは貧困の為、子供たちも労働し、その少ない賃金も家族には重要な収入なのです。貧困で教育を受けられず、その為さらに貧困を呼び、それが次の世代でも繰り返すのです。アフリカだけではなく、東南アジアでも貧しい農村では、学校に行けない子供たちがたくさんいます。そんな中、日本政府や企業などがこれらの国に学校を建設しています。学校ができ、現地周辺の親にも教育の大切さを理解してもらい、子供たちを労働から教育へ移行させ、そしてより良い収入が得られるように教養を身に付け社会全体を発展してもらおう、WINWINを目指した取り組みです。しかし、そんなテレビを見た時、教科書はボロボロで、それを何人かで共有していました。

そう考えると、ひとり一つの机や椅子があり、だれも使用していない私だけの新しい教科書が毎年配られます。日本全国どこに住んでいても教育が受けられるようになっているのです。過疎化が進む山奥の村にも小学校があり、日本はすごい国なんだなあと、改めて実感しました。この教育を受ける権利を、次の世代にも続けていくためには、やはり安定した税金が必要だと思います。

税金とは国を運営するのに必要なものです。これから私たちが豊かになるため、そして世界の子供たちのためにも必要なものだと思います。

私もいつか尊敬する先生のような教師になれるように勉学に努め、しっかりと働き納税したいと思います。

ふるさと納税から学んだ納税者のすべき事

大阪市立春日出中学校3年 田中 夕凜

何ヶ月か前に、テレビでふるさと納税についての番組を見た。そこで、制度について考えさせられる実情を目にした。

ふるさと納税とは、生まれ育った地域から都会に移住した人が、自分のふるさとに納税できるようにしようと生まれた制度である。自分で選んだ自治体に寄付をすることで、住民税と所得税から二〇〇〇円を除いた寄付額の全額が控除され、自治体からお礼の品としてその地域の特産品などがもらえる。これだけ聞けば、

「たった二〇〇〇円で特産品をもらえて、好きな自治体を応援できるなんて最高だなあ。」

としか思わないかもしれない。しかし、大きなデメリットも存在している。

人々が自分のふるさとではなく、ほしい特産品のある地域に寄付をするようになり、制度の本来の目的からずれてしまったうえに、自治体同士でどれだけ多く寄付をしてもらえるか、競争が起こっているのだ。

なにより、都市部の税収が減っているのが問題で、調べてみたところ、私の住んでいる大阪市では去年だけで約一五〇億減ったという。税収が減るということは、税収を財源としているサービスの質や存続に影響するおそれがある。道路の整備などはもちろん、学校の設備の維持などができなくなる可能性があるのだ。自分達の生活を豊かにするための税金が、十分に還元されないことは、大きな問題だと思う。

しかし、ふるさと納税は完全に悪い制度というわけでもない。最近だと、今年の元旦に起こった能登半島地震に被災した地域の復興活動に、ふるさと納税の寄付金が役立てられているという。恩恵も得られていることから、制度の改善のための議論が必要だと思う。

私は、この問題を解決するためには、私達納税者の意識を変えなければならないと考える。返礼品などの目先の利益にとらわれるのではなく、

どの自治体に寄付すべきか？

寄付したお金はどのように使われるのか？

自分達に使われるはずの税金を減らしてでも寄付すべきなのか？

このような疑問を持ち、どうするかをしっかりと考えた上でふるさと納税を利用することが大切なのではないか。

自治体によっては、寄付金の使い道を自分で選べるところもある。考える上で参考にしやすいだろう。

納税者全員が税について、よく学ぶようになれば、もっと社会はよくなると思う。私も、これからの社会を担っていく若者として、税について勉強していきたい。

公平と税

豊岡市立日高東中学校3年 小山 紗季

私は税を払うことは当たり前だと思うし、何の疑問も持っていません。だから、今回社会の授業をしたときに、不満を持っている人がいるということを知って驚きました。

税には「公平な原則」というものがあり、水平的公平、垂直的公平、世代間の公平の三つがあると習いました。水平的公平は経済力が同等の人に等しい負担を求めるもので、消費税などがあります。特定の人に負担が集中せず税収が安定しますが、所得が少ない人は多い人に比べて生活が苦しくなり、不満を持っている人がいます。二つ目の垂直的公平は経済力のある人により大きな負担を求めるもので、所得税の累進課税制度などがあります。所得の少ない人は払う税の額は安くなるので水平的公平の消費税と比べて嬉しい人は多いと思います。しかし、所得の多い人は高い額を払わなければいけないので、働く世代などの所得の多い人の不満は大きいといえるでしょう。三つ目は世代間の公平です。現代の世代だけではなく、将来の世代の負担も考慮し、全ての世代が安心できるものであり、子育ての支援金や医療費、年金などがあります。税によってさまざまな福祉の費用を負担しています。その費用を一人一人平等にするべきという考えですが、なかには自分ではない小さな赤ちゃんや高齢者に税を払わなければいけないことに不満を持っている人がいるのかもしれない。

このようにいろんな人が多様な意見によって不満を持っています。だからこそ、この三つの公平さを組み合わせて税を払っているのです。私はこれは正しいことだと思います。世の中には、「公平」と「平等」という言葉があります。「公平」は一人一人に必要なサポートを提供することです。「平等」は全ての人を同じように扱うことです。人間は一人一人人権を持っており、それを尊重するのが国家の役目です。平等にしてしまうと、その人権にかたよりが出る可能性があります。だからこそ、公平な税の集め方をすべきだと考えました。

今はまだ働いていないので、納める税が少なく、冒頭のように感じています。大人になって社会に出るとたくさんの税を納めなければいけないので、大変になると思います。しかし、国民の義務を果たすためにしっかり納めたいと思います。税は国を動かす大黒柱と言えるでしょう。そんな大切なものなのだと理解して、行動していきたいです。未来の社会を支える立場にある私たちが大きく理解すべきことのはずです。

「税」と聞いて、まずイメージするものは社会における税制度の意義や、私たちの生活において税の恩恵を受けていることに対する「感謝」ではなく、納めるという行為に対する「負担」ではないだろうか。つまり「税」にはネガティブな印象がつきまとう。

当たり前享受し、そのありがたみを理解しないまま過ごしていることは、税に限ったことではない。どれも相互の理解不足が原因であり、互いを理解することで歩み寄れることは多い。しかし、親への感謝であれば、成長の節目に気づききっかけとなるが、「税」への感謝となると、気づきとなる機会が、少ないのではないだろうか。

我が家には、私が幼い頃からずっと、年に一度、税を納めることが「希望」となっていることがある。それは「ふるさと納税」だ。幼い頃はわかっていなかったが、両親から、どういった経緯で、その税を納め続けているのかを聞いてからは、私も弟と同じ「思い」を共有するようになった。

ふるさと納税とは、応援したい自治体を選んで、使い道を決めて寄付できる制度だ。受動的に納めるものではなく、自分の意志で、自分がしてほしい活動に寄付ができる。また、その土地の返礼品を受け取ることができる。

我が家は、佐賀県への「NPO支援」を使い道に指定したふるさと納税をしている。佐賀県のNPO支援の中には、こどもの貧困、いじめ対策、不登校の居場所づくり、災害支援、海洋プラスチックの回収、病気の支援など、百以上の多様なメニューがある。私は、両親から、ふるさと納税で、治らない病気が治るようになるための研究に充てられていることを知って、弟が病気とわかった時の「絶望」が「希望」に変わったと聞いた。自分達には直接治してあげることができないが、ふるさと納税をすることで、医療者や研究者と並走し、治る日を信じている。返礼品には、佐賀に住む同じ病気の患者・家族とその関係者による品が用意されている。家族でその返礼品をいただく時間は、家族でいつか根治の日を改めて願う時間となっている。ふるさと納税が充てられた研究成果のレポートも届いている。我が家はこのふるさと納税で、未来に希望を持つことができている。

これを機に、私の住む市のふるさと納税の使い道も調べてみた。ICT教育環境整備事業・学校給食費補助事業・児童図書購入事業・がんばる児童・生徒応援事業とあった。実際に私自身も、ふるさと納税の恩恵を受けていることを知った。

私は、ふるさと納税をきっかけに、税に関心を持つことができた。いつか私も両親のように、弟の病気の根治のために納税し、弟の病気が根治する日が来ることを願っている。税は、決してネガティブなものではなく、人々が幸せに暮らすための重要な役割を果たしていることを意識して過ごしていきたい。

税と聞けば多くの税は大人が納めるものであり、それを納めなければ罰せられるという難しいイメージだが、唯一私たち中学生でも関わりのある身近な税金が消費税である。私が住んでいるのは奈良県だ。両親や兄も税を納めているが、納めている税が奈良県にどのように使われているのかあまり理解はしていない。そこで私が唯一納めている消費税と奈良県の間を調べ、税金をより身近に感じ、知識を深めようと考えた。

消費税がどのような過程で奈良県に使われているか調べるため、奈良県のHPを参照した。すると、消費税の一部が地方消費税として県や市町村の財源となり、私たちの暮らしに役立てられていることがわかった。そのことから、消費税は全て国に納めるのではなく、消費税の一部は国民から納められた都道府県に地方消費税として納められることが分かった。私が奈良県に対して税の分野で貢献しようとするならば、奈良県で消費税を納めることが重要になってくる。しかし、例外があることも忘れてはいけない。

ここで出てくる地方消費税は、国税である消費税と同様に事業として行った商品の販売やサービスの提供等の国内取引や外国貨物の引用に対して課税される都道府県税だ。地方消費税は都道府県税だが、その税収の半分は奈良県内の市町村に交付されており、都道府県と市町村の財源として身近な行政に活かされる。調べていくと、消費税率十パーセントのうち二・二パーセントは地方消費税ということは、案外少ないなと感じた。

ここで注意しなければならない点の一つがある。本来、地方消費税は最終消費地の都道府県に払い込まれるべきものであるが、製造業者、小売業者及び消費者が複数の都道府県にまたがる場合は、最終消費者が負担した地方消費税の一部が最終消費地以外の都道府県に納付されてしまう。これが先ほど私が述べた例外の一つで、奈良県で消費税を納めれば、奈良県のメリットに繋がるわけではないということである。

では、奈良県の地方消費税収の実態を詳しく調べた。すると驚くべき結果がでてきた。奈良県の地方消費税収は全国四十七位であった。奈良県の一世代あたりの消費支出は全国十位であり、決して奈良県民の消費が少ないわけではなかった。だからこそ、原因の一つは消費が県外へ流出していることが考えられる。そしてデータでは、奈良県民の県外での購入割合は全国一位だった。これは、大都市である大阪、京都に近いことも要因の一つであると考えた。

よって、消費税と奈良県の間は非常に悪いことが分かった。そしてこれを脱却するためには、県内消費を増やす必要があり、地産地消の重要性を理解した。私自身の生活が良くなるためにも、奈良県でもっと買い物をしようと思った。

今、私たちにできること

有田川町立吉備中学校1年 松本 湊音

二〇一一年十一月八日十二時四十分に僕は生まれた。元気な産声を上げて。しかしほっとしたのもつかの間、血液検査で異常が見られ、急遽救急車で大きな病院に搬送されることになった。NICU（集中治療室）への入院が決まって、母は心配のあまり涙が止まらなかったそうだ。入院中は専門の先生や看護師さんが二十四時間体制で治療やお世話をしてくれ、両親が毎日面会に来てくれていた。約一週間で退院できるようになったが、医療費の助成制度があるため、実際に支払う額は少なく済んだそうだ。

この話を聞いたときは、「そんなことがあったんだな」とあまり深く考えたことはなかったけど、税金の使い道を知った今、改めて考え直してみた。「たった一つの小さな命を救うためにたくさんの人の方が働き、見えない税金に支えられていたんだなあ」と感じ、今、当たり前前に過ごす毎日に感謝の気持ちが芽生えた。もし、このようなサービスがなかったら自分や家族の生活はどうなるのか？

例えば、救急車。一回の出動で約四万五千円がかかると言われており、令和四年度の救急出動件数を合計すると三千億円以上もかかっていることになる。しかし、病院へ搬送された方の内、四十五％が軽症であった。救急車を適正に利用するだけで、一千億円以上の節約ができる。また、軽症の利用者が増えると、重症者への対応が遅れ、結果として救える命が救えないという事態を招いてしまうのだ。救急車出動増加の問題がこのまま続けばこれまで無料だった救急車利用が外国のように有料化されるかもしれない、実際にそのような議論もされ始めている。

最近、日本では社会保障関係費が増加していることも問題となっている。そのために、今自分ができるとは、健康でいること。健康であれば、病院を利用する回数が減って本当に医療のサービスが必要な人に適切な治療を受ける機会を回してあげることができるのではないかな。

今、僕が直接納めることができるのは消費税だけで、全体から見ればほんの少しに過ぎない。しかし、周りを見てみると学校の教科書や机など、また図書館などの公共施設、ごみ収集、様々な物に税金が使われていることに気付く。これらは僕たちの生活を豊かで安全、便利にしてくれている。自分ができることは限られているかもしれないけれど、まずは自分の身近なものを大切にすることから始めていきたいと思う。そしてこれからはずっと心がけていって周りの人にも伝えていきたい。

祖父母や両親が一生懸命働いてきて納めてくれた税金が、今の日本を支えている。いつか自分も社会に出て働き始めたときは、しっかりと納税をしてまた次に続く子どもたちの未来を明るくしていきたい。

最近、私が小学生のときに利用していた通学路を久しぶりに通った。広い空き地やほぼ人の通らない交差点。昔と変わらない懐かしい風景の中に、一つ前と違う部分があることに気づいた。道路の端の用水路に柵と反射板が取り付けられていたのだ。その用水路は狭い場所に位置しているうえに、周囲に電灯も少なく、辺りが暗くなってくると用水路があることにさえ気づきにくくなってしまう。危ない場所だと以前から思っていたので、真っ白で綺麗な柵の側を真っ赤なピカピカのランドセルが走っていくのを見て、私まで嬉しくなった。

だからこそ、この柵が税金によって作られたのだと聞いたときにはとても驚いた。これまで税金というと、私には国のためにお金を集める、というイメージがあったのだ。国のもののように感じていた税金が、小さな地域の小さな場所にまで使われていると分かり、なんだか嬉しかった。

これをきっかけに税金について調べてみると、道路整備だけでなく、医療費の援助や年金制度など、生活のいろいろな場面で税金が使われていることが分かった。また、税金の種類にもいろいろあり、ゴルフ場の利用者に課されるゴルフ利用税や、鉱泉浴場での入浴に対して課される入湯税といった、あまり耳にしたことのない面白いものもあると学んだ。普段、消費税くらいにしか触れる機会がないが、今後大人になって関わることもありそうな税もあった。

お金の動きは目には見えにくく、私たちは税金による負担の部分ばかりに目を向けてしまいがちだ。しかし、日常生活をよく振り返ってみてほしい。教科書が無償で配布されていたり、救急車を無料で利用できたりと、私たちの生活がいかにか税金に支えられているか分かるはずだ。税金について知っていくうちに、税金を納めるということは一方通行のシステムではなくて、人が人を支え合うシステムなのだという事に気づいた。税金の制度とは、社会というグループに属している人々が、グループを運営するために会費を支払っているようなものなのだ。グループに属する誰か一人でも会費を支払わなければ、グループが運営できなくなってしまう。一人ひとりが会費を支払う代わりに、集まったお金でグループが活動し、それが自分のためにもなっていく。負担も恩恵も、お互い様。自分のためにも他の人のためにも、私はこの社会の一員として、責任をもって税金をきちんと納めていきたい。

返礼品は「地域の復興」

広島修道大学ひろしま協創中学校3年 沖本 万泰

今年の元日に起こった衝撃的なニュースは、まだ我々の記憶に新しい。石川県を中心として起こった能登半島地震に日本中がショックを受けた。倒壊して傾いた建物や、大きく亀裂が入った道路がテレビで映し出され、私の心は強く痛んだ。真冬の北陸地方の寒さの中、電気や水道、ガスなどのライフラインも十分に機能しない状態での避難生活を思うと、想像しただけでも胸が締めつけられた。きっと私だけでなく、多くの人が同じ気持ちだったと思う。

そんなとき、母が私にある提案をしてきた。その内容とは、ふるさと納税をして、震災被害にあった人たちの役に立ててもらおう、というものだった。

ふるさと納税は、二〇〇八年から始まった、自分の故郷や応援したい自治体を選んで寄付金という形で納税することができる寄附金制度の一つだ。二千元を超える寄付を行った場合、所得税の還付や住民税の控除を受けることができる。そして、地域の名産などの返礼品ももらえるため、私は以前から身近に感じられる納税制度というイメージを持っていた。

しかし、今回母が提案してきたのは、被災地の自治体に返礼品を希望しない寄付を申し込むことによって、被災地で何らかの役に立ててもらおうという内容だった。広島から被災地は距離もあるし、今はまだ災害の直後で、何が必要な支援か判断もしづらい。でも、いつか必ずどこかのタイミングで、被災地には多くのお金が必要になる。そのために微力ではあるが、今できることを行動にしようと思い、私は母の提案に賛成した。早速ふるさと納税のサイトを見ると、既に災害支援を目的としたふるさと納税の受付が始まっていた。

「どうか、被災地域の役に立ちますように。」

母と、そう言いながら申し込んだ。

それから約三週間後、我が家にふるさと納税をした自治体から、お礼と寄附金受領証明書が届いた。まだ震災から一ヶ月も経たない時期にも関わらず、被災自治体の事務対応の素早さに、私はとても驚いた。しかし、届いた寄附金受領証明書を見たことで、無事に寄付金が受領されたことが実感でき、私は安堵することができた。

実は、これが我が家にとっての初めてのふるさと納税だった。初めてのふるさと納税が災害の復興支援というのが悲しいが、震災の直後に自分のできることを行動に移せたのは、ふるさと納税のおかげだとも思っている。そして、返礼品の希望はなしという形での申し込みではあったが、私は被災地域の復興こそが、一番の返礼品だと感じている。震災だけでなく、日本は災害大国だ。これを機に、ふるさと納税は災害支援にも繋がる制度だということを、ぜひ多くの人々に知ってほしい。

キャンプに向かう途中の山道で辺り一面に竹が生えている場所が目にとまった。どうしてこんなに竹が生えているのか父に尋ねると、「最近、高齢化が進んだせいもあって山の手入れをする人が少ないからね。竹林ばかりになると山の保水力が下がって、崩れやすくなるからよくないんだよ。」

と教えてくれた。私は自分の住む地域の山林が荒れていることを不快に感じ、どうすれば山の手入れができるのかインターネットで調べてみた。

調べていくうちに「森林環境税」というキーワードが目にとまった。これまでに、消費税や所得税という言葉は耳にしたことがあったが、森林に関する税金があることは知らなかった。次に森林について調べてみると「やまぐち森林づくり県民税」という税金もあることが分かった。山口県に森林に関する税金があることに驚いた。私は自分の住んでいる山口県の税金に興味をもち、もっと調べてみたいと思った。

やまぐち森林づくり県民税とは、豊かな森林を次の世代に受け継ぐための税金で、山口県民一人当たり年間五百円を払い、その集まったお金で山や森をきれいに整備する。具体的には、木と木の間にある木を切ることで、太陽の光が葉に届いて成長を促すことができ、かつ成長することで根が強く張って、土砂災害を防ぐことができる。近年、国内には伐採しないと危ない巨木が多く存在している。突然、巨木が倒れて人や車を押しつぶしたというニュースを目にしたことがある。それらの巨木を伐採し、新しい木の苗を植えることで、二酸化炭素が削減され、持続可能な社会に繋がるのではないだろうか。

次に森林環境税について調べてみた。森林環境税は、気候変動と増加傾向にある山林災害に対処することを目的に、今年度から始まった国税で、一人年額千円が徴収され、その金額が国から地方自治体に森林環境譲与税として譲与される仕組みになっている。

また、元々復興特別税として、二〇一四年からの十年間、住民税に上乗せされていたものが、今年から森林環境税に置き換わった形になっているため、実際の国民の負担は今までと変わらないが、このことを知らない人が多いのではないかと感じた。

やまぐち森林づくり県民税と森林環境税をそれぞれ有効に使い、山口県も日本全国も安心して持続的に暮らせる場所にしていきたい。

そのためには、目的や使い道があまり知られていない2つの税金について、SNSなどで積極的に情報発信を行い、県民にも国民にもより広く知ってもらうことが必要だと感じた。校内放送や学校新聞で税金の話を取り上げることは、私にもできる情報発信だと思う。

税を知って、有効に使って、安心安全な豊かな社会が維持されることを心から願って。

「JAPAN HOPE」

綾川町立綾川中学校1年 横井 宏行

HOPE。僕にとって税金は希望だ。

両耳小耳症の僕は小学校五年生から六年生の時に耳介形成手術を四回受けた。医療費、入院費などとても高額だ。耳介形成手術を受ける時に、何か医療費の制度がないか父が調べてくれた。育成医療という自立支援医療制度があることが分かった。育成医療とは、障害児で、その身体障害を除去、軽減する手術等の治療によって確実に効果が期待できる者に対して提供される、生活能力を得るために必要な自立支援医療費の支給を行う制度だ。

僕は対象となる聴覚障害の先天性耳奇形にあたり、市町村に申請書を提出して育成医療を利用することが出来た。

小耳症とは、生まれつき耳の形が小さい、ない、難聴を伴う先天性の病気だ。僕は両耳難聴で補聴器をつけていて、右耳は少し耳の形はあるが、左耳は耳たぶの下の部分しかない小耳症だ。手術をするまでは、めがねをかけることも出来ず、マスクを耳にかけることも出来ない。耳にかける補聴器を装着することが出来ず、カチューシャ型の補聴器をしていた。生活面で、難聴の僕は耳かけ型の補聴器が使えないのはとても苦勞が多く、マスクも頭からかぶるように工夫していた。耳介形成手術をしてからはマスクもめがねもかけることが出来、新しい耳かけの補聴器を使うことが出来る。新しい世界が目の前に広がってとてもうれしかった。今までは出来なかったことが出来る喜び、希望しかない。

耳介形成手術は、一回につき百万円かかる。僕は四回手術なので合計で四百万円、家族にかける負担は大きい。金額のことを考えた時、僕は左耳の手術だけにしようと悩んだことがある。生活に不便があっても家族の負担を考えたら片耳手術でいいと考えていた。その時、父から育成医療のことを聞き、医療費一割負担で手術を受けさせてもらえることを知った。

片耳でなく両耳手術を受けられる。と思うとうれしくてうれしくてありがたいの気持ちであふれていた。無事、両耳四回の手術を終えて今、マスクを耳にかけて、耳かけ型の補聴器の購入を検討している。僕にたくさんの希望を与えてくれた育成医療制度にたくさんのありがとうを伝えたい。この育成医療制度は、みなさんが納めてくれた税金が使われている。僕のように、障害を持って生まれた子供が手術などの治療を受けて将来、今よりも生活しやすくなるように出来た制度だ。手術前にはなかった、前向きにいろいろなことに希望を持って取り組む意欲がわいている。税金というと納めていてもどんな所に使われているか見えにくく分かりにくいイメージだ。しかし、影で僕たちを支えてくれている税金。助けが必要な人に手を差し伸べてくれている税金。僕が体験したことを一人でも多くの人に伝えて税金の大切さを知ってほしい。僕に希望というプレゼントをありがとう。

僕の妹は今四歳だ。二歳の時、一万人に一人と言う珍しい病気にかかっていることが分かった。大学病院で何度も検査して、入院治療をして、今は毎日の服薬と月一回の点滴治療を続けている。妹が受けた治療の領収書を見てみると、診察や検査、点滴は一回数万円で、さらに服薬している薬代も記載されていた。思ったよりとても高額で驚いた。もし、これらを全額自分で負担しなければならない制度であれば、こんな金額を何年間も払い続けることができたろうか。

しかし、妹は、子ども医療費助成制度があるおかげで通院は月六百円の負担で済んでいる。では、かかっている治療費の残りは誰が負担してくれているのだろうか。きっと、日本中の納税している人たちだ。こういった医療費に税金が使われていることは知識としては学んでいたが、僕は税金のおかげで妹が小さな負担額で治療できていることを初めて実感した。また、妹だけではない。僕も弟も、小さい頃はたくさんの風邪や病気にかかって病院で治療を受け、その度に税金で負担を軽くしてもらっていたのだ。

そう思って周りのものを見てみると、税金で負担しているものばかりだ。僕たちが幼いころ遊んでいた公園の整備、使っている教科書の無償化、学校までの通学路が舗装されてきれいに保たれているのも、税金が使われているからできることなのだ。こういった制度がなければ、僕たちの生活は成り立たないだろう。

外国には日本より税率が高い国もあれば、低い国もある。税金の安い国は、個人が払う税額は少ないが、全額個人の負担となっているサービスも多く、お金の余裕のある人でなければ受けられないサービスも多い。一方、税金の高い国では、質の良いサービスが低額で受けられる代わりに、個人が払う税額は高くなっている。どちらが良いのかは簡単に決められないが、僕は妹の病気のこと、困ったときに助けてくれる制度があって本当に良かったと思っている。

税金にはたくさんの種類があるが、僕が払っている税金は消費税くらいだ。商品を買う時には、税金の分だけ金額が上乗せになるので損をしているような気分になってしまっていたが、僕が払っている税金以上に僕は税金で助けられているのだとわかった。僕ができることは、今、自分が負担することができる消費税を払うこと、そして大人になって働くようになったら、他の税金もきちんと納めることだと思う。僕が払った税金が少しでも誰かの役に立つのなら払いたいし、大人になって納めた税金で、妹のように病気を治そうとがんばっている人が助かってくれたら嬉しい。僕は税金を納めることへの意識を見直したいと思った。

閉じてから開かれるもの

宇美町立宇美南中学校 3年 南里 美穂

一六九四二円。

これは、私が中学校三年間で無償配布された全教科書、二十九冊の金額だ。

四月に教科書が配られるたびに、裏表紙に書かれている、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています」という一文を私はかみ締めてきた。私が毎日使っている教科書は、税金のおかげで無償配布されているのだ。他にも、私が通う公立中学校の授業料が無償であったり、よく利用する公立の体育館が安い利用料で借りることができるのも、税金のおかげなのだという事を学んだ。

ではどうして、私達の教育に税金が使われるのだろうか。私達がたくさん学んで大人になり、しっかり働いて税金を納めることを期待している、というのが理由の一つだろう。

しかし、それだけだろうか？

そう思うようになったのは、社会の時間に、富国を目指すために学制が始まったことを習った時だ。富国を目指すなら、学校に行くより働く方が即効性があるのではないか、と思った。そのことを先生に尋ねてみると、

「長い目でみると、学ぶことが国を豊かにする。学ぶことは何より優先されるのです。」

とおっしゃった。

そこで、学ぶことが、どのようにして国を豊かにするのかを考えてみた。

明治維新以降、諸外国の文化などを学ぶことで日本は豊かになったという歴史を学習した時、私は、職場体験のことを思い出した。

私が体験した職場は、家具をデザインして製造する会社だ。家具を製造する際、たくさんの端材が出るので、これを何かに利用できないかと研究した結果、端材を肥料にして無農薬野菜を作るという結論にたどり着いたそうだ。このアイデアを思いついた時、社長は高校時代の友人に相談したそうだ。そして現在、実現しているという。

なんとなく存在する無駄なものが、美味しい野菜に生まれ変わり、地球を救うサステナブルな未来を創り出している。これは、それぞれ知識や技術を持った人と人とが繋がった結晶であると思う。人が集まればアイデアは何倍にもなり、その力は計り知れないものになるだろう。その上、アイデアを積み重ねてきた人々の心には大きな感動が生まれているはずだ。こんなに豊かなことは、他にないのではないかと私は考える。

これから私が学んだり身につけたりすることが小さいことだとしても、仲間と共有することで大きいものを生み出し、そうすることで人生を豊かなものにしてほしい、と大人は期待してくれているのではないだろうか。このことこそが、大人が私達にたくさんの税金をかけてでも学ばせてくれる理由だと思う。

これからも教科書を閉じるたびに、私は胸に刻むだろう。ここから、私達の未来は開かれる、と。

私は祖父が大好きだ。祖父は医者として人生を全うし、三年前に癌で亡くなった。よく仕事の合間を縫って遊びに連れて行ってくれたことを覚えている。そんな祖父は仕事に対して人一倍真面目だったという。

祖父は入院施設のある病院を開業していた。そのため夜中に寝ている時でも病院から呼び出しがあるとすぐに入院患者のもとへ駆けつけたそうだ。そんな仕事熱心な祖父は高額納税者として新聞に載ったことがあり、収入の半分近くを所得税として納めていた。それを知って尊敬すると同時にそんなに税金をとられるのだ、という感情にもなった。その時の私は税金を「とられる」という認識だった。

祖父が他界して祖母とよく祖父の話をするようになった。ある日祖母が、「おじいちゃんをよく『世のため人のために自分は働いている。』と言っていたのよ。世のため、とは国のために税金を納めること。人のため、とは患者さんを助けること。それがおじいちゃんの口癖だったのよ。」

と言った。今まで私は税金を「とられる」としか思っていなかった。しかし祖父は税金を国のために「納める」と思っていたのだ。少しの言葉の違いかもしれない。けれど私と祖父の税への考え方は大きな違いがあると感じた。正直私は税金を不満に思ったことがあるが、祖父が不満を口に出したことは一度もなかったそうだ。そして祖母が続けて言った。

「おじいちゃんが初めて年金を貰った時、ありがたいな、と何度も言って嬉しそうにしていたのよ。」

それを聞いてハッとした。今まで私は税金を納めることだけに目がいて、税金による恩恵が見えなくなっていた。そうやって祖父が年金を貰えたのも国のみんなが責任を持って税金を納めてくれたおかげだ。それにその年金は祖父が今まで納めてきた納金が循環して戻ってきたのかもしれない。税金を納めることは国の経済を循環させて自分や未来を守ることに繋がる、今まで私は税金によって賄われている物といえば教科書くらいしか思いつかなかった。だが学校の机や黒板、道路や水道の整備など、あって当たり前のように使っていたものにも税金が使われている。私には税による恩恵の知識が足りていないと思ったし、いとも簡単にそれらを受け取っていると気づいた。税金に対する不満を耳にすることは少なくない。人はマイナスばかりに目が行きがちで隠れたプラスに気づかないことが多い。だからこそ、その人達も少し周りを見渡すだけで税による恩恵がそこら中に溢れていることに気がつき、当たり前にある環境の有難みを感じ、感謝の姿勢を持てるはずだ。

今、私は税によって支えられることの方が多い。大人になったら今度は私が支える番だ。税の恩恵を受けていることを忘れず、祖父のように世のため人のために責任と誇りを持って、税金を納める義務を果たしていきたい。

僕を助けてくれた税金

唐津市立巖木中学校1年 田久保 翔夢

僕は十二年間ずっと税金のおかげで病院に通えています。僕は生まれて十ヶ月で全身火傷を負いました。その時、僕は救急車で大学病院に緊急搬送され沢山の管に繋がれ、生死をさまよい二ヶ月入院し、何回も何回も手術を受けました。今でも一年に一回は必ず手術をしたり、検査や治療をして、その度に、高額療養費制度や子ども医療費助成制度を受けています。

僕の十二年間は、たくさんの医療によって助けられてきました。これまで、僕は受診することを当たり前と思い、治療費や薬代のことを考えたことがなく、何も思わず過ごしてきました。今回、これらの医療制度の財源の中心となるのは税金であることを知りました。

母は病院に行くとき必ず診療明細書をもらいこういいます。三割負担で助かると。そして医療費受給資格証のおかげで薬代合わせて千円で助かると。母がなぜ診療明細書を必ずもらうのか不思議に思っていました。母は、全額自己負担だとこれほどお金がかかると言う事を頭に入れる為だと知りました。

母は病院に行く度に、受付の人、看護師さん、お医者さん、駐車場の警備員さんにお礼をいいます。僕はそれを十二年間ずっと見てきました。母は全ての人に感謝しているという事を。母は僕に何も言わないけれど今の僕にはこう聞こえます。今、生きれている事は当たり前じゃないと言う事を。税金がなければ、高額なお金がかかり治療できずにこの世にいなかったかもしれないという事を。

僕は五人兄弟です。そのうち、四人は大学病院に通っています。四人それぞれ検査、治療、薬が必要です。もし、税金がなければと考えた時、そのお金はきっと払えないと思いました。僕が入院した時、全額自己負担だと何十万とかかるのを知ったからです。税金がなければ四人も一回の検査、治療、薬代に何万円とかかる事になります。

僕達の暮らしで、税金を頼っていない人はいないのだと思いました。この税について考えたとき、人それぞれ思う事はあるのだろうと思います、税に対する考えが少ない人はあまり良い捉え方はしないのかもしれないけど、税金について考える事、それは大人になった時きっと役に立つと思います。みんなが互いに支え合い、共によりよい社会を作っていくため、税金は大切だと知りました。僕は税金に対する考えをもっと深めていきたいと思っています。

僕達の日常の中で、支払っている税金、それは病気と闘っている人を救う事であり、困っている人の手足であり、税金を支払っている僕達一人一人が真剣に税と向き合っていかなければと感じました。僕を助けてくれてありがとうございます。これからも皆さんの助けが必要です。沢山のの人に感謝をして日々生きていきます。

災害と税金

諫早市立明峰中学校3年 松本 侑甫

令和元年、消費税率が8%から10%に引き上げられ、連日ニュースでその話題が絶えず放送され出した頃、僕は初めて税金に対する関心を持った。ただ、ニュースを見ていくと、「増税反対」と大きな旗を持ってデモに参加する大勢の人々や、反対意見の人々による署名活動等が相次いで行われており、自分の中で、税金に対するマイナスイメージが生まれていた。

それから六年後の今年、能登半島を大きな地震が襲った。家が崩壊し、火災や津波から小さな子供やお年寄まで多くの人々が避難し、涙する様子を見て、とても胸が痛くなった。「この復興に、どれだけのお金と時間がかかるのだろうか」と考えていると、ふとそのお金がどこから出ているのか気になった。調べてみると、「救助活動や捜索活動」「災害時の緊急情報」、「災害が起きたときの復旧作業」その他様々な復興活動に多くの税金が使われていることがわかった。これを知り、僕はハッとした。もし災害が起きたとき、税金が無かったらどのような状況になっていただろう。避難は遅れ、もっと多くの被害者が出ていただろうし、復旧作業ができないとなると、被災者の安全の確保やもとの生活に戻ることも難しくなるだろう。このとき僕は、税金は、人々の生活の豊かさを守り、安心して暮らすための保険だと思った。税金を払うことは、人間同士が助け合い、協力し合いながら生活すること、そのように思えた。今まで、税金に対して感じていた「払わなければいけない余計なお金」という発想は、いつか自分が助けの必要なときに「巡り巡って自分のためになるもの」というプラスの発想に変わっていた。

日本は災害大国であり、いつその危険が自分の身に降りかかってくるかわからない。備えだけでは足りないものも多くある。だからこそ、税金を払うことで、被災地や被災者に貢献しなければならない。実際に税金に助けられた被災者も多くいる。自分たちが納めた税金が命綱となって、一人でも多くの人の命が救われるのなら、こんなに素敵なことはないと思った。

そんな能登半島地震だが、今回は復旧が遅れているという。その理由は地理的な問題や経済面の問題など様々だ。それでも、地元の人々や災害派遣の人々たちによって少しずつ復旧されてきている。そんなときに大切なのが税金である。税金を使って一日でも早く便利な生活が送れるようになってほしい。それを左右するのは自分たち一人一人の強い意志である。被災地のため、国のため、そして自分の未来のために納税という義務をしっかりと果たしていかなければいけないと思った。

納税での応援と恩返し

熊本県立宇土中学校1年 武末 華那

私には、高校二年生の姉がいる。姉の将来の夢は、海外で働くことだ。そんな姉は今年の夏、「グローバルジュニアドリーム事業」という台湾研修に参加した。何度も県庁での事前研修をして、準備に取り組んでいた。三泊四日の本研修を終えて帰って来た姉が両親と話していた。それは、今回の研修は税金で賄われていたということだ。他にも海外を目指す学生に向けたプログラムがあるようで、姉はいくつかのプログラムに参加していた。私はそのことを聞き、税によって姉の夢を応援してもらっているような気持ちになり、うれしくなった。

これまで私は「税金」と聞くと、消費税や所得税、住民税などの、「払う」税というネガティブなイメージしかなかった。しかし、今回姉の話聞いて、私たち学生に向けた、「使う」税が身近にあることを知り、とても驚いた。その他にも調べてみると、私達の教育に使われている税がたくさんあった。例えば、学校で配られているパソコンや教科書、机、椅子、校舎などと、ほとんどの物に税金が使われていた。私たちは今、当たり前前に学校へ行き、授業を受けたりしているけど、それらのほとんどが、税金と関わっていた。姉はその中で夢を見つけ、夢に向かって頑張っている。そこにも税が関わっていて、これから私達が見つけていく夢は、きっと税によって応援してもらえることがたくさんある。そう考えると私達にとって、税というものは、「夢の応援団」みたいなものだと感じた。

今私は、夢を見つけている途中で、これから経験するたくさんの中には、税金が関わってくる。それは、先生や家族が応援してくれることと同じように思うと心強い。学校の備品も大切に扱おうと思うし、一緒に頑張ろうという気持ちになれる。

これまで、私はたくさんで場面で税金に助けられてきた。そしてこれからも助けられると思う。そのたびに私は感謝を忘れず、自分なりに前に進んでいきたい。そして、私が大人になった時、これまでの恩返し、またこれから未来に進もうとしている子供達への応援の気持ちを込めて、納税したいと思う。

税金を納める本当の意味

学校法人岩田学園岩田中学校 3年 鷲野 優

税金という言葉にはマイナスのイメージだけを持っていた。しかし、祖父がそれを笑った。それどころか「税金を納めることは幸せなことだよ」とも言った。

「支払わなければならないもの」「義務」「取られる」「高い」などの言葉を連想する税金。自宅を建てて支払いが終わっているけど、毎年土地や建物に対する「固定資産税」を納めていると母から聞いた時は驚いたし、幼い頃、友達と遠足のお菓子を近くのスーパーに買いに行った時は、決められた金額内にするために消費税がととても邪魔に思えた。

私や家族が支払う様々な税金は、私たちの毎日のために使われていることは理解しているが、それでも出来れば支払いたくないと思ってしまう。

私の家族は会社を経営している。会社に行った時、祖父から「表敬状」と書かれた賞状を見せてもらった。祖父の説明では、企業が長年正しく税金を申告し納税したと認められた場合にいただけるものらしい。とても厳しい審査を通り、認められる企業数は全国でもかなり少なく、大変名誉あるものだと教えてくれた。

「納税させていただくということは、仕事をして、その業績に応じた金額を納めるということ。その業績を認められたということは、会社や社員、そして自分自身の頑張りを認めてもらったことになる。有難いことだよ。」と話してくれた。仕方なく納税するのではなく納税させていただくという考えに驚いた。また、そのことで自分を認めてもらえたのだと感謝さえしていると聞き、そんな考えもあるのかと思った。

私も将来、仕事をするようになった時にそのように思えるだろうか。社会人になってすぐは給料も少ないだろうし、買いたい物が沢山あり、引かれている税金の金額に落胆するだろう。でもいつの日か、税金を納めることができるのは、自分が仕事を頑張って給料をいただいているからだと考える、そんな大人になりたいと思う。自分で家を建てたなら、固定資産税を納めていることで必死に頑張って持ち家を手にした自分を認められた気分になれるかもしれないと思う。買い物をして消費税を支払えば、毎日の買い物で社会のための税金を納めている自分を誇らしく思えるかもしれない。祖父の話は、納税に対する私の考え方を変えるきっかけになった。

いつか、私が消費税以外の税金を納めるようになった時、税金という言葉から連想するものはマイナスなものばかりでは無くなっていると期待する。まだ随分と先ではあるが、少し将来が楽しみになった。

私は弟が好きではない。落ち着きがなく、自分勝手に行動する。私がたしなめても、聞く耳を持たないどころか暴言を吐いてくる。母や父は「そういう子なの。」「広い心で『はいはい』と言っておきなさい。」と言われるが、暴言を吐かれ、癩癩を起こされ、私の時間も気づかひも踏みにじられるのに、「広い心」を持てる訳がない。しかし、この作文を書くにあたって税について考えたとき、母が買った沢山の本が目に入った。弟の発達障害に関する本だ。授業で福祉サービスについて学んだことを思い出した。もしかしたら弟も何か国や県から支援を受けているのではないかと思い、調べてみることにした。

厚生労働省のホームページによると、国や自治体は福祉サービスの一環として発達障害の支援も行っているらしい。具体的には、障害に対する早期発見、自立支援、発達センターなどの施設へのケアマネージャーの巡回支援などがあつた。私の想像より多くの制度や取り組みがあつたが、特に「受給者証」というものが印象に残つた。受給者証を取得すれば放課後デイサービスを利用する際に利用料金の負担額を減額できるようだ。親に尋ねると、弟はこの制度で様々なサービスを利用しているらしい。

例えば、専門の先生に定期的に診てもらふ機会があることで親の心配ごとを相談できたり、弟の今後を考えるきっかけになったりする。放課後デイサービスを利用することで体の動かし方が上手になったり達成感を味わったりできる。また、学校に特別支援教室があることで自分のペースで勉強でき、人とのつき合い方が学べる。確かに、考えてみれば弟は放課後デイサービスに通うようになってから学校の友達や私と喧嘩やトラブルになることが減つたような気がする。

もし、母や父がこのような制度や施設を知らなかったら、そもそもこの仕組みがなかったら、今よりも福祉サービスを利用しづらく、弟は私にとつてもっと敬遠する存在だったかもしれない。でも、福祉制度を知つた私は少しだけ弟の成長に気づけた。ほんの少し弟を見ることができた。

弟の特性は私にとって嫌なもので、避けてきたものだった。しかし、どんなに目を背けても弟の特性はなくなるならない。だから、弟を少しずつでも理解して、もっと「広い心」を持てるようになりたい。また、気づいていないだけで身の回りには多くの制度があるのだと思う。私は、この作文を通して身近な税の使い道に気づき、見方が変わった。税は納めるだけじゃない、生きづらい人たちを支える大切なもので、ほんの少し自分や他人の手助けができるものなのだ。私が弟をほんの少し受け入れることができたように、誰かと誰かを結ぶことができるものなのだ。

税を考える

稚内市立稚内南中学校 3年 丸山 古都子

私は税について多くのことを知らない。物を買ったときは消費税10%を意識するが、それ以外の税はわからないことが多い。

社会の授業で税について触れていたことを思い出し、改めて税について調べてみた。

江戸時代までは、お米で税を納めていた。他にも租庸調といって米以外にも布や特産品で納めたり、労働を提供する方法で納めたりしていた。明治時代に地租改正が行われ、お金で税を納めるようになった。税の歴史は今から千三百年も前の飛鳥時代から始まっているのに、現在のようにお金で納税するようになったのはほんの百五十年ほど前なのだ。

お金での納税以前は気候変動などで作物の収穫にムラがあったり、徴収が厳しい時代は反乱や暴動、夜逃げすることもあったりし、安定的な税収が難しい時代もあった。お金で納税するようになってからは、政府の財源は安定するようになったそうだ。

税が米や布、特産品などで納められていた時代は、それらを納税場所まで運ぶ手間は大変だったと想像する。また現金のみの取り扱いの時代も間違いなく現金を用意しなければならず負担が大きかったのではないかと思う。

私たちは納税する立場から税について思いを巡らせるが、ふと徴収する側の立場で考えると、納税と同じくらい大きな負担があったのではないかと思う。

米や布、特産品での納税では正しく計測する作業があるし、保管する場所を確保しなければならない。現金の場合でも金額は一円たりとも間違えられなく、相当神経を使う作業だと想像する。

我が家は事業を営んでいるので、毎年確定申告を行っている。日々帳簿を付けているし、月末には会計事務所の方と打ち合わせをしている。毎年確定申告の時期は領収書や関連資料の整理などてんやわんやだ。納税する側がこんな調子なのに、徴収する側は時期が重なることもあり、もっと大変だろうと想像する。

ここ数年はイータックスといってインターネットで申告することができ、納税もマイナンバーカードを利用してパソコン上で完結できるそうだ。税の納め方や徴収の仕方はどんどん便利になって進化しているみたいだ。

実は昨年度の申告の際、両親は数字の入力ミスをしていたようで、本来より多く税を納めることになっていたが、税務署の職員が気づき連絡してくれたそう。その際に修正方法も丁寧に教えてくれ大変感謝していた。税務署の職員はしっかりと申告書を確認しているのだと改めて感じたそうだ。

税について考えるとき、納税について強く意識するが、徴収する側への意識は低い。給与所得者は源泉徴収制度や年末調整制度など職場で完結することが多く、税への関心や税務署とのかかわりは低いらしい。私は税についてもっと関心を持ちたい。そして更にその使われ方にも意識を広げていきたいと思った。

「僕が総理大臣になったら日本国民一人ひとりから一円ずつだけもらって君と一億円の結婚式をしよう」これはRADWINPSの「マニフェスト」という曲の歌詞である。この歌を聞いて、見ず知らずの人の幸せのためにお金を払うなんて素敵な話だと感じた。でも、税はこの素敵な話を現実に変えてくれると私は、知っている。今の私なら分かる。なぜなら、税は一。

「税」という言葉を辞書で引いてみると、「国民や企業などの必要経費などの捻出方法として負担を強制する金銭」と示されている。「負担」という言葉が何か心に引っかかり、嫌なイメージが湧いた。

そんなある日、私は急な体調不良により、救急車で運ばれた。すぐに回復し、大事には至らなかった。後にネットを見て、衝撃を受けた。税金で救急車は働いていると。嫌なイメージだった税に救われた気がした。税への関心が湧き、かつての私と今の私の税に対する考えが変わった。私も税で人を救えるか。考えたことがないことを考えた自分がいた。自分が納めた税がどんな経路でどんな形でこの国の役に立っているのか分からない。だから、自分の少ないお小遣いが消えた感じがする。けれど、救急車のサイレンが鳴り、救われる命のためになっているかもしれないと想像をふくらませてみると誇らしくなってくる。自分がヒーローになったような感覚だ。税は社会を繋いで、人々を繋いで、未来を繋ぐ。居心地の良い今も、未来を夢見る今も税のおかげで存在しているのだと思う。「マニフェスト」の歌詞に書いてあるように、日本国民がたった一円だけでも払うだけで、大好きなクラスメイトを、日本のどこかに住む人を、憧れの芸能人を幸せにできるかもしれない。そして、税への理解、税に対する考え方を改めることで、納税を「負担」と思うのではなく、「自慢」と思えるだろう。

私たち、学生は税を納めることよりも、税に支えられていることが多い気がする。税のおかげで大好きな友達と最高に楽しい中学校生活を送っている。だから、感謝を忘れずに過ごしたい。そして、私たちが親世代になったとき、税を納めて、次世代を担う子どもたちに当たり前のように楽しい学校生活を笑って過ごしてほしい。今の私と同じように。

「税」は、ただ手元から消えていってしまうお金ではない。税で未来を生み出す。

なぜなら、税は、
ありふれた日々を守る、幸せの種だから。
未来に幸福の花が咲きますように。

税とは「桶の中の水のようなもの」

水戸市立内原中学校 2年 金谷 ふうわ

私は本が好きで、よくお小遣いで本を買いますが、その際に消費税がかかります。私の一番身近な税である消費税がどのように使われているのか調べたところ、大部分が社会保障に使われている事が分かりました。私は幼少期から病気がちで、手術や入院を経験してきましたが、治療や予防接種を公費で受ける事ができたお陰で、今まで大きな病気もせず成長する事ができています。私たちの命や健康を守るために税金が使われている事を知り、感謝の気持ちとともに、将来、私も未来の子供たちが安心して医療が受けられるよう、きちんと働いて納税し、社会に貢献しなければならないと思いました。

私の母が教えてくれた言葉に「優しさは桶の中の水のようなもの」というものがあります。桶の中で水を相手の方に押し流していくと、いつしかその水は自分に戻ってきますが、自分の方にかき集めようとする、水は逃げていってしまいます。税金も同じで、一旦は自分の手から離れていくけれども、巡り巡って自分を助けてくれるものだと思うのです。

納税について「取られるばかり」と感じる事があるかもしれません。でも、それと同じくらいに関心を持って、税金が何に使われているのかを公表されている情報で調べてみると、その税金が私たちの身の回りでのどのように使われているか知る事が出来ます。例えば、政府が定額減税を行った際は多くの家庭が恩恵を受けました。しかし、救急車の利用やゴミの処理など、私たちが日常生活で当たり前のように受けている公共サービスも、その税金を財源として成り立っています。救急車を呼ぶと一回約四万五千元、家庭ゴミの焼却には国民一人当たり年間一万八千元もの税金が使われているとされており、私たちの一つ一つの行動や判断が、税金の使われ方に影響を与えている事が分かります。

これからは節税の意識を持つことが大切です。ゴミやフードロスを減らす、健康に気をつけるなど、私たちにもできる事があります。税金の無駄遣いを避け、効率的に使う為には、個人が責任を持って行動する事が求められます。そうした行動によって、自分達が納めた税金が有意義に使われていると感じられるようになるのではないのでしょうか。

私自身、今後は自分に何ができるのか、何をすべきかを考えながら成長し、将来は社会の一員として、未来の子供たちのために役立つ納税者になりたいと強く思います。税金は単なる負担ではなく、社会全体を支えるための重要な資源であり、助け合いの社会を作る基盤となります。私たちが納めた税金がどのように使われ、社会にどのような影響を与えているのかを学び、理解し、その重要性を認識する事が必要です。これからも感謝の気持ちを持ちながら、責任ある納税を心がけ、未来の社会をより良くしていく一助となる事を目指していきたいと思います。

従兄弟からのメッセージ

江東区立第三砂町中学校 3年 油原 季晋

「痛い、痛い、痛い、」

のたうち回って痛みを訴える僕の従兄弟が、青梅総合病院から東京大学病院にドクターヘリで運ばれた。その間、わずか十五分。電車を使えば二時間かかるところだ。彼は九年前に腎明細胞肉腫という、世界でも稀にみる癌で亡くなった。二歳半から闘病五年。小学校二年生の夏だった。まだ五歳だった僕は、彼に何が起きていたのか、はっきりと理解することができていなかった。

当時は「集学的治療」が進歩しておらず、この癌の五年生存率は五〇%以下だった。抗癌治療→切除→退院。再発→抗癌治療→切除→退院を繰り返した。当時、腎明細胞肉腫を四回発症して退院することができたのは、彼が世界初だったと聞いた。亡くなったのは、五回目の発症から十一ヶ月後のことだった。

彼の自宅は青梅市にあり、病状が安定したときはその家で過ごしていたが、そんな中でも容態が急変し、ドクターヘリで二度搬送されたことがあった。一刻を争う事態だったが、ヘリのお陰で一命を取り留めることができた。ドクターヘリを一度出動させると約二百万円かかるそうだ。大きな金額だ。幸い、日本では救急車と同じ扱いでドクターヘリの運用費は税金でまかなわれる。また、東京大学病院の中には、都立の特別支援学校の分室があり、勉強が好きだった従兄弟が病院にいながら授業を受けることができて本当に良かった。

叔父はいつも周りの人々はもちろん、税金を納めてくれている人達に「本当に感謝している」と話す。僕は従兄弟の亡くなった事実と、彼の闘病生活を支えてくれた税金という存在をじわじわと意識するようになった。

日本には、およそ五十種類の税があり、色々な形で税金が引かれていく。その使い道も様々で、その多くは社会保障費に充てられている事も知った。中には、使用目的が明確ではないのに、予算があるからと税金を無駄に使用している。というニュースも気になるようになってきた。今後の社会保障費は足りるのだろうか？

国民から集められた税金は、困っている人や苦しい思いをしている人の生活を支える為に、使われるお金であって欲しいと僕は思う。また、僕自身も従兄弟のように、助けられる立場になるかもしれないということも想像しながら生きていきたい。一人ひとりが税金の使用目的と、それにより助けられる人達の事に関心を持ち、積極的に情報収集をし、より多くの人々が理解を深められる環境が広がってほしいと切に願う。

今、この時にも従兄弟のように病気で苦しんでいる子供達がたくさんいる。そんな子供達や、生活に困っている人達の未来を明るくし、助け合える環境を作るためにも、快く税金を納めよう。そう思えるような大人になりたい。

私が普段、税を意識する機会があるとすれば、消費税を払ってものを買うときくらいである。これまで私は税について、その商品価格にプラスして払わなければならないため、なんだか損した気持ちになっていた。「払わなくていいなら払いたくない」。それが本音だった。

しかし、今回この税の作文を書くにあたって、税について初めて詳しく調べてみた。すると、様々な税が世の中に存在することがわかった。消費税や所得税、酒税や自動車税などだ。今まで知らなかった税についても知り、いろいろな場面で税を支払っていることに驚いた。それでは、これらの税はどんなものなのか、私の生活に置き換えて考えてみた。

私の「お小遣い」を社会人でいう「収入」とする。お小遣いは月千円だったとしても、仮に二十パーセントの所得税を引かれると、私の手元には八百円しか残らない。けれど、納めた二百円は、幅広く私達の生活に役立てられる。例えば、学校の机や椅子、教科書。病院の医療費など。現在の私の生活と切っても切り離せないものばかりだ。

「酒税」を「ジュース税」としたら。コンビニや自販機でジュースを買うたびに、消費税とはまた別に税を払う必要があり、購入者の負担が増える。しかし、それでジュースを買うことが減れば、人々の健康的な生活に繋がる。また、もし買われる量が減らなかったとしても、その集まったお金は社会保障費などとしても使われる。例えば、年金や福祉サービスの費用などだ。お年寄りも、それ以外の人も、安心して暮らすための大切なことである。

「自動車税」を「自転車税」に置き換えてみたら。私は自転車通学生なので、いくらか税を納めなければならなくなる。しかし、その納めた分のお金は、道路の整備や信号、カーブミラーの設置費用に使われる。そうすると、交通事故防止に繋がる。

このように、私達の生活は税に支えられている。逆に、税を納める制度がなかったら、世の中は大変なことになる。医療機関の整備が十分にされず、困ったときに頼れなくなるかもしれない。道路や橋が壊れても、修理できずそのまま放置されるかもしれない。犯罪が起きても取り締まる警察官がおらず、安心して暮らせなくなるかもしれない。そのような事態を防ぐために、税はある。税は、私達の生活や未来を明るくするために、そして国を守るためにある。これから私は、自分が税の恩恵を受けていることを忘れず、正しく税と向き合っていきたいと思う。

「税金とは」

阿久比町立阿久比中学校 3年 伊藤 玲奈

今年七月に私は、一回目の子宮頸がんの予防接種をしました。子宮頸がんワクチンは、令和六年八月現在、定期接種の対象となっているため、公費で接種することが可能です。「公費」とはいいかえれば、国民から納められた「税金」です。対象となる年齢は、小学六年生から高校一年生です。加えてキャッチアップ接種対象者として、令和七年三月まで十七歳から二十七歳になる人たちも公費で受けられます。公費には自己負担はありません。

公的補助がなくなったときの値段を調べてみました。二価・四価ワクチンは、三回接種で四万円から五万円、九価ワクチンは三回接種で、なんと八万円から十万円かかるそうです。きっと高いんだろうな、とは思っていましたが、こんなに一人当たりのワクチンにお金がかかるものというのには、驚きました。

自分は、今までにどの位予防接種を受けてきたのか気になり、母子手帳をみてみました。BCG接種、麻しん、風疹接種、日本脳炎接種、インフルエンザ接種など、いろんな種類の予防接種を受けていました。

日本の予防接種には「定期接種」と「任意接種」があります。定期接種は公費で受けられますが、任意接種は自己負担になります。自分の母子手帳に記載されていた中で、任意接種のため自己負担だったのは、おたふくかぜとインフルエンザワクチンのみでした。つまり、ほとんどの予防接種は、税金からなる公費からまかなわれていました。少子化が進んできて、子どもの人数が減ってきているとはいえ、こうやってたくさん予防接種を自己負担なく受けさせてもらえることは、とてもありがたいことだと思います。

もし、予防接種が全て自己負担だったとしたら、こんなにも多くの予防接種は金銭的に受けられない人達がでてくるはずですよ。そうなれば、予防できる病気にもかかわらず、その病気にかかる確率もあがり、医療費をおしあげることにもなります。私たちの健康を守ってくれる予防接種も、納税者の皆さんが汗水垂らして納めてくれた税金を使っているのだ、ということも分かりました。

祖父の亡くなったお兄さんが言っていた言葉をふと思い出しました。その人は会社を経営していて、毎年多額の税金を納めていました。以前、法事で会った時に、

「おじさん、一生懸命働いた分を国とかにそんなにたくさん取られて損した気持ちにならないの。」

と、聞いてみたことがありました。

「税金は取られるものではないんだよ。一旦預けておくんだよ。すると、またいろんな形で自分の所に戻ってくるのだから、損したと思ったことはないよ。」と教えてくれました。

素敵な言葉だな、おじさんの言葉が、今、すごく納得できたような気がしています。私も納税する年齢になったら、おじさんのような気持ちで、積極的に納税しようと思います。

私が、税について興味をもったきっかけは、「税の作文」について宿題が出たことです。今まで、税については考えたことがありませんでした。が、周りには、税について考えている人もいます。「消費税減ったらいいのにな〜」や「所得税は高すぎる」などと愚痴を言っています。

また、私はよくニュースで増税という言葉を目にします。

そこで、私は税について考えてみました。世界には、税がない国があります。例えば、ナウル共和国です。ナウル共和国は、リン鉱石の採掘によって栄えているため、税金がありません。また、税金が安い国もあります。例えば、アラブ首長国連邦やドバイは、石油や鉄鉱資源が豊富なため、税金が安くなっています。

しかし、日本は税金が高いです。なぜ、日本は、税金が高いのかを考えてみました。アラブ首長国連邦やドバイは、資源があるため、税金が安くなっていますが、日本は、資源がないため、税金が高いのです。

その、税金は何に使われているのでしょうか。もし、税金がなかったら、警察や消防も機能しません。道路や水道のインフラも整備できず、生活に支障があります。私に一番身近な教育にも多くの税金が使われています。

私は、不登校です。現在、伊丹市立教育支援センターやまびこに通っています。ここで私は大きく成長することができました。勉強面では、苦手だった数学も、努力と指導員の先生に教えていただいたおかげで、平均点以上とれるようになりました。なにより、精神的に強くなりました。前は、言われてやっとこさ行動していました。今は、主体的に行動が出来るようになりました。例えば、やまびこでは、畑にじゃがいもやきゅうりなどを作っていますが、土作りや肥料まきなどをするときには、先生が指示する前に、自分で考えて行動が出来るようになりました。このように私を成長させてくれた「やまびこ」を運営するには、何が必要でしょうか。まず、建物、机や椅子、教材などが必要です。昼休みなどを楽しく過ごすための遊び道具もあります。光熱水道費もいります。なにより大切なのは勉強や生活の面倒を見てくださる指導員の方々です。これは、全て税金でまかなわれています。

税金が重すぎるとか多いなどと言う人もいますが、税金は必要だと思います。自分も、大人になったら、税金をしっかりと払います。その税金を、国民や市民が過ごしやすい環境を作るために、有効に使ってほしいです。

未来の自分への「貢献」

周防大島町立大島中学校 3年 松永 瑞葵

「二百五十七円。」

店員さんがレジに打った、この数字を見て、私は少し損した気持ちになる。消費税の十九円を抜いた「二百三十八円」を支払う気だったからだ。ニュースでアナウンサーが

「税金について…。」

という言葉を知ったり、「税」の文字を見たりすると、私は自然と「負担」といったマイナスなイメージを抱いてしまう。その理由の一つは、レジ前での損した気持ちの積み重ねだと思う。もう一つの理由として、歴史の授業の税金へのイメージだ。昔の日本では、国民にとっての税金は、厳しい内容の納税、苦しい労働という日々の暮らしを苦しめるものだったそう。あまりの苦しさから、税から逃れるために逃亡する人もいたほどの辛さだったということがとても印象に残っている。

そんな私の中の税金のイメージを変えたのは、自分で「所得税」について調べた時だ。きっかけは、母と姉の会話の内容だった。私の姉は大学生で、アルバイトをしている。そんな中、母が姉に、

「毎月いくらくらい？所得税は？」

と言っているのを聞いて、私は所得税が何なのか気になった。調べていくうちに、「所得税」とは、個人の所得にかかる税金のことをいい、会社で給料をもらっている人など利益を得ている人にかかるもの、ただし年間収入が、百三万円以下の場合にはかからないことを知った。また、所得税には、国民の間の所得格差を調整する役割があることも知った。その時、私が払った税金にはその後や税がある目的、理由があるというあたり前だが、見逃していた部分に気付いた。そこに視点を当ててもう一度、調べてみると、払う税だけではなく、税金の使いみちである、教科書や医療、道路や学校など、私がたくさん関わっているものの存在を初めて知った。改めて考えてみると、身近なところにたくさんの税がいて、誰かのためになっている。税金の意味や理由や目的に焦点をあてることで、払うのが嫌で損した気持ちになる税金ではなく、私達国民のため、会ったことのない誰かが笑顔になれる税金だと考える機会となった。

税について調べることで、税金のイメージが大きく変わった。税金を払うことで、自分ではない誰かのためになるかもしれない。そう考えると、納税は募金とよく似ていると思う。「負担」ではなく「貢献」、納税は私達国民の未来のため。これからは明るい気持ちで税と向き合っていこうと思う。

「厄介」で片付けさせない税金のこと

鳴門市第一中学校3年 西岡 葵唯

「生きているだけでお金がかかるなんて、厄介だなあ。」

私は、これまで税金について、このような印象しか持っていなかった。消費税、住民税、所得税…私たちが生活するうえで、様々なことがらに対してなにかと干渉してくる税金。税金についての知識がなかった以前の自分には、面倒なもの、という考えしか出てこなかった。

私は小さい頃、突然の肺炎で病院に搬送されたことがある。頭がぼんやりとして、心細くてたまらなかったときに、救急車の中で、励ましながら、すぐに処置をしてくれてとても安心した覚えがある。数日ばかりの入院だったものの、そのときは、たくさんのお金を払わなければいけないのかもしれないと怖がっていた。しかし、退院後もそのような請求をされることはなく、とても不思議だった。そういえば、と思い出して、当事りのことについて尋ねると、母は「ああ、それは税金のおかげなんだよ」と話してくれた。

それにとっても驚いた私は、インターネットや資料から、医療費と税金の関係について調べてみた。すると、二つの事が分かった。一つ目は、あの日、処置してもらったときにお金がほとんどかからなかったのは、税金によって、医療費の負担がされていたからだということ。もう一つは、これが当たり前ではないことだ。他国との医療費の負担額を比べた資料でも、日本の自己負担額が少ないことは一目瞭然であった。また、関連記事から、アメリカでは、救急車を一回呼ぶのに何万円もかかる、ということも知った。もし日本に、税金で医療費の負担をしてくれるという制度がなければ、いま生きることすらままならない状態になっていたのかもしれない。

小さなきっかけから、税金について少しふれてみると、想像がつかないくらいたくさんしたこと、私たちの身の回りのあらゆる場面で税金が役立てられていることが分かった。例えば、今鳴門市が行っている「中学生の英語検定受験の無償化」もその一つに含まれる。これにも、税金から集められた市の予算から使われている。私が英語検定を受けようと思ったのは、この取り組みがきっかけである。

納税は国民の義務である。税金は、私たちが心地よい生活を送るために必要なものに、あてられているお金だ。「生きているだけでお金がかかる」のではなく、生きるためにこのお金が納められなければいけないのだ。「納税は面倒だ」と決めつけて、関心を持たないのではいけない。何に役立てられているのか、そう考えを巡らせることが大切だ。

誰かが納めている税金が、あなたを助けている。また、あなたが納めている税金が、誰かを助けている。私も、これからは、よりよい社会をつくる一員として、その自覚を持って、きちんと税金を納めていきたいと思う。

私の責任と税

学校法人長崎南山学園長崎南山中学校 2年 深堀 颯太

広い世界を見てみたい。中学に入学しその思いは強くなりました。その夢を叶えるためには十分な知識とそれを得るための学びが必要です。

私の通う長崎南山中学校は長崎市の北部にあり、十七世紀から十九世紀における潜伏キリシタンの中心地で、現代においては、一九四五年八月九日長崎原爆で甚大な被害を受けた中心地として知られています。周囲には世界遺産の浦上天主堂や戦争被害を伝える慰霊碑や資料館があり、深い信仰と悲惨な歴史が共存しています。この特別な土地で私は親元を離れ神学院生として神学を学びながら中学校生活を送っているのです。

ここ数年テレビはロシアによるウクライナへの軍事侵攻のニュースを伝えます。犠牲者である子どもたちは教育以前に、安心して生活できる環境すらありません。このように世界各国で教育が受けられず、将来の選択肢すらない子どもたちがたくさんいるのです。それは遠い国のだれかの話なのかというひとつの疑問が生まれました。しかし、そうではないのです。決して他人事ではないのです。私たちがこの日本で安心して、将来に希望と選択肢を持ち平和に生活できるのは国が防衛し安全な生活を守ってくれているからです。そして、その安心のもと勉強できる環境も未来をサポートしてくれる制度も整っています。その資源は税金です。しかし、私はあまりにも整った環境の中で、その価値に気づけずにいました。

部活の終わりに勢いよく蛇口をひねり顔を洗った水の気持ち良さ、何度も通った図書館の充実した本の数。安全に通学できる整った通学路。私が積み重ねている経験のひとつひとつに税金が深く関わっているのです。

では、日本という恵まれた環境に生まれた私は「これからどう生きていくべきなのか。」「私の責任とは何か」を考えたとき、私には学ぶ責任があるという答えにたどりつきました。そして今、私は得た知識や力を基に思考力と発想力を培って、社会のためになることを考え、それを実現するために行動する勇気を持つための大切な期間を税金によって与えてもらっているのだと思います。

私は将来、広い世界を見て沢山のひとと触れあって広い視野を持ちたいと思います。そして、自分の知恵や時間を他の人の為に使える人になりたいです。私自身が人として成長できるように、また、安心して将来を描ける環境を作り出してくれる税金に感謝して日々を過ごしたいと思います。そして、これからも税に関心を持ち、学びを深め、国民の一人としてこの国の将来を担っていく大人になります。

今是非～税への考えが変わった日～

宮崎市立大淀中学校 1年 錦織 慧嗣

8月8日に日向灘でM7.1の地震が起きた時、私は税の大切さを身をもって学んだ。

中学校で、租税教室があった。税金で、公共施設を作ったり、ごみ収集や教育、警察、医療といった様々な公的サービスを提供していることを知った。税の使い方は理解できたつもりでいた。

しかし、テレビなどを見ていると、消費税や増税の話ばかりで、税に対して良いイメージを私はもてなかった。「税金が高い」とよく耳にしていたので、単純に税をなくせば良いのにと思うこともあった。

あの日、夏休みの課題で出た「税の作文」に私は、頭を抱えていたまさにその時、あの地震がやってきた。大きな揺れの後、すぐ家族で近くの小学校へと避難した。

学校に着くとたくさんの方が集まっていたが、あまりに急な出来事なのと、夏休みの学校には、先生も市役所に人もいなかった。津波注意報も出ていたため、不安そうな人たちがやって来て、あたりはざわついていた。そんな時、小学校の教頭先生が学校に駆け込んで来て、集まった人たちにすぐ指示を出してくれた。集まった人たちは、教頭先生が来てくれて、安心した表情をした。私自身も、サイレンが鳴る中だったので、周りの人たちと同じ気持ちだった。少し遅れてきた老夫婦が近所のマンションに逃げようと思ったが、入口に鍵がかかっている入れなかったため、小学校に逃げてきたと話されていた「小学校があつて本当に良かった。」と話されているのを聞いて、学校の先生や市の職員の方など人や公共施設のあることの大切さを実感した。

少し遅れて市役所の方もやって来た。道路が大渋滞で、小学校まで、いつも以上に時間がかかってしまったとのことだった。市役所の方も、家族がいるはずなのに、市民のために、小学校まで向かって来てくれた。私達家族は、津波が学校までに来ないことが分かってから家に帰宅したが、夜遅くまで小学校は避難所として開設されていた。

家に帰って来ると、私は書きかけの作文に取り組んだ。そして、数時間前よりも強く「税金は大切なもの」と考えるようになっていた。幸いにして、私の周りには大きな被害がなかったこの地震で、「もしも」をたくさん考えたからだ。もしも、道路がもろかったら？信号が動かなかつたら？先生や市役所の方が来てくれなかつたら？学校がなかつたら？サイレンが鳴らなかつたら？税金があるから街が作られ、街が動いていると感じた。病気にならないと健康の大切さがわからないように、地震という命に関わる怖い経験をすることで、税によってこの街が作られていることが分かった。そして、税のおかげで私達の生活は豊かになっていて、税金は大切な存在なんだということと税金に対しての本当の意味での理解が深まった。

私の義務

沖縄市立山内中学校3年 川根 紗貴

これまでの人生の中で税金の必要性について考えたことはなかった。むしろ、義務として税金を納めないといけないことに煩わしさなどの負の感情を抱いていた。だが、この作文を書くにあたって日々の暮らしを振り返ってみたところ、私が健康で、幸せに生きられているのは税金に支えられているから、ということに気づいた。

私は生まれた時からアトピー性皮膚炎の影響で普通の人より肌が弱く、今でも月に一度通院している。その度にたくさんの塗り薬や飲み薬を処方してもらっている。

体に数種類の薬を塗り、苦い薬を飲み続ける日々に嫌気が差し、処方してもらった薬を見るだけで憂うつになっていた時、ふと、通院の日の一日が頭に浮かんだ。受付を済ませ、先生から診断を受け、薬局で薬を貰い帰る。何年間も繰り返してきたルーティーンだが、思い返してみると疑問に思うことがあった。

それは、母が受付の際にピンク色の小さな紙を渡していたこと、お会計をしていなかったことだ。医療機関で保険証等を提示することは知っているが、ピンク色の紙については聞いたことがなかった。また、エコバッグがいっぱいになるほどの薬を無料で貰えるはずがないと思った。そこで私は、ピンク色の紙から読み取れた「沖縄市」「医療費」という文字を頼りに調べてみることにした。

調べた結果、私の住む沖縄市には「こども医療費助成」という制度があることが分かった。この制度では、健康保険に加入している中学校三年生までの子どもの医療費が一部の場合を除いて税金から助成される。制度を利用する際は、受付で受給資格者証を提示する必要がある。この受給資格者証こそが母が持っていたピンク色の紙だった。お会計をしていなかったことも、この制度によるものだった。

私が嫌だと跳ね除けていた薬は、たくさんの人が一生懸命働いて納めた税金でできていると、この時初めて気づいた。税金でできた薬を何の考えもなしに使い続けていたこと、私の体を支えていた税金に煩わしさを感じていたことを心から恥じた。

税や社会に対しての見聞を深め、納税の義務を果たせる大人になれるよう学び続ける。これが、税に対してあまりにも無知だった私への「義務」だ。これを実践し、大人になった時に今までに貰った税による恩恵を未来の子どもたちに返していきたい。

「世界を救う第一歩」

北海道教育大学附属函館中学校 1年 木村 帆希

私は、小学五年生のときに骨肉腫という病気を患い、一年間入院した。その際、母に病室代、食費くらいしかお金を払っていないと聞いた。当時の私には、その意味が全くわかっていなかった。税について、私はあまり良いイメージを持っていなかった。お菓子を買うときにも、消費税として支払う料金が増え、家庭でも節約しなければならない場面があった。ニュースでは、税が増すということで、人々はたびたび反対し、岸田総理のことを、「増税メガネ」と言う人も現れた。このことが原因で税について批判的な意見を持っていたのではないかと思う。今思えば、その何も知らなかった自分がとても恐ろしい。

やはり、税金といえば消費税、所得税などを想像する。私は、損失だけに注目してしまっている。人々もそこに注目し過ぎているから増税を批判するのだろう。しかし、私は、多大な恩恵を受けていた。市の高校生までの医療費が無料という政策が身近にあった。また、病気である私は、手術など全額自己負担の場合は、ざっと一千万円を超える。しかし、小児慢性特定疾患の対象に登録されているため、住んでいる市以外では、医療費に上限があり、そこも身近で、助けられている。もっとも、その分の医者などの医療関係者への給料は国の収入の大半をしめている税金によって支払われている。このように恩恵を受けているのは、私たちのような子供だけではない。道路が整備され、公共施設も整い、生活が困難な場合はお金も支給される。すべての世代が、安心できる充実した生活を送れるような仕組みになっている。また、少子高齢化が進んでいる中で、その対策として、社会保障の費用を増やしている。増税の理由の一つはそれだ。自分には関係ないと思っている人も将来、自分たちが払った税金によって助けられるだろう。

私たちは、納税した分、いや、それ以上の恩恵を受けていると思う。税金を払い、安心した生活を送れる。また、公共施設、学校がつくられる事によって知識などを得られ、それを行使して、新しいものを作る。このサイクルによって、国が発展し続ける。そして、より安心で、快適な生活を送ることができる。しかし、税金に悪いイメージを持っていても、発展するものも発展しない。それどころか、国民が納税しなくなったら国が崩壊してしまう。このように、税金が国を動かすということは、国の収入のうち税金が六十二パーセントを占めていることからわかるだろう。私たちは、税金で安全で充実した生活、知識を買っている。そのため、一人一人がポジティブな気持ちで納税するべきだと思う。そのことで、少子高齢化、地球温暖化などの様々な問題の解決につながればいいと思う。今度は私が納税をして、誰かの命を救いたい。そのために、将来を見据えて、今できる体調管理や学問に励みたい。

命も支えてくれる大切な税

須賀川市立西袋中学校1年 古和田 来々

私は今、とっても健康体である。だが産まれた時はまだ三十一週五日、妊娠月数でいうと八か月後半だった。私がお腹に入っている時に東日本大震災が起き、切迫早産だった母は避難先の知らない土地の病院で入院していましたが、破水し千七百三十六グラムの小さな私を出産した。肺が完全に出来ていなかったため、すぐにNICU（新生児集中治療室）で人工呼吸器をつけられ、一か月半もの間そこで過ごした。医師から母に説明された言葉は、

「障害が何かしら残るかも知れない。他の子よりもゆっくりと成長すると思うので見守るように。」

などといった不安な内容だったという。もし私が母の状況になったら耐えられるだろうかと思った。そんなつらい状況の中でも病院の事務の人から治療費の説明があった。それは高額医療費というものである。本来なら十数万円は治療代にかかっているものが、税金に支えられたのだ。どのような税金なのか調べてみると、乳幼児医療費助成制度というものだった。この制度から助成されている金額の2割が国民から集められた税金で補われていることが分かった。この乳幼児医療費助成制度は公的医療保険制度の一つだということも分かった。先進国であるアメリカでは日本とは違い、医療費を払うことも間々ならず、病院にかかれぬという人まで増えているのが現状である。日本の制度がいかに素晴らしいかと思うと同時に、みんなが払っている税金によって平等な医療を受けられることがとてもありがたい国であると感じた。

今、世の中では様々な病気によって入院、治療を受けている人がいる。その一人ひとりがより良い治療を受け、病気が改善し、笑顔で大切な人と、大切な家族と過ごせる人が増えるなら私は喜んで税金を納めようと思う。

私は今、とても健康だ。何の障害も残ることもなく、毎日テニスをし外でかけ回ることができている。当たり前に見える生活が送れるのは、医師や看護師、父や母のおかげ、そして税の制度が助けてくれたことも大きな一つだ。

これから私は一歩ずつ大人になるための階段を登っていく。その中で様々な税金に出会うことになるだろう。その時に自信を持って大切な税であることを伝えられる人になりたいと思う。

広がる税のカタチ

長野県屋代高等学校附属中学校 2年 古林 快土

最近、耳にして興味を持った税金がある。それはホテルや宿泊施設に宿泊した宿泊者から税金を徴収するという話だ。調べてみると、現在、東京都、大阪府、福岡県ですでに導入されており、今年10月から北海道でも導入予定の観光客向けの税金だ。さらに、長野県も2026年春に「観光振興税」として導入を検討しているらしい。ニュースによると、対象はホテルや旅館などに宿泊する宿泊客で、税収の一定割合を市町村に交付する方針も示している。

この話を聞くと、「観光客から税金を取るなんて！」と思う人もいるかもしれないが、実は観光客や宿泊客から税金を取る観光税は、私たちが認識していないだけで、様々な国で導入されている。例えば、スペイン、イタリア、オーストラリア、アメリカなど、誰もが一度は聞いたことのある国々でも観光税が導入されている。

この観光税にはどのような利点があるのだろうか？私は主に2つの利点があると思う。

1つ目は、オーバーツーリズムへの対策になるということだ。オーバーツーリズムとは、観光客が想定以上に増え、地域住民の生活や環境に悪影響を及ぼす現象だ。最近では、観光客が富士山の絶景を見るために周辺の私有地に無断で駐車したり、騒音問題を引き起こしたりしている。観光税を導入することで、特定の観光地への一極集中が抑えられ、オーバーツーリズムへの対策となるのだ。

2つ目は、観光地での収入を増やし、その利益で観光地の保護ができるということだ。例えば、松本市を考えてみる。令和5年度の松本市の宿泊者数は出てこなかったのですが、外国人宿泊者数になってしまうが、令和5年度で232,780人となっている。この宿泊者たちから100円ずつ徴収すれば、松本市だけで約2,327.8万円の収入となる。松本市の観光地といえば松本城だが、最後に大修理が行われたのは1925年から1930年の間で、それ以降は細かな修理のみで約95年間も修理されていない。しかし、この税収を活用すれば、松本城の修理や保護に資金を充てることができるだろう。これは一例に過ぎないが、このように宿泊客から徴収した税金を使って観光地のさらなる発展や保護に寄与できるのだ。

観光税の導入に関しては、いろいろな意見があるが、私は賛成だ。観光税を導入することで生じる欠点もあるだろう。しかし、利点に関してはここで述べたもの以外にもたくさんあると考える。相互を比較したうえで、私は観光税の導入に賛成する。

「ふるさと納税っていいのかな？」

私の家はしていない。広告でよく流れてくるので気になっていた。私のイメージは、地方の特産品がもらえて得することができるという印象だった。しかし、デメリットも多いことが調べて分かった。

ふるさと納税とは自分が応援したい地域に寄附ができ、代わりに地域の特産品がもらえる。そして今住んでいる地域の住民税が安くなる制度だ。メリットは特産品がもらえること。寄附金の使い道を選べること。寄附される地方は財政が潤い発展できることだ。デメリットは住民が地方の地域に寄附している都市部で税収が減ること。よって公共サービスの質が低下してしまうことだ。

これらの調べたことを通して、私はふるさと納税はしないほうがいいのではないかと思った。なぜなら実際に豊田市ではふるさと納税の影響で、本来納められるはずだった住民税のうち、約十三億円が市外へ流出してしまったそうだ。これは公共サービスが低下してしまう深刻な状況だと思う。私が普段利用している図書館も税金で成り立っている。病院の治療費も税金があるから安く済んでいる。もし自分の居住地に税金を払っていなければ、これらのサービスを利用するには申し訳ないと思ってしまう。サービスの恩恵を受けるからには自分もお金を払って対等な関係で利用したいと私は思った。

また現在のふるさと納税は本来の地域を応援するという趣旨から外れて返礼品合戦になっているという記事もあった。私も調べる前は、ふるさと納税といえば各地の特産品がもらえるという印象しかなかった。応援したい地域に納税する。本来の趣旨を考えたらうえて、私が一番応援したいと思う地域は自分が住んでいる町田市だと思った。そのため、ふるさと納税はしなくていいかなという結論に至った。自分の納めている税金で町が整備されたり、新しい公共施設ができたら嬉しいし、たくさん利用したいと思った。

ふるさと納税にはメリットとデメリットがあり、それぞれを理解して利用するかを考える必要があると思った。「ふるさと納税っていいのかな？」今回私はあまり良くはないと感じたが、もちろんメリットもたくさんあると思う。また大切なことは、ただ税金を払っているという意識ではなく、税金は何に使われているのか。疑問に思うことだと思う。自分で税金の使われ道を調べて、良いと思ったものを選択する。それが税金への理解の一步だと私は思った。私達は毎日税金に支えられて生きている。そのため自分も国、地域の一員であるという意識をもっていきたい。

正直に言うと、私は学校があまり好きではない。だけど、教科書は大好きだ。特に理科便覧や社会の資料集、英語の教科書が面白い。一ページ一ページめくるときに新しい発見があり、わくわくする。眺めているだけで、少し頭が良くなった気分にもなれる。

現在、私たちが使っている教科書は、各学年にあわせた内容で、写真やイラストも多く、カラフルで見やすいもの。二次元コードもついていて、デジタル化が進んでいる。以前、テレビドラマで見た昭和初期の教科書は白黒でイラストが少なく、文字ばかり。さらに、戦争という時代背景の影響で黒く墨で塗りつぶされたものもあった。見ているだけで、悲しい気持ちになってしまった。時代を経て、技術が進歩し、教科書が改良されてきた。それを見て、母は、「今の教科書は、エンターテインメント要素たっぷりできれいだね」とよく口にするぐらい、私にとって楽しい学習道具となっている。いつも何気なく使っているけれど、教科書は本屋にも売っていない特別なもの。そして、時代を反映する歴史の一部だと私は感じている。

そんな教科書が税金でつくられ、一人一冊しか配れないことを知ったのは、小六の社会授業だった。その中で、教科書が無償で一人の生徒に一年間で百万円近く使われていることを知った。あたりを見渡すと、学校は税金であふれていた。その税金は、国民一人一人が税金として納税しているお金ということに、とても驚いた。

いろいろと思いを巡らすと、税金は近い将来の日本を担う私たちへの投資で、私たちに期待と希望が込められている。教科書は、納税しているすべての人たちが私たちに学びの機会を与えてくれたもの。学校は社会に出るための入り口。そう考えると、両親親戚はもちろん、近所の人や会ったことのない人でも日本中の納税者に育ててもらっている気がする。「人生百年時代」の中の義務教育の九年間、短いかもしれないけれどその九年間のおかげで、子供たちの将来が明るくなり、社会に貢献できる人材に成長するのではないだろうか。つまり、「人財」を育てていると思ってほしい。

今回、この作文を書くまでは、税について深く考えることはなかったし、あまり良いイメージを持っていなかった。しかし、税について、知れば知るほど、多くのことが分かった。税金が私たちの生活を豊かにし、身近なところで役立っている事実こそが、子供たちの教育機会を拡大する必要な制度であることを。当たり前のように使われている税金が私たちの幸せを成り立たせていることに気づかなければ、いつまでも、税金の大切さや教育の意味を理解できないと思う。

そして、私は声を大にして言いたい。「明るい未来をつくるために納税をお願いします」と。

「税と命のつながり」

静岡県富士宮市立富士宮第四中学校 3年 宇佐美 玲緒奈

弟が熱性痙攣をおこしたのは、私が中学一年生の夏のことだ。弟とは八つも歳が離れているので私はとても可愛がっている。そんな弟が高熱を出した際、熱性痙攣という発作のような症状に見舞われた。私は見たのは、父が大きな声で弟の名前を呼び、母が電話で救急車を要請している場面だった。父に抱きかかえられた弟は、目を見開いて体が小さくピクピク痙攣してどんなに呼ばれても聞こえていないように見えた。

「弟が死んでしまうかもしれない。」

そう思うととてもこわくなり私は遠くからその光景をただ見ていることしか出来なかった。

「わかりました。すぐ外に行きます。」

受話器を持っている母が足早に外に向かうと、弟を抱いている父もすぐ後を追った。遠くからサイレンの音が近づいてくるのが分かった。私は邪魔にならないよう玄関から外の様子を伺った。私は弟と母を乗せて救急車が出発するのをただ見ていることしかできなかった。

その後、三十分近く痙攣が続いた弟は脳や臓器への障害の心配があるとのことで一晩母と入院する事になった。幸運なことに次の日の昼くらいには、いつもの生意気な弟に戻って帰宅しほっとした。

数日後、入院した病院からの請求書を見ている母に、

「一晩入院するといくらくらいかかるの？」

と聞くと、

「子ども医療費助成制度があるから自己負担金は0だよ。」

と言われ驚き、その制度についてネットで調べてみるといろいろな事がわかった。まず、子ども医療費助成制度の財源が税金であるということ。私が十八歳になるまでに病院へ通院した際支払う金額が一律五百円で良いのも、税によって助成されているこの制度のおかげだった。そして弟があの時乗った救急車が無料なのも当たり前ではない。税金があるからだ。アメリカではこれらを税金でまかなわれていない為、救急車を呼ぶだけでも高額な支払いをしなければいけないそうだ。生きて行く上で必要な医療費が、税によってこんなにも守られているとは。

私も今は税に守られているだけの立場だが、これから社会人として仕事をし、自ら税を納める立場になる。その時は自分がこれまで支えてもらってきたお返しと、あの時弟を救ってもらったお返しに、病気で苦しんでいる人や怪我をした人、そしてこれからの日本を作っていくであろう子供達を守る為のお金を納めている。と自分を誇れる納税者になりたいと思う。

税金とは現在の社会を支える重要な役割を果たしています。例えば、消防や警察、教育、医療、道路の整備など私たちの生活に必要な不可欠なサービスの全ては税金によって賄われています。しかし私は税金の役割はこれだけではないと考えています。その一つが私たち若者の未来を創造することです。

「未来を創造する」とは具体的にどういったことでしょうか。まず第一に、教育への投資です。教育によって未来を担う若い世代を育てることが可能になります。税金を使って教育の質を向上させることで次世代の創造的な人材を育てることにつながるでしょう。

第二に、環境保護と持続可能な開発への取り組みです。現在、地球温暖化や環境汚染の問題が深刻化しています。世界ではSDGsという目標が掲げられ、一丸となってこの問題を解決しようとする動きが高まっています。そんな動きの一部として税金を使用し、環境保護活動や再生可能エネルギーの推進に取り組むことは、未来の世代に健全な環境を残すために重要です。具体的には、環境保護プロジェクトへの資金援助や持続可能なエネルギー源の開発支援などが挙げられます。税金は持続可能な社会の実現に向けた一歩の支えにもなると考えています。

第三にイノベーションと技術革新の支援です。科学技術の進歩は、未来の社会を大きく変える力を持っています。税金で研究開発や技術革新を支援することは、治療法のない病気で苦しむ人々を救えることはもちろん、経済の競争力を高め、新しい産業を創り出すことのできる手段でもあります。例えば、科学技術の研究への資金提供などです。イノベーションは新しい価値を生み出し、より良い未来を作り出すための鍵であると言えます。

私はこの作文を書くためにインターネットや教科書などで税金について様々なことを勉強しました。その過程で税金とは単なる負担ではなく、未来を創造するための強力なツールであると感じました。教育、環境保護、イノベーションへの投資を通じて、より良い社会を築き、次世代が希望抱くことができるようになるでしょう。より良い未来を創造していくには、私たち一人一人が税の重要性を理解し、積極的に関わる必要があると私は考えます。税金は私たちの社会の未来を左右させます。だから私たちは税金をどう未来に活かし、これからの社会の発展につなげていくか考え、自分たちの未来を希望あふれるものにすることが大切です。また、日本国民が支払う税金には、未来の可能性を広げる力があること、またそれは反対に戦争などの悪い方向に向かうかもしれないことを絶対に忘れてはいけません。

私たちが日々負担する税は、同時に私たちの未来を創造し続けているのです。

ある日、父がいつになく真面目な顔をして言った。

「ふるさと納税のことなんだけど。」

ちょうど家族が全員揃っていたので、皆少し驚いて父の方を向いた。

「石川県に寄付しようと思う。能登半島地震の義援金。返礼品はない。助け合いたいから。」

母はそんな父を見て

「私も寄付するよ。」

と言った。今まで納めてきた税金の中で何よりも実感のある納め方だ、と。

その日は能登で過ごしている人々のことを思い、不安に襲われたり寒さに震えていることがないようにと祈って過ごした。

その後、石川県のホームページで能登半島地震に係る寄付について調べてみた。

主要4社の寄付仲介サイトを通じた寄付額は3月下旬までに計五四億円超と過去最多に達する。災害対応に追われる夜災自治体の代理として寄付を受け付ける自治体も百を超え、災害支援の手法として定着してきたと書いてあった。仲介サイトは「災害支援寄付」などの名称で災害時に寄付を募っている。寄付者への返礼品はなく、仲介サイトも自治体から手数料を取らない。

この取り組みは紛れもなく優しさと思いやりの結果が生み出したと思う。私は、何かあった時に手を取り合って助け合う日本のことを誇らしく思った。

また、ふるさと納税の仕組みについて分からないことが多かったので調べてみた。

ふるさと納税とは、自分が好きな自治体へ寄付できる制度だ。人口の多い都会は税収が多くなり、人口の少ない地方では税収が少なくなるといった税収が偏ってしまう問題を解決するために導入された。自分が選んだ自治体へ寄付をすると、お礼として返礼品が届くという仕組みになっている。また、寄付金のほとんどは、年収額等に応じた一定の限度額まで、住民税控除や所得税還付を受けられる。実質負担二千円で地方の特産物などをもらえることから利用者が増えてきているそうだ。様々な自治体の中からどこに寄付をするのか考え、届いた返礼品を見ながら思いを馳せるのは視野が広がる良いチャンスになる。さらに、返礼品を作り、送るという仕事で地元の生産者の皆さんにも活気が生まれ、良い歯車となる。

今回は石川県に寄付をし、返礼品こそ形としては受け取らなかったが、私には目に見えないものを頂けた気がしている。このお金が生きた使い方をしてもらえることを願っている。

寄付をして以来、ニュースで見た被災者の皆さんの様子が自分たちのことのように近く感じ、関心を持つきっかけになった。

あたたかい心を寄付し、助け合う。それが一番の税の使い道なのかもしれない。

税金を身近に感じよう

宗像市立自由ヶ丘中学校3年 河野 響愛

私の父は、警察官です。税金からお給料を頂いて生活しています。以前、父が110番の通報の現場で、「この、税金ドロボーが！」と罵声を浴びせられたことがあると聞いたことがあります。果たして公務員や税金によってお給料がもらえている人たちは税金ドロボーと呼ばれても仕方ないのでしょうか。確かに公務員の給料は、みなさんの税金から支払われていますが父は一生懸命働いています。警察官として働く父の姿を直接見ることはできませんが、テレビの警察24時で父が特集された映像で、頑張っている父の姿も見ることができました。時々夜遅くに帰宅したり、夜中に突然の呼び出しがあり朝方まで帰らない時もあります。危険な現場で負傷し青アザをつくって帰ってきたこともあります。そんな事があっても、社会の安全を守るためにまた仕事に行きます。普段、当たり前のこと過ぎてあまり考えることはありませんが、私たちの生活は税金によって支えられています。税金がどのように役立っているか、あまりにも生活に溶け込んでいるので気付いていないことも沢山あると思います。私たち小中学生の義務教育、お年寄りの年金、医療費、災害時の復興費、など挙げるときりがない程でそれは全て税金で賄われているのです。もし、これらすべてを民間の事業として行う場合は、格差が生じ、平和で安心安全な社会を継続することは困難になってきます。警察の仕事が民間の仕事となれば、公平に職務執行をすることができなくなります。事件事故が発生した時にも、救助や犯人を捕まえたりすることもできなくなってしまいます。私たちが安心して生活できるのは、今の警察が公共の仕事だからだと思います。警察だけではなく、消防、学校の先生などその他のすべての公務員として働く方々の仕事が、公共の仕事だから安心して生活ができるのです。税金がなければ不公平な社会が生まれます。現在の貧富の差が少ない平等な社会があるのは税金のお陰なのです。そして、もう一つの課題として、現在の日本は少子高齢化が進み、私たち若い世代の負担が大きくなることも知りました。中学生の私は、まだ消費税しか納めていませんが、これから大人になるにつれ、納める税金はどんどん増えていきます。実際には「こんなに税金引かれて高すぎる。」とってしまうこともあるかもしれません。そんな時は、身近に警察官として安心安全な生活を守るために働いている父がいることや、周りを見ることで、私たちの生活は税金に支えられていることや物にあふれていることを思い出そうと思います。必ず今の生活は税金のおかげだと気付くはずです。中学生の私たちが大きな役割を担っており、社会に貢献しようとする姿勢が大切なことだと思います。私もその一員として、しっかりと社会に貢献できるような納税者になりたいと思います。

税は幸せを奏でる

西之表市立種子島中学校 3年 橋元 祐奈

世界は音であふれている。学校のチャイムの音、駅のホームの発車メロディ、公園から聞こえる子どもたちの笑い声。これらはすべて日常の中に溶け込み、社会にあたりまえに存在している。日常の中にあたりまえにあるこの「音」と「税」がどのように関わっているのか、この夏深く考えさせられた。

「税」と聞くと、私は真っ先に「増税」という言葉を思い浮かべた。それと同時に、ニュースで見た、負担が増えることに対して不安を語る人、増税への苛立ちを露にする人の姿を思い浮かべた。税の恩恵を受けているはずなのに、人々が税に対してマイナスなイメージを抱いてしまうのはなぜだろう。私自身も、最初は税に対してあまり良いイメージを持っていなかった。しかし、税に対するイメージが大きく変わるきっかけがあった。

学校で行われた租税教室でのことだ。アメリカのニューヨークで救急車を呼ぶと、最低でも約三万円かかるのだと習った。さらに、走行距離などによって追加料金がかかり、一度救急車を呼ぶだけで十万元以上も負担しなければならない場合があるという。これだけお金がかかるのなら、救急車を呼ぶことをためらってしまいそうだ。一方日本では、救急車を無料で呼ぶことができる。だが、救急車を走らせるのにも当然お金がかかる。それを賄っているのが税金だ。いつでも誰でもSOSを出せる環境があるのは、税金のおかげなのだと改めて知った。思えば、日常の中でふれるほとんどのものが税金で整えられている。子どもでも安全に楽しく遊べる公園があるのは、税金による定期的な管理があるからだ。毎日使う駅は、どんな人でも快適に乗車できるように工夫されている。その工夫を実現するのも税金だ。私自身も、税による恩恵があたりまえにあるばかりに、気づくことができていなかった。だから私たちは、その恩恵があたりまえではないことを今一度確認し、税による負担感だけでなく、税の目的や役割にも目を向けていくべきだと思う。

この教科書の裏側には、大人が一生懸命働いて流した汗がある。公園には、老若男女問わず、すべての人の笑顔を望む人のぬくもりがある。すれ違う救急車のサイレンは「必ず命を救う」という覚悟の音だ。これらを実現するのが税の役割だ。税金は目の前の利益や、何もしないで楽をするためにあるものではない。より明るい未来へのための貯金なのだ。税を納めることによって、つながることができる人がいる。救える命がある。だから私も、遠くの町の人の笑顔のために働き、税を納める納税者になりたい。そして、納めた税金がどこで、どのように活用されているのかにも目を向けられる人間になりたい。

税は幸せを奏でる。目を閉じて、耳をすませば、温かい音が聴こえてくる。過去と今、そして未来をつなぐ音が聴こえてくる。

今日も世界は音であふれている。

私たちと税金

沖縄市立美里中学校3年 山城 優海

私は小学四年生の頃から児童福祉施設に入所して生活しています。施設では、一日三食のご飯を食べたり、学校から帰ってきたらおやつがあったり、塾に通って勉強したりする生活をしています。また、体調を崩したときには、病院受診をして薬をもらったり、学習用具が不足していたら揃えてもらうことができます。このような当たり前の生活は税金によって成り立っているとききました。

では、税金はどこから来ているのか、疑問に思い調べてみました。すると、税金は色々な種類があることがわかりました。その中から六つ紹介します。一つ目は消費税です。これは買い物をしたときに払う税のことです。二つ目は所得税です。これは働いている人が給料から引かれる税のことです。三つ目は住民税です。これは住民がそれぞれ住んでいる（会社がある）都道府県や市区町村に納める税金のことです。これも所得税と同じように働いている人が払います。四つ目は法人税です。これは会社が支払う税金です。五つ目は酒税です。これは日本酒、ビールなど、お酒を買ったときにかかる税金のことです。六つ目はタバコ税です。この税も酒税と同様にタバコを買ったときに支払う税のことです。

消費税以外は大人や働いている人が払っていることがわかり、私達の生活はそのような人々のおかげで成り立っているということに気づき私には何ができるのか考えました。しかし、中学生の私には税金を払うこともできないし税がないと最初に書いたような当たり前の生活もできません。考えても答えが出ず施設の職員に尋ねてみると「今いっぱい勉強して将来働いて税金を納める義務を果たしたらいいよ」と言われました。それを聞いて私は今はできないけど将来働けるようにしっかり学校に行き授業を受けようと思いました。私が成人したときにはしっかり働いて税金を納めて社会に恩返しをしていきたいと思います。また、施設には私と同じように家庭の事情で親と離れて暮らしていて税の力を借りて生活している子達がたくさんいます。その子達にも税金について知ってもらえるように話ができたらいいなと思います。最後に今回は施設で生活している私のことを例に挙げましたが税金はすべての国民が当たり前の生活ができるように使われる事になってます。施設で生活している子だけでなく私達学生教科書などにも税金が使われていることがわかりました。なのでみんなが税金に対して興味を持ち考えていくことがまだ働くことができない私達にできることなのではないでしょうか。

税についての提案

江差町立江差中学校 3年 渋谷 美羽

消費税。誰しも払ったことがある身近な税です。「消費税はいらない。」や「高すぎる。」などの否定意見、「消費税は必要。」などの肯定意見。税に対して思うところはいろいろあると思います。私も思うところがあるので、ある提案をしようと思います。

私の提案は「生活に必須なものは税率を下げて、逆に生活に直接必要ないものは税率を上げる」というものです。生活に必須なものというのは、例えば野菜などの食料品、生理用品や乳児、幼児用品などの生活に直接必要なものです。特に生理用品に対しての税率の軽減は学生などの手が届きにくい女性のために必要だと考えます。

生活に直接必要ないものというのは、例えばたばこやお酒などです。これらはなくとも生きていけます。愛煙家や愛酒家の方にとっては厳しいところもあります。ですが、たばこやお酒と距離をとるきっかけにすることでがんになるリスクや事故のリスクを下げることができると推測します。

もしこれらが実行されると、国民の大きな助けとなり、生活に大きな余裕が生まれると考えられます。国民の生活に直接関わる消費税。少子化や高齢化などの深刻な社会問題が進んでいる今の日本に必要なのは国による国民を助ける取り組みだと私は思います。

この意見に対して反対意見も賛成意見もあると思います。ですが、どちらにしても税への理解と興味関心がないと何も言えないと思うので、まず正しく知ることと、興味をもつことが大切だと考えます。

これまで述べてきたように、日本では税の見直しが必要だと考えます。また、ここで取り上げなかった、所得税や相続税、法人税なども見直しが必要だと考えます。国民の声を取り入れ、国が税を見直すことが多くの人々にとって生活が楽になります。

まずは、国民みんなが税について知ることが大切です。税と人々の生活はとも深く関わっています。税について知るとは、言ってしまうと人生を賢く送るための術だと私は考えます。

第三走者・第一走者を目指す！

柏崎市立鏡が沖中学校 3年 シャープ ショーン

僕は、中学三年間陸上部に所属し、リレーメンバーだった。そして走順は、第三走。第一走は瞬発力をいかしてよいスタートを切り、そのスピードを受けて第二走が直線を走り、第三走の僕がカーブを走って、アンカーにバトンを繋ぐ。個人種目の短距離もやっていたが、僕はチームメイト四人でバトンを繋ぐリレーが好きだった。

税の仕組みもリレーに似ているなど思った。働いて税金を納める人が第一走者、その税金を集めて必要なところへ分ける国や県、市町村が第二走者で、そのサービスを受ける僕たちが第三走者。僕は、税のリレーも今は第三走者だ。

僕が受けている税の恩恵は、毎朝家を出た時から始まっている。整えられたアスファルトの通学路、信号や横断歩道もある。背おったバッグには教科書が入っている。教室には机や椅子、エアコン設備もある。そして、先生が来て授業が始まり、放課後には部活動もできる。更に、今、正に僕の中学校では古くなったところを直し、より快適に使えるように大規模な改修工事が行われている。

租税教室で税について学ぶまでは、全て当たり前のことだと思っていた。しかし、教育や学校生活には多くの税金が使われ、このような環境が整えられていることを知った。教育や道路、ごみ処理、病院などの生活や命に関わるものだけでなく、部活動や大会で使用した陸上競技場、幼い頃大好きだったブランコがあった公園や、たくさん絵本を借りた図書館など、心や体を豊かにする施設やサービスにも税金が使われている。

税金がたくさん集まれば、よりよいサービスが受けられて豊かな生活を送ることができるが、税金は自然と湧き出てくるものではなく、所得税、消費税、法人税、相続税など、国民一人一人が納めた限りある大切なお金である。国や県、市町村はその大切なお金を集め、最適な使い道を考えて様々な事業やサービスに割り振っている。

では、税のリレーにアンカーはいるのか？ゴールはあるのか？アンカーはいないのかもしれない。障がいのある人も、困っている人も安心して幸せに暮らせる助け合いの社会という名の競技場を、税のバトンを繋ぎながら皆で走り続けているのかもしれない。安心や幸せがより大きくなり、それが続くことが最終的なゴールなのではないかと思う。

今まで僕はバトンを受け取るばかりだったが、今度は渡す番へ。税のリレーの第一走者、つまり、納税をしっかりできる大人になれるよう、今ある環境に感謝しながら、学生としてやるべきことに一生懸命取り組んでいきたい。

ヘラルボニーと障がい者の自立支援

小金井市立小金井第二中学校 3年 中村 優作

海外出張から帰国した父が、機内でもらったという、とても印象的なデザインのアメニティ・ポーチを母と姉に渡していた。

そのデザインは？と聞いたところ、岩手県盛岡市にある「ヘラルボニー」という会社で知的障がい者が描いたものであった。すごく興味深い話だったので、ホームページを開くと、TOP画面が頭に飛び込んできた。

『「異彩を、放て。」知的障害。その、ひとくくりの言葉の中にも、無数の個性がある。豊かな感性、繊細な手先、大胆な発想、研ぎ澄まされた集中力…

“普通”じゃない、ということ。それは同時に、可能性だと思う。私たち、この世界を隔てる、先入観や常識という名のボーダーを超える。そして、さまざまな「異彩」を、さまざまな形で社会に送り届け、福祉を起点に新たな文化をつくりだしていく。』

この表現にとってもワクワクするような気持ちになりながら、その会社のYouTubeを見ると、「知的障がい者の作家さんとライセンス契約をし、そのアートをモノだったり、コトだったり、場所に展開していくことによって、知的障がいのイメージを変えるスタートアップ。」という事業を展開しつつ、福祉作業所の施設でもあるということだった。

もともとは双子の兄弟が作った会社で、兄が自閉症、その個性を活かすという視点から起業され、いまでは大手航空会社、化粧品会社、クレジットカード会社などとのコラボレーションで、そのデザインを通して社会に異彩を放っている。

このスタートアップ企業を調べていくうちに、さらに感動を受けたことがあった。それは、障がい者はどうしても社会的扶助、すなわち国や自治体から補助を受けるなど、税金に助けられなければならなかった存在だったが、納税する側に回る事ができた。ということをととても嬉しそうに話していたことだ。

大人には納税の義務がある。ただし、どうしてもそれが出来ない社会的弱者の人たちがいて、そもそも税金とはそのような人たちのために使われるものだと思うが、そうした環境に身を置いている障がい者の方々は、決してその環境を良しとせず、自立して社会的責任を果たそうとしている。

私は、このエピソードから、改めて日本の素晴らしく勤勉な一面を見た思いがした。現代社会では、SNSで匿名による誹謗中傷が起きるなど、社会全体が病んでいると思っていたが、まだまだ捨てたものではないと。

これから十年後、二十年後は、私たちが中心となって社会を形成していくことになるが今よりも間違いなく多様性社会が進み、包摂性の高い社会となるような基本的思考を持ちつつ、こうしたスタートアップ企業の取り組みの姿勢を、今後とも大切にしていきたいと思う。

「救う」

山梨大学教育学部附属中学校 3年 堀之内 颯

二〇二四年八月八日。宮崎県で震度六弱の揺れを観測する地震があり、気象庁は南海トラフ地震の想定震源域では、大規模地震が発生する可能性がふだんと比べて高まっているとして、「南海トラフ地震臨時情報」を初めて発表し、巨大地震への注意を呼びかけました。

僕は今まで経験したことのないこの情報に驚き、恐怖を覚えました。そして今年の一月初日に発生した能登半島地震の悲惨な情景を思い出しました。倒壊した家屋、歪んだ道路、火災、土砂崩れ、断水…。たくさんの人の命と大きな被害を出したあの地震から七カ月。完全な復興は遂げていないにしろ、あの歪んだ道路や倒壊した建物などはどうやってここまで修復されたのだろうか、ふと疑問に思いました。そこで調べてみると、様々な場面で「税金」が使われていることがわかりました。

まず、災害発生時、現地に向けつけ救助活動や捜索活動に尽力を注いでくれた自衛隊の方々、全国の消防や警察の方々が現地で活動するための派遣費用や給料、それに各自治体があらかじめ備蓄していた非常食なども税金で購入されたものがほとんどだということがわかりました。また、倒壊した市役所や学校などの公共施設の復興にも税金が使われていることがわかりました。災害は決して起きてほしくはないけれど、税金が被災した方々を救う手立てとなっていることを知り、僕の税金に対するイメージは大きく変わりました。

普段僕達は、きれいに整備された道を歩き、上下水道の整った環境で安全な水を飲み、警察や消防の方々のおかげで安心して安全な日常を送ることができます。病気になれば何の心配もなく病院を受診し、学校に行けば机もイスも設備の行き届いた教室で、四月になれば新しい教科書が配られ、恵まれた環境の中教育を受けることができます。でもこの当たり前だと思っていた生活が当たり前ではないことを災害を通して知ることになりました。

いつどこで何が起こるかわからないこの時代。今まで税金は、みんなが必要とする施設やサービスにかかる費用を、みんなで出し合う「会費」のようなものだと思っていたけれど、実際は困っている人を救う助け合いの制度とも言えるのではないのでしょうか。中学生の僕ができることといたら、毎日の生活の中で消費税を納めることくらいしかないと思っていました。それも漠然ととられているという意識の中で。けれど自分が納めた税金がいつか誰かの役に立ち、その人達の助けになるのなら、それは決して「義務」ではなく「誇り」に変わります。

先人達が僕達のために健康で安心安全な恵まれた環境、恵まれた生活を築いてくれたことに感謝し、次は僕達が日本の未来を救う。

皆の意識で守られる

福井大学教育学部附属義務教育学校 8年 坪川 心優

「三日分で。」私が風邪をひき、病院で医師から薬の処方日数を聞かれた際の母の答えだ。「えっ三日分でいいの？」医師が少し驚いた。何故三日分にしたのか私も気になり、病院を出てから、母に尋ねた。咳がひどくなってきたから診てもらったが、感染症ではない風邪なら、いつも薬を飲めば、三日以内に落ち着く。一週間分貰っても、治ったら飲まないし、余った分は捨てることになるから勿体ないとのことだった。また、「解熱剤どうしましょう」という問いにも、「前回頂いた本人の薬が残っているので大丈夫です。」と断っていた。そんなに処方薬を減らして、意味はあるのだろうか、疑問に思った。そんなある日、テレビから「飲み残した薬は薬局へ」と聞こえてきた。私は、それがとても気になり、詳しく調べてみることにした。

すると、毎年かなりの額の残薬が廃棄されていること、また、残薬を薬局へ持っていくと、処方日数調整ができる可能性があることが分かった。これら医療費の一部は、税金で賄われている。ということは、知らず知らずに税金を無駄にしているかもしれないと、驚愕し、母の行動は、意味のある大事なことだと気付かされた。

さらに調べていると、救急車も深刻な問題にあることが分かった。日本では、原則的に誰でも救急車を無料で利用できる。当たり前を感じているこうした救急体制が整備されていることは、世界的に見ると稀なのだ。そして、この制度も納税によって支えられている。しかし、救急出動件数は、年々増加しており、令和五年は、七六三万以上と過去最高だった。要因は、高齢者の傷病者の増加・熱中症傷病者の増加だ。高齢化が進み、地球温暖化が地球沸騰化と言われる昨今、これらの救急搬送は、今後も増えることが考えられるが、必要としている人に、税を通して救助の手が届けられる制度には、国民の一人として誇りにすら感じられる。しかし、問題は「緊急性の低い傷病者の増加」があることだ。傷病搬送内訳で見ると、なんと四八%が軽症だったのだ。私の祖母が倒れ、救急車がすぐ来てくれた時の頼もしさ、安心感は、今でもはっきり覚えている。こうした救急体制が整備され、誰もが平等に医療を受けられる制度は、納税によって支えられている。納税以上の恩恵だ。しかし今後、これらに係る費用は増加していき「すぐに来てくれる」救急車は難しくなってしまうかもしれない。これは、重大な問題だ。

「三日分で。」母の行動は、日本全体で見たら、とても小さなことだ。しかし、国民全員が税に関心を持ち、大切に使う意識を持てば、大きな節税になり、この医療制度を、未来の日本を守っていけるのではないかと思う。

私の夢は、医者になることだ。将来、目の前の患者を救うだけでなく、納税という形で見えない患者も救える大人になろうと思う。

暮らしの基盤

御殿場市立南中学校 3年 チャクジュ アイシェ

私は日本とトルコのハーフである。私が幼い頃、トルコに住んでいた時のことである。家族と海沿いの町を散歩していたら、「私達にお金を恵んで下さい」と貧しい親子が食品トレーを手にこちらに寄って来たのだ。私はその初めての出来事に驚いた事を今でも覚えている。その他にも、道がでこぼこだったり町のゴミ袋が回収されずに放置してありゴミが散らかっている所を目にした事もあった。しかし、日本に帰って来てからはそういった事を体験した事はない。道路が古くなれば工事をしているし、毎週決まった曜日にゴミの回収をする。このトルコと日本の環境の違いの原因を調べてみると、「税」が関係している事が分かった。

国民が納めている税金は道路の整備や家庭から出るゴミの処理にも使われている。日本ではこれが当たり前だが、トルコでは地域によって経済格差があるため、町のために使われる税金の金額も異なり、環境に不備が出てしまうんだと思う。これらにかかる税は消費税などでまかなわれている。

私は、様々な税の種類の中で一番身近なのは消費税だと思う。二〇一九年十月から消費税率が十パーセントに引き上げられ、引き上げられた分の消費税は国民の全世代の社会保障のために使われているらしい。また、私達はまだ子供だから税に対して深く関わっていないというわけでもなく、私達でも消費税を払っているため、小さな力だとしても、社会に貢献しているのだ。

幼い頃にいったトルコの町は十年以上前だから、今はどうなっているかは分からない。もしかすると日本と同じくらいに整っていて、問題が解決されているかもしれない。しかし、どの国でも税の課題を抱えている。学校で教科書を使って勉強が出来たり、住んでいる町の安全を守ってくれる人がいるという事は、陰で税がはたらいている証拠だという事だと思う。今の日本は物価の上昇や増税の不安があるが、それと同時に私達は税に支えられている事を忘れないようにしたい。

「税が成り立っている日本に生まれてよかった」よりも、「税に対して悩み・課題を抱えている人々を見捨てない」と考える事が本当の「税への恩返し」なのではないか。

助けてくれた税金

高梁市立高梁中学校1年 中村 徠夢

「息を吸って一。止めて。」

パシャ。

「はい。楽にしてください。」

次は血液検査へ向かう。ゆっくりと動くエスカレーターに乗りながら、僕は自分の体のことを心配していた。

血液検査の後、お医者さんから、

「この骨がへこんでいますね。漏斗胸という病気です。」

と言われた。重度な場合は、へこんだ肋骨や胸骨が肺や心臓を圧迫して、機能異常につながるそう。僕は手術をすることになった。手術の日程など母が話し合っていた。その中で、手術代が百万円を超えることや、手術代とは別に部屋代がかかることなどが聞こえてきた。かなり高額なお金がかかることに驚き、申し訳ない気持ちがしてきた。

手術までに何度か、僕は病院へ通い、検査をした。内心僕は、こんなに検査ばかりしてどんどんお金がかかるんだろうかと心配していた。ところが、母は、

「高梁市は、子ども医療費を助成してくれるから本当に助かるわ。」

と明るく話しかけてきた。税金による補填で僕の医療費は0円になる。こんなありがたい制度があることを初めて知って、感謝と同時に、そのお金はどこから出ているのか不思議に思った。家に帰り父に聞いてみると、

「そのお金はみんなの税金から支払われているんだよ。」

と教えてくれた。調べてみると、医療費や年金などの社会保障費、警察や消防などの公的サービス費、教育費など、様々なことが税金でまかなわれていることが分かった。

中学生の僕にとって、税金は身近な話題とは言えない。集め方や使い方など、全く関心がなかった。しかし僕は、自分の手術のことで、名前も知らない、顔も見つけない人が納めた税金のおかげで、どれだけ助けられたか実感することができた。

このような体験をして社会を見てみると、税金のおかげで安心して生活できている人がたくさんいることに気付くことができた。僕の家付近には、デイサービスなどの介護を利用する人がいて、迎えの車がしょっちゅう止まっている。みんな笑顔で車から降りてくる。きっと楽しい時間を過ごすことができたのだろう。数年前の豪雨で壊れた道路はきれいになった。誰かを救う救急車の音が今日も聞こえる。

様々な場面で税金の恩恵を受けていることが分かったが、これは国民一人一人がきちんと税金を納めているからでもある。僕はまだ恩恵を受けるばかりだが、やがてはきちんと納税し、誰かの安心や笑顔に少しでも貢献できる大人になりたいと思う。

当たり前とは

高知県立安芸中学校3年 谷渕 晴音

今年度、僕が通う学校は新しい校舎に移転した。以前の校舎には三年間通い、思い出や愛着があり、引っ越す前は少し寂しい気持ちがあった。しかし、引っ越してみると、真新しい校舎は新鮮で、気持ち新たに学校生活を送ろうと自然に思えた。

この新校舎の建築工事を、僕は通学の汽車の窓から時々見ていた。大きな重機が動いていたり、資材がたくさん積まれていたり、多くの人が働いていた。校舎の形が少しずつ出来上がってきた頃、ふと費用について考えたことがあった。「費用は莫大だろうな、その費用には税金が使われているんだな。」と思った。

帰宅してから税のことを調べてみた。税には所得税や法人税、消費税などの国税と、住民税や固定資産税などの地方税があり、日本には約五十種類もの税があることに驚いた。そして、この税金は、学校の建築以外にどんなことに使われているのか、身の回りの例を調べた。

朝起きて顔を洗うために使う上下水道は税金で整備されている。通学の際に通る道の道路や信号なども税金でつくられている。学校の校舎や机、椅子、教科書やパソコンにも税金が使われている。僕が食べる食品を生産する農業や漁業の支援にも税金は使われている。

今年の正月、家族の体調が急に悪くなり、夜中に救急車で病院に搬送され、一週間後元気に帰ってくることができた。病院で診てもらうのが、あと少し遅かったら大変だったと聞き、間に合って良かったと強く思った。急病やケガのときに利用する救急車にも税金が使われているのだ。

医療や年金、介護や福祉などの社会保障にも税金が使われ、安心できる暮らしに役立っている。

当たり前だと思っていた生活は、全て税金によって支えられていた。

国や地方公共団体は、僕たちが健康で文化的な生活を送るために、個人ではできない仕組みをつくり、サービスを行っている。これらには、多くの費用が必要であり、皆で出し合っているのが「税金」なのだ。僕たちの当たり前の生活に税は必要不可欠である。

しかし、少子高齢化が進む日本では、社会保障の費用が増大し、その費用を負担する働き手が減り、税金で賄いきれない現状がある。この課題は深刻さを増している。前述した当たり前の生活が当たり前でなくなる世の中を想像すると、とても不安になる。

そうならないために、僕が今できることは、税金で勉強できている学校生活を精一杯頑張ることだ。税金について学び、正しい知識を持ち、適切な納税をすることが大切である。そして、現状の課題についても正しく知り、深く考えていきたい。この社会を担っていく僕たちが、皆が安心して暮らせる当たり前を支えられるようにならなければならない。

「かわいそう」ではございません

福岡県立門司学園中学校3年 小田 孝太郎

二〇二三年六月。我が家にショッキングな報告が舞い込んできた。祖父が運転免許認定講習で不合格となったのだ。理由は、認知能力検査だった。祖父は笑ってこう言った。「免許返納時期がきたと神様のお告げだよ。」と。しかし、家族の不安は的中した。数日後、祖父はアルツハイマー型認知症と診断された。

それから、祖父の生活スタイルは大きく変化した。車での外出がなくなり、人とのふれあいも一気に減るにともない認知症も進行していった。進行を遅らせる薬も飲んだが、地域包括支援センターの方とも相談して、小規模多機能型居宅介護を利用することとなった。様々な介護様式があるが、祖父が可能な限り自立した日常生活を送ることを望んだからだ。

しかし、小規模多機能型居宅介護は、通い宿泊、介護訪問と利用できるため、予想以上に高額な利用料金だった。家族一同不安な中、ケアマネさんの言葉で安堵に包まれた。一割の自己負担と、九割は社会福祉費、いわゆる税の恩恵を受けることができるということだ。「ありがたいよね。でも、孝太郎達が社会に出る頃は、今以上にこうした税金がお給料から控除されるから、かわいそうだよね。」と母が口にした。

確かに、社会科の学習で益々少子高齢化が進み、約二十年後、高齢者一人を一、三人の働き手で支えることになるかと学んだ。しかし、本当に僕達は本当にかわいそうなのだろうか。

その後、前向きに施設に通い出した祖父に、「安心して充実したお世話を受けられるのは、税金の力もあるよね。でも、これから社会に出る僕達は、こうした税金が今より一層増額されるだろうからかわいそうと思う。」と尋ねた。すると祖父はこう口を開いた。「税というと、どうしても多くの人を取られているといった負のイメージがあるからね。『血税』という言葉もあるくらいだから。」と。祖父は、税金を納める立場になった際、『潔税』と捉えるようにしたらしい。それは清潔（クリーン）に税金を使って、みんなが有意義な生活を送ることができるなら潔く納めようと決めたからだそうだ。続けて祖父は、「ゆりかごから墓場までという言葉。これは、イギリスで一生福祉を充実させる政策をとった当時のスローガンだよ。日本も福祉がより充実するために自分ができることは。」と僕に尋ねた。充実した福祉のために、未来の僕にできること。納税者としての義務を果たすのはもちろん、税金を有効に活用できる人を選ぶ選挙に足を運ぶこと。十四歳の僕には、今はこれだけしか思い浮かばないが、将来、税金と真摯に向き合うと祖父と約束した。

日々祖父の認知症は進行し、いつか僕の顔も名前も忘れていくだろう。でも、まだまだ祖父には長生きして今を精一杯生きてほしい。

結びにあたりこう伝えたい。僕達は決して「かわいそう」ではございません。一人一人の税に対する意識で輝く未来が待っていると。

日本のこれから

大分県立大分豊府中学校3年 小川 茉莉愛

八月八日、宮崎県で震度六弱の地震が発生し、気象庁から初の「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」が発令された。これにより、人々は地震への関心が大きく高まった。私も地震について詳しく知りたくなり、「地震と税金」について調べてみた。

皆さんは「復興特別所得税」というのを知っているだろうか。これは二〇三七年までの間、東日本大震災の復興のために必要なお金を、自分の所得税に上乗せして二.一%納税するというものだ。私は税が震災の復興に役立っているということを初めて知った。私は税金に対してマイナスなイメージが大きかったが、日本人は復興のためにみんなで納税をして、税金によっていろんな人が助けられていると知って、税金はいいものだと思った。

そんな日本の税金だが、実は今のままでは全然お金が足りていないということも分かった。「国債費」は、簡単に言えば国の借金である。国の借金は今の若い人たちが負担し、税金によって少しずつ返していかなければならないお金だ。この借金の残高は、今年で一〇五兆円になると見込まれている。

もし、南海トラフが起きたらどうなってしまふのだろうか。人々の生活に必要な不可欠である、電気、水道、ガスなどのインフラは全て止まり、道路は断層や液状化などで割れたり、水浸しになる。また、建物は崩壊して、最悪の場合火事や津波に巻き込まれるかもしれない。そして、日本の経済を支えている太平洋ベルトが、大きな被害にあってしまう。これらを復興させるにはたくさんのお金が必要になり、予想被害額は一四〇兆円にのぼるとされている。この額は、日本の借金の額を上回り、日本の歳出の約十二倍、日本の国内総生産の約二倍である。私はこの額の大きさを知って驚き、とても危機感を持った。日本は借金が多いにも関わらず、地震によってたくさんの被害が出てしまうと、日本の財政はお金がなくて詰んでしまうかもしれないと考えたからだ。

そんな最悪な事態から逃れるにはどうしたらいいのか。私は日本がまだ地震が来ないうちに、「南海トラフ地震対策税」をつくり、「復興特別所得税」のように人々から少しずつ納税してもらいたいと考える。未来へのお金を備蓄して、将来の日本が地震によって財政難にならないように。被害にあった人が安心して生活できるようにするために。

税金は多くの方が、「払うのが嫌」「負担が大きい」と考えるだろう。しかし、私たちの生活は税によって支えられており、私たちがこれからの将来、安心して生活するために税は、必要不可欠なものだと思える。国の借金を返すことも、これから起こるかもしれない災害のことも、将来を担う私たちには他人事では済まされないことである。私は税金の理解を深め、日本のこれからのことを考えていくことが大切だと思えた。

「税金を減らしてほしい」「何にそんなに使っているの。」誰もがそう思ったことがあるのではないだろうか。私は「税金なんてなくなればいいのにな。」と税金の仕組みも分からないまま簡単に考えていた。

二年生のときにあった財政教室で「財務大臣になって国の予算案を作ろう」という授業を受けた。この授業は私にとって税金の大切さに気づかされ、国のお金について考える大きなきっかけになった。

この授業では日本の借金を減らす国の予算を考えるという内容だった。では国は何に一番お金を使っているのだろうか。一番は社会保障だった。そこで私達は少しでも社会保障を減らすことができないか考えてみた。しかし、少子高齢化が進んでいる日本では年金を減らすことや、子育て環境を整えることは日本の未来にとっても重要なことなので簡単に減らすことはできなかった。そこで社会保障以外の防衛費や公共事業費についても目を向けてみたが、ここでも日本を守ってくれている自衛隊やすでに削減が行われている公共事業はこれ以上減らすことができないと考えた。そうすると、歳入を増やすしか借金を減らす方法はない。税金はすでに歳入の六十%以上約七十億円も負担していてすでに日本の支出を大きく支えている。現在でさえ税金は高くなって、批判を受けているので税金を増やして歳入を増やすことはできない。最終的に授業内で納得できるような案を作ることはできなかった。

しかし、私は案を完成させる以上にこれから生活していく中で大切なことを学ぶことができた。特に、税金では十%の消費税でさえ「高いな。下げてくださいかな。」と思っていたこともあったが、税金の大切さを知った今では、この少しの十円でも日本を支えているんだなと感じるようになった。その他にも、私が住んでいる離島では部活の大会や学校行事の遠征を島が九割補助してくれたり、給食費が無料だったりなど多くの費用を村が負担してくれている。これも税金が関係していると知ってからは、大会は今まで以上に結果を出せるように練習を頑張ろう、給食を残さず食べようなど少しのことだが学校生活を送る中でも考え方や過ごし方が変わった。

このように税金を知ることで学ぶことはたくさんある。

それでも疑問に思うことや必要ないという意見もあると思うが、税金について知ることが理解してくれる人を増やす一番の近道だと思う。